



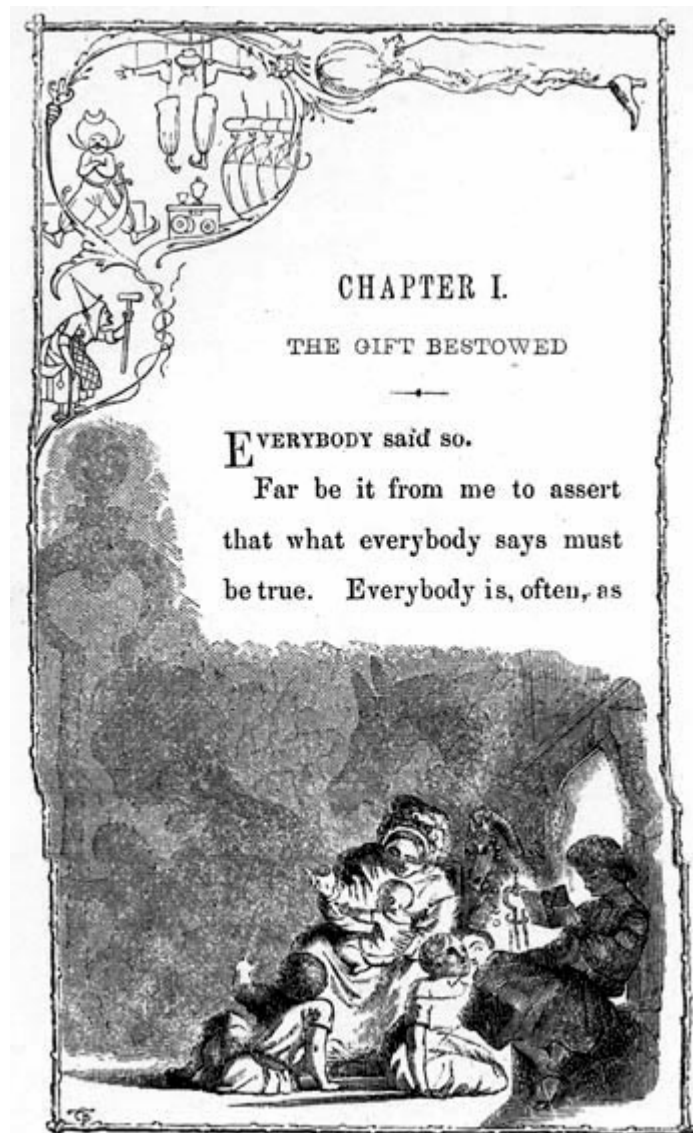
チャールズ・ディケンズ『憑かれた男』

藤本隆康・篠田昭夫・志鷹道明（共訳）

あぼろん社、1982



【三】



第一章

授けられた贈り物

誰もがそう言った。

誰もが言うことであるから、真実であるに違いないと主張するつもりは毛頭ない。誰しも正しい場合もあれば、同じように間違える場合もしばしばあるものだ。世間一般の経験からすると、人間誰もがたびたび過ちを犯しており、ほとんどの場合いかなる過ちであるかを知るのに、実にうんざりするほどの長い時間がかかるものだから、頼るべき先例すらも絶対に正しいとは言えないのである。時には誰もが正しいという場合もあるかも知れない。

しかし、ある古謡の中で、ジャイルズ・スクロギンズの幽霊がいみじくも指摘しているように、「それは決まりでも何でもない」¹ ものなのである。

幽霊という言葉が出たところで本筋にもどろう。

誰もが彼は憑かれた男のようだとやった。誰もがという言葉によって私の言わんとするところは、誰もがそこまでは正しい、というほどのことなのである。彼は実際、憑かれた男のように見

【四】

えたのである。

彼のこけた頬と落ちくぼんでぎらぎらと輝く目、引き締まって均整がとれているが、黒服をまとして得体の知れない不気味さを漂わせる彼の姿、そして——あたかも全生涯を通して、人間性という大海原がぶつかり打ちのめしてきたただ一つの標的となってきたかのように——もつれた海草のように彼の顔に垂れている白髪の間違った髪。それらを目にした者で、この男が愚かれた男のようだと言わない者がいるであろうか？

沈黙にひたり、物思いに沈み、陰気で打ち解けることがないために暗い影があり、人を避けて明るく振る舞うことなど絶えてなく、遠く過ぎ去った場所や時に思いを馳せて、心に湧く過去の余韻に耳を傾ける狂気じみた彼の様子を見た者で、それが愚かれた男のものであると言わない者がいるであろうか？

緩やかで、深味があり、重々しく、そして無理に押し殺しているように感じられる生来の豊かさと響きの良さを持っている彼の声を耳にした者で、それが愚かれた男の声であると言わない者がいるであろうか？

書斎と実験室とを兼ねている、奥まった私室にこもっている彼の姿——彼はあまねく世に知られた化学の権威であり、熱意に燃える多くの学生たちの耳目をその唇と手の動きに日々引き付けていた——を目にし、冬の夜ただ独り薬品と実験器共と書物とに取り巻かれている彼の姿、——暖炉の火が彼の周りの奇妙な物体を照らし、その炎のゆらめきが無数の妖しい物影を生み出す中で、笠をつけたランプの影だけは巨大な甲虫のように壁に映し出されてじっとしている。そして

【五】

幾つかの亡霊（液体を入れたガラス瓶の映し出した影なのであるが）が、自分たちを分解

¹ 結婚直前に恋人ジャイルズ・スクロギンズを亡くした田舎娘の夢の中に、スクロギンズの幽霊が出て娘に言い寄るが、娘は「あたしは生きているのよ、お馬鹿さん」と言って断る。それに対して幽霊は「いや、それは決まりでも何でもない」と応酬する。この古謡は、ディケンズの「幽霊屋敷」（一八五九）にも出てくる。

してその構成分子を火と蒸気とに還元する彼の力を知っているかのように、心の底から震えおののいている——研究を済ませ、椅子に座って錆びついた火格子と炎の前で物思いに沈み、まるで話しているかのように薄い唇を動かしてはしているが、死人のような静けさをたたえる彼の姿を目にした者で、この男が愚かれた男で、この部屋も愚かれているようにと言わない者がいるであろうか？

誰しも、少し想像の翼を広げるだけで、彼の周りのすべてのものがこの愚かれた様子を帯びていること、そして彼が愚かれた場所に住んでいることを容易に信じることができるであろう。

彼の住居は実に寂しく、地下納骨堂のようであった——それは寄付金で建てられた古色蒼然とした学寮の、うらさびて奥まった部分にあったが、この建物は、かつて広々とした所に建てられた立派なものであったのに、今や忘れ去られた建築家たちの時代遅れの酔狂の跡をとどめているだけで、煤煙と歳月の流れと風雨で黒ずみ、脹れあがって行く大都会の建物によって四方八方から押し潰され、古井戸のように石と煉瓦で窒息していた。そのちっぽけな中庭は、この建物の重苦しい煙突よりも高い所に、時とともに街路や建物が建造されたために生じた深い穴底に沈んでいた。そこにある老木は、立ち昇る勢いが極めて弱いのか、天候がふさぎこんでいるかして、庭にまで低く垂れこめる気を起こしてくれない限り、近隣の煙からもまったく相手にされなかった。中庭の草地は微のわいた土を相手に、草であることを見せようと、あるいは折り合いをつけた格好でも、その争いに勝ち得ようとして苦闘を続けていた。たまたま迷い込んだ通行人がこの陰気な場所は一体何だろうかと訪かりながら上から覗き込むだけで、その静まり返った舗道には足を

【六】

踏み入れる人も少なく、人の目に触れることさえまれなことであった。煉瓦で畳まれた片隅に日時計があった。そこには百年もの長い年月の間、日光が射し込むことはなかったが、太陽が怠慢であることの埋め合わせとして雪が他のあらゆる場所から消えてしまった後も、それは何週間もそこに残っていた。そしてそこでは、他のあらゆる場所が穏やかな静けさをたたえている時でも、御機嫌の良くない東風が、巨大なうなりごまのように渦を巻いて吹き荒れていた。

彼の住居の中心部——奥まった——暖炉のあるところ——は、実に陰うつで古臭く、緩みがきていたが堅牢にできていて、天井には虫の食った梁が渡してあり、頑丈な床は大きな檜造りの炉棚に向かって緩やかに傾斜していた。その住居は押し寄せる周囲の建物によって周囲をすっかり塞がれながら、流行や時代様式からは、まったく掛け離れて存在していた。実に深閑としていたが、遠くで声がしたり扉が閉められたりすると、その音がこだまとなって響き渡った、——こだまは天井の低い幾つもの廊下や空部屋だけに終わらないで、ノルマン風建築様式のアーチが半ば地中に埋れ、今では誰も顧みることのない地下納

骨堂の、重苦しい空気によって、その息の根を止められるまで、轟^{とどろ}き、響き渡った。

真冬の黄昏^{たそがれ}時、この住居にいる彼の姿を見ると良い。

ぼんやりと霞んだ太陽が沈み、風が鋭い唸りをあげて吹きすさぶ時に。色々な物の形がぼうと霞んで脹れあがっていく——しかし完全に見えなくなってしまうまでには至らない——ちょうどそうした暗さの時に。炉辺に座る者が、暖炉の炎の中にとてつもない顔や姿、山々や深淵、伏兵や軍勢を見始める時に。通りを歩く人々が頭を下げ、風に背を向けて足早に駆ける時に。余儀な

【七】

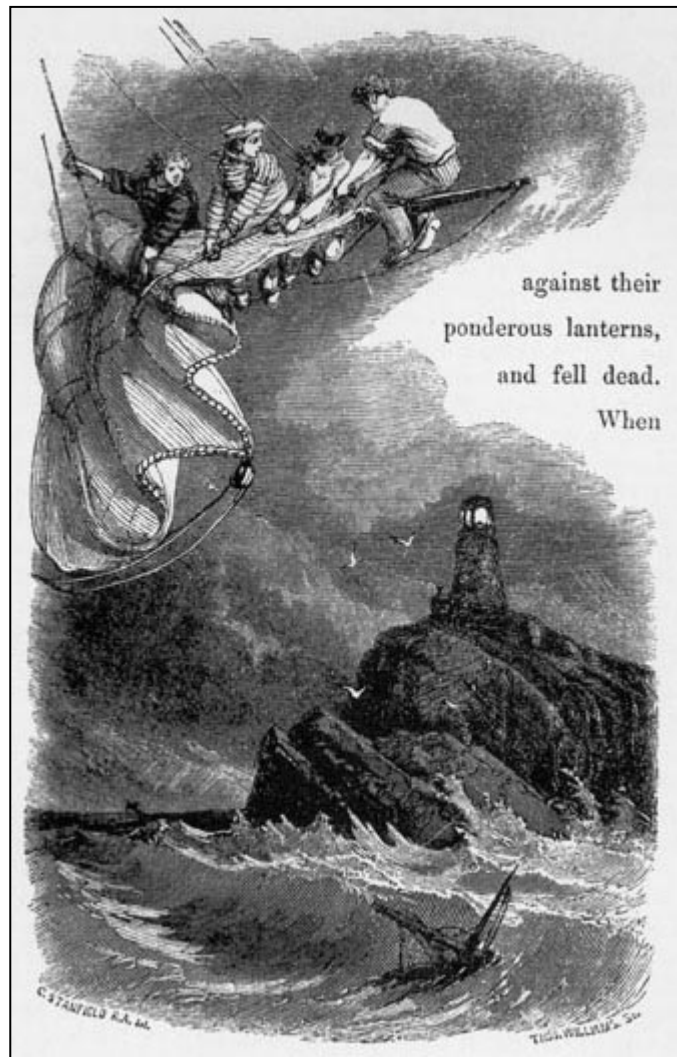
く風を真向かいから受ける人々が、吹き流されて瞳毛に舞い降りてくる雪片——舞い落ちる雪はほんの僅かだし、それもまたたく間に風に吹き飛ばされてしまうので、凍りついた地面には何の痕跡も残らない——に肌を刺されて、風が怒ったように吹き荒れる街角^{たたず}に佇む時に。家々がその窓をしっかりと閉じて、家の中を暖かくしている時に。点灯されたガス灯の炎が、それが点されなければ暗さをどんどんと増していくはずの賑やかな通りや人気のない通りでぱっと燃え上がる時に。人気のない通りに迷い込んで震え上がっている歩行者が、台所で焚かれるあかあかとした火を覗き込み、家に辿り着くまで何哩^{マイル}も続く家々の夕餉^{ゆうげ}の香りを嗅いで、空腹のもたらず激しい食欲をそそられる時に。

陸路を辿る旅人が厳しい寒さに震え上がって、疲れきって暗澹^{あんたん}とした風景を眺め、吹きつけてくる風に服を煽られ身を震わせている時に。凍りついた帆桁^{ほげた}に昇って見張りについている航海中の船乗りが、荒れ狂う海上で恐ろしいほど揺さぶられている時に。岩礁や岬に立つ燈台がわびしように警戒の光を投げかけ、行き暮れた海鳥がその巨大な灯室にぶつかり息絶えて墜落する時に。炉辺^{とぎばなし}でお伽噺^{とぎばなし}を読んでいる子供たちが四つ裂きにされて盗賊の洞窟に吊されているカシム・ババ²の寝室にことを思って震え上がったり、商人アブダ³置いてある箱からいつも飛び出してくるあの松葉杖を持った恐ろしい小人の老婆に、今夜あたり、寝室までの長く寒々とした暗い道のりの途中、階段のあたりでひょいと出くわすのではないかという小さな不安を抱く時に。田舎で、黄昏のほのかな光が並木の端から薄れて行き、高く弓形にたわむ、木々が陰気で黒々と

² 『千一夜物語』の中の「魔神の物語」に出てくる人物。

³ 『千一夜物語』の中の「アリ・ババと四十人の盗賊」に出てくる人物。

【八】



【九】

したたずまいを見せる時に。広々とした樹園や森の中で、丈の高い湿った羊齒^{しだ}、じくじくした苔、幾重にも積もった落葉、そして木々の幹が、光を拒む濃密な暗闇の中に姿を没する時に。霧が溝や沼地や川から立ち昇ってくる時に。古びた屋敷や農家の窓の明りが、それを見る人の心を明るくする時に。水車が止まり、車大工や鍛冶屋が仕事場を閉め、通行税取立て門が閉じられ、鋤や馬鍬^{まぐわ}がぼつんと畑に残され、農夫も牛馬も家路を辿り、教会の時計が真昼よりも一層重々しく響き渡り、墓地のくぐり門をその夜はもはや開ける老もいなくなった時に。

一日中閉じ込められた後、召集されて集まる無数の幽霊のように、今や群がり集まってきた影法師を、黄昏が至る所で解放する時に。これらの影法師が部屋の隅に洪面^{たたず}をして佇

み、半ば開いている扉の背後からしかめ面を覗かせる時に。それらが人気のない部屋を完全に支配する時に。人のいる部屋でそれらが、暖炉の火が弱々しい間は床や壁や天井で踊り回り、炎がぱっと燃え上がると引き潮のように消えて行く時に。それらが気まぐれに家庭内の色々な事物の形を愚弄して、乳母を食人鬼に変え、木馬を怪物に変え、半ば恐れおののぎ半ば面白がりながら驚きの目を見張っている子供をそれとは似ても似つかぬ姿に変えてしまい、——そして暖炉の火鉢みをも、両手を腰に当てて大股を広げて立ち、明らかに人間の血のにおいを嗅いで、その骨を砕いて自分の食べ物にしようとする巨人に仕立てる時に。

こうした影法師が年老いた者の心に他のさまざまな思いを浮かばせ、別の影像を描いて見せる時に。影法師がその隠れ家から忍び出て、存在したかも知れないと思われて実際には存在しなかったくさぐさの事物が永遠にさすらっている過去や、墓場や、深い深い深淵からやって来た姿と

【一〇】

顔とをそのまま表わす時に。

先に述べたように、化学者が火を見つめて座っている時に。暖炉の火の燃え方によって、影法師が消えたり現われたりする時に。彼が目を影法師にまったく向けなくて、それらが現われようが消えようがっこう構わないで、火を一心に見つめている時に。そうした時に彼の姿を見ると良い。

影法師の出現とともに生じ、黄昏時に呼び覚まされて密かな場所から湧き起こった物音が、彼を取り巻く空間に一層深い静寂をもたらすように思えた時。風が煙突の中で鳴動し、家の中で時には低く眩き、時には唸り声を上げた時。戸外の老いた樹木が風に打たれて激しく揺さぶられ、一羽の愚痴っぽい老いたみやまがらすが眠りを奪われて、時折弱々しい眠そうな甲高い調子で、「カーア！」と抗議の啼き声を上げた時。時々窓が震え、塔の上の錆びついた風見がきしぎしと不満げな音をたて、その下の時計がさらに十五分経過したことを告げ、暖炉の火が燃え尽きてがたっと音をたてて崩れた時。

——その時、つまり彼がそうして座っていた時、扉を叩く音がして彼は我に帰った。

「どなたかな？」と彼は言った。「入り給え！」

彼の座っている椅子の背にもたれかかっている姿もなかったし、椅子越しに見つめている顔もなかったことは確かである。彼が、はっとして頭を起こし返事をした時に、床を歩くいかなる軽やかな足音もしなかったことは確かである。しかもこの部屋には、彼自身の姿が投げかける影を一瞬でも映し出す鏡もなかった。それでいて何者かがひそかに通り過ぎ、去って行ったのであ

【一】

る。

「誠に申し訳ありません。」せかせかとした血色の良い男が、自分の身体と運んできた木のお盆とを中に入れるために開けた扉を足で押さえ、無事に中に入った後、扉が大きな音をたてて閉まるといけないので、実に注意深く、ゆっくりと扉から足を離しながら言った、「今夜はお食事を持って参りますのがずいぶん遅れてしまいました。家内がしょっちゅう足をとられますものですから——」

「風にかね？風の音が強くなったのは聞いていた。」

「——風でございます、——とにかく、家内が家に辿り着けただけでも有難いことです。ええ、そうですとも。家内が足をとられたのは風でございますよ、レドロー先生。風のせいなんです。」

こう言っている間にも彼は、夕食を運んできた盆をすでに下に置いて、ランプを点したり、食卓の準備にかかっていた。この仕事を急に中断すると、彼は暖炉の火を掻き起こして石炭をくべ、またもとの仕事にもどった。彼が点したランプと彼の手が掻き立てた暖炉の炎とが瞬時にして部屋の様子を変えてしまったので、この男の生き生きとした血色の良い顔と活発な動作とが部屋に持ち込まれただけで、この快い変化が生じたのではないかと思えるほどであった。

「家内が自然の^{エレメント}四元⁴によって調子がおかしくなるのは、もちろんしょっちゅうのことでございます。どうも家内はあれの影響を受けてしまうようにできているんです。」

「そうだね」とレドロー氏は、優しくはあるが、ぶっきら棒な調子で言った。

【一二】

「そうなんです。家内は地によって調子がおかしくなることがありますね。実は先週の日曜日、道に水たまりができてぬかるんでいるのに、お茶に呼ばれて新婚ほやほやの義理の妹と出かけまして、そんな道を歩きながらも自尊心があるものですから、しみ一つない姿を見せるつもりでいたんですよ。家内は風によって調子がおかしくなることがあるんです。いつかペカムの縁日⁵に行った時でしたが、友人に無理矢理すすめられてぶらんこに乗ったのはいいが、たちどころに船酔いにやられたようになったってわけです。また家内は火によって調子がおかしくなることがあるんです。あれの母親の家のあたりで消防の警報装置が間違っ^て鳴り響いたものですから、ニマイルの道のりをナイトキャップをつけたままで駆けつけたことがあります。また家内は水によって調子のおかしくなることがある

⁴ 古代哲学で自然界を構成すると考えられた地・水・火・風という四つの基本要素。

⁵ ロンドンのペカム街で催されていた縁日であるが一八七二年に廃止された。

んです。バターシィ⁶であれの甥で、まだ十二の年でボートなんてからきし漕いだこともないチャーリー・スウィッジャーの息子の漕ぐボートに乗って橋脚に突っ込んでしまったんです。ですがこれらはあくまでも自然の要素なのでして、家内の方の性格的な要素が力強く活動するためには、是非ともこれらのものから脱け出さなければなりませんまい。」

彼が返答を求めて話を中断すると、「そうだね」という前と同じ調子の答えが返ってきた。「ええ、さようですとも！」とスウィッジャー氏は依然として食事の準備を続け、そして

てその手順を一つ一つ確認しながら言った。「そののところなんです。私自身がしょっちゅう口にすることなんです。われわれスウィッジャー一族の数の多さとぎましたら！——ほれ、胡椒と。まず親父なんです、今は退職して年金を貰って、この学寮の管理人をやっておりますが、年は八十

【一三】

七になります。親父も立派なスウィッジャーです！——ほれ、スプーン。」

「そうだね、ウィリアム」と、彼が再度話を中断した時、相手は上の空だが、辛抱強く答えてやった。

「さようですとも」とスウィッジャー氏は言った。「私自身しょっちゅう口にすることにして。言ってみれば親父は我が一族の大黒柱です！——ほれ、パン。その次に親父の後継ぎたる不肖私自身——ほれ、塩——それに私の家内です、二人ともスウィッジャーです。——ほれ、ナイフにフォーク。それから男も女も、息子も娘もひっくるめて、スウィッジャー一族として私の兄弟とその家族とが続いているわけです。いやいや従兄弟、叔父、叔母、その他あれこれさまざまに呼ばれる親等の親類関係や、結婚とか出産とかで、実に大勢になった我がスウィッジャー一族が——ほれ、水のみ——手をつなぎ合わすと、イギリスを囲む輪ができて不思議はありませんね！」

話しかけている相手が物思いに沈んで今度は何の返答もしてくれないので、ウィリアム氏は相手のそばにもっと近づいて、我に帰らせるためにぶどう酒を入れた瓶をたまたまそうなったように食卓にぶつけてみた。その目論見を達成すると、無言の相手の発言をてきぱきと認めたかのように、彼はすぐに話を続けた。

「さようですとも！いつもの私の言い草ですが、家内も私もしょっちゅう申しているんです。『われわれ夫婦の子供をもうけるという自発的な貢献抜きでも、我がスウィッジャーの数に不足はない』と私どもはよく申します。——ほれ、バター。実際のところ親父一人面倒を見るのに

⁶ ロンドン南西部テムズ川に沿う地区で同名の橋がある。

【一四】

——ほれ、薬味入れ——まるまる一家族分ぐらいの手間がかかりますしね。それで私どもに子供がないのも、実に好都合であると言えるわけですよ。もっとも子供がないために家内が少しばかり口数が少なくなったということはありますがね。マッシュポテトをつけた鶏肉をお召し上がりになりますか。管理人宿舎を出る時、家内が十分に準備できると言っておりました。」

「ああ、いただく。」夢から醒めたかのように我に帰って、ゆっくりと歩き回りながら相手が答えた。

「家内がまた例の調子でしてね」と、管理人は立ったまま皿を火で暖め、楽しそうにそれを顔にかざしながら言った。レドロー氏は歩き回るのをやめた。彼の顔に相手の話に興味を持ち出したことを示す表情が浮かんだ。

「私がいつも言うんですが、家内はどうしてもやめようとしません。あれには、はけ口を求めてやまない母性的な感情があるんです。」

「何をしたのかね？」

「この古い学寮であなたさまの講義を聞くために方々からやって来ますすべての若い方々に対して、母親のような役割を果すことだけに満足しないで——こんな厳しい寒さなのに、陶器がこれほど熱くなるなんて驚いたね。」ここで彼は皿を裏返して指を冷やした。

「それで？」とレドロー氏が言った。

「いつもの私の言い草なんです」とウィリアム氏は、相手が即座に喜んで同意してくれるかのように、肩越しに話しかけながら答えた。「まさしくそのところなんでして、家内を母親の

【一五】

ように思わない学生は一人もおりません。毎日講義の合間にあの人たちは入れかわり立ちかわり宿舎に顔を出しては、何やかやと家内に話しかけたり頼んだりするんでございます。彼らの間ではふつつ『スウィッジ』という名で家内のことを呼んでいるらしいんです。ところで私の言い草ですが、名前を重んじられる割には何の関心も持たれないよりは、本当の愛情をこめて使われる場合には仇名で呼ばれる方がはるかにましでございます。名前は一体何のためにあるというのです。それによって人を知るためにあるんです。もしも家内が名前に勝るもっと良い何かで知られているならば——あれの性格とか気質のことでございますが——正しくはスウィッチャーであっても、その名前なんか問題にならないということです。学生たちが家内をスウィッジとかウィッジとかブリッジ、——いや、ロンドンブリッジ橋、ブラックフライアーズ橋、チェルシィ橋、パトニ橋、ウォータールー橋、あるいはハマスミスのつり橋などと、どんな呼び方をしようと、好きな名前で呼べばいいんで

す。」

この意気揚々たる演説を終えると、彼は我が身と皿とを食卓の所へ運んで、その皿が完全に熱くなったという強い気持ちからそれを半ば落とすようにして置いた。ちょうどその時、彼がほめていた当の本人が別の盆とカンテラを持ち、長い白髪を垂らした高齢の老人を伴って部屋に入ってきた。

ウィリアム夫人も夫と同じく素朴な人の良さを顔に表わしており、その滑らかな頬は、夫のお仕着せであるチョッキと同じ弾むような赤色をいかにも快さそうに帯びていた。しかし、ウィリアム氏の淡い色の頭髪が一面に逆立って、何でも忙しく世話を焼こうとする気持ちのあまりに、

【一六】

髪はおろか、目まで釣り上げているように見えるのに対して、ウィリアム夫人の濃褐色の頭髪はこの上なくきちんとした優しい仕方ではいねいに撫でつけられており、清楚でこざっぱりとした帽子の下で波打っていた。ウィリアム氏の銀灰色のズボンがその性質として、自分の周りを見回さないことには気が休まらないかのように、^{くるぶし} 蹠の所でぐいとずり上がっているのに対して、ウィリアム夫人の小綺麗な花模様のスカート——彼女の美しい顔と同じように白地に赤がまじったものであった——は、外で激しく吹き荒れている風をもってもその襞の一つさえ乱すことができないかのように、きちんと整っていた。彼の上着の襟首と胸のあたりが何やらふわふわとうわついている様子を示しているのに対して、彼女の胸着は実にきちんと落ち着いているので、それを身につけておれば、危急に際してどんな荒っぽい連中を相手にしてでも、彼女の守護神となってくれたことであろう。一体誰がかくも穏やかな胸を悲しみで満たしたり、恐怖で震えさせたり、恥ずかしさの念で掻き乱したりするような気持ちを起こすことができるであろうか。その胸の穏やかな安らぎは、子供の無心な眠りのように、それを掻き乱さないでくれと誰の心にも訴えかけたことであろう。

「やはり時間通りだね、ミリィ」彼女の盆を取ってやりながら夫が言った、「それでこそ君だ。家内が参りました。今晚はとりわけ寂しそうなんだ」と、彼は盆を運びながら小声で妻に話しかけた、「まったく幽霊みたいなんだよ。」

やたらに忙しそうにしたり騒いだりすることもなく、自分の存在をことさら見せつけるでもなく、実に落ち着いたもの静かな態度で、ミリィは運んできた料理を食卓に並べた、—— 一方夫の

【一七】

方はがたがたと走り回った拳句の果てに手にしたのはグレービー⁷を入れた舟形ソース入れだけで、彼はいつでも出せるようにそれを手にして構えた。

「老人が腕に抱えている物は何だね？」レドロー氏は腰を下ろして一人だけの夕食に取りかかりながら尋ねた。

「^{ひいらぎ}柎^ぎですの」とミリィが穏やかな声で答えた。

「私の言い草なんですが」と、ウィリアム氏がソース入れを持って割り込んで来て口をはさんだ、「柎の赤い実はこの時節に本当にぴったりなんですよ！——さあ、よく煮込んだグレービーです！」

「またクリスマスが巡ってきて、また一年が過ぎ去って行く」と陰うつなため息とともに化学者が呟いた。「死が何もかもいっしょくたにして、すべてを無闇に消し去るまで、働きに働いて結局は苦しみを得るだけだという記憶の統計が一年一年と増えて、その数を増して行く。で、フィリップ！」と、そこで眩くのをやめ、声を大きくして彼は両腕にきらきらと輝いている柎の枝を抱えて、離れた所に立っている老人に声をかけた。ウィリアム夫人が静かな物腰で老人の腕から小さな枝を取り、それを音もなく鋏で整えて部屋に飾りつけ、老いた義父は、彼女の取り行なうそうしたクリスマスの儀式を非常な興味を持って見つめていた。

「あなたさまに対して」と老人は答えた。
「私の方から申さなければならぬと思ってはいたのですが、レドローさま、あなたさまのなさり方を承知しておりますものですから——申し上げるのが誇らしゅうございます。——声をおかけになるまで私の方は遠慮申し上げていた次第です。」

【一八】



⁷ 肉にかける濃厚な汗。

【一九】

クリスマスと新しい年のお歡びを申し上げ、それが幾重にも繰り返されることをお祈り申し上げます。私は実に多くの楽しいクリスマスを経験しておりまして——はは！——僭越ながらあなたさまにもそれを祈らせていただきます。八十七歳でございますから。」

「楽しく幸せなクリスマスをそんなに何度も経験してきたというのかね」と化学者が尋ねた。

「はい、実に幾たびも」と老人が答えた。

「彼の記憶力は寄る年波で衰えているんだね。あの年では考えられることだが」とレドロー氏は、息子の方を向き、声を落して話しかけた。

「そんなことはまるっきりありません」とウィリアム氏が答えた。「それこそ私の言い草ですが、親父ほどの記憶力の持ち主は見たことがありませんよ。この世であんなに素晴らしい人はおりません。忘れるなんてことは親父のあずかり知らぬことです。家内にもしょっちゅう言ってるんです。嘘は申しません！」

スウィッジャー氏はどんなことでも同意しているように思われたいという礼儀正しい願いから、あたかも彼の言葉にみじんも反対意見がなく、無条件にそして絶対的な同意の上ですべてが語られているかのように、彼の意見を喋り立てた。

化学者は皿を押しやって食卓から身を起こすと、手にした柵の小枝を見つめながら立っている老人のところまで歩いて行った。

「それを見て、過ぎる多くの歳月の古く、また新しいクリスマスの時節のことを思い出しているんだね？」彼は、老人をじっと見つめその肩に手を置いて言った、「そうなのかね？」

【二〇】

「ああ、幾たびも、幾たびも！」とフィリップは夢見心地から醒めながら言った、「八十七歳でございますから。」

「楽しく幸せだったというのだね？」と化学者は声を落として尋ねた、「そうなんだね？」「多分これぐらいの大きさでしかなかったでしょう」と、膝より少し上の所に手を差し

伸ばし、昔日を偲ぶように相手を見やりながら老人が言った、「記憶に残っている初めてのクリスマスの時でございます。その日は寒さの厳しい良く晴れた日で、私は散歩に出ておりました。その時誰でしたか——そのクリスマスに病に倒れて他界したものですから、尊い母の顔は覚えておりませぬがそれは間違いなく私の母でございます——柵の赤い実は小鳥の食べ物であると私に教えてくれたのです。その可愛い幼児——無論私のことですが——は小鳥の目がきらきらとしているのはきっと冬についばむ柵の赤い実がきらきらと

光っているからだろうと思ったものでございます。よく覚えておりますわい。その私が今は八十七歳でございます。」

「楽しく幸せだったとね」と相手は哀れみの微笑を浮かべて、暗い目を腰が曲がった老人に向け、物思いに沈んで眩いた、「楽しく幸せだったとね——何もかも覚えていて。」

「さよう、さよう、覚えておりますとも」と老人は相手の言葉尻を捕えてまた喋り始めた、「学校へ行っていた時分、毎年巡ってくるクリスマスと、その時節につきものの楽しいお祭とはみんなよく覚えております。レドローさま、その時分はこれでも逞しい男として鳴らして、実際のところ、フットボールでは十マイル界限で私に叶う者などおりませなんだ。倅はどこにいるかね？十マイル界限でフットボールをやってわしに叶う男などおらなんだな。」

【二一】

「父さん、それは私の言い草ですよ！」息子が間髪を入れず大いに敬意をこめて答えた、「父さんこそ正真正銘のスウィッチャーですよ！」

「ああ！」と、老人は再び柵を眺めて頭を振りながら言った、「この母親——このウィリアムは末の倅でして——と私とは、クリスマスになればよく沢山の男の子や女の子に囲まれて自分たちがまるで幼子のような気持ちになって座っていたものです。その時の子供たちの顔つきときたらこの柵の赤い実の倍も輝いておりました。子供たちの多くは他界しましたし、妻もあの世へ旅立って行きました。ジョージ(長子で、他のどの子供よりも妻の自慢の種でした)は今ではひどく落ちぶれ果てております。ですがこうしていると、普通の生き生きとして健康な妻や子供たちの姿がそのまま目に浮かんできまして、無邪気なままのジョージの姿を見ることができるのは嬉しゅうございます。八十七歳の私にとりましてとても有難いことです。」

老人に注がれていた相手の鋭い真剣なまなざしは、少しずつ下がって行った。

「人からひどい目に会わされて暮らし向きが悪くなってしまい、それで管理人としてこの学校へ初めてやって来ました時」と老人が言った、「——それはもう五十年以上も昔の話です——倅はどこにいる？半世紀以上も昔のことだよ、ウィリアム！」

「父さん、それは私の言い草ですよ」と今度もまた間髪を入れず忠実に息子が答えた、「まさにそのところです。二に〇を掛ければ〇だし、五を二倍にすれば十でしょう。それですぐ百になりますよ。」

「この学寮の創立者のお一人が——もっと的確に言いますと、」この話題とそれに対する自分

【二二】

の知識とに大いなる誇りを持って老人が言った、「エリザベス女王陛下の時代⁸——学校の創設そのものはそれより古いわけですが——学校の基金を助成して下さった学識ある方々の中のお一人が、遺言で、学校への様々の遺贈に含めて、クリスマスのたびごとに各部屋の壁や窓を飾る柵を買えるだけのお金を特に遺して下さったということを知りまして、大変嬉しゅうございました。それには家庭的で暖かい心の通うものがありました。当時、ここは私どもには馴染みのない所でしたが、クリスマスの時分にやって来ました折に、その方の肖像画に心をひかれたのでございます。それは、昔、年俸を貰うようになるまで、学寮の今は亡き十人委員会の方々が、食事を賄われた時に晚餐用の大食堂として使われていた部屋に掛かっています。——先の尖った顎ひげを生やして首に襷襟をつけた穏やかな感じの紳士で、その下に、『主よ、我が記憶を褪せしめ給うなかれ』⁹という古い文字が巻き物型装飾で彫られています。その方のことはよく御存知でございましょう、レドローさま。」

「肖像画がそこに掛かっているのは知っているよ、フィリップ。」

「さよう、鏡板の上に掛かっている右から二つ目のものです。私が申し上げたいのは——有難いことに、あの方が私の記憶をいつも瑞々しいものにして下さっているということなのでございます。と言いますのもこうして毎年建物を巡って歩いて、がらんとした各部屋に柵の枝や実を飾って生気を甦らせますと、索漢として老化した私の頭にも生気が甦ってきますのです。一年が過ぎし一年を甦らせ、それがまた他の一年をという具合に、過ぎ去った幾多の歳月が甦ってきますのです。そしてやがては、主の降誕された日が、私が愛情を寄せたり、私を悲嘆の涙に暮れさせ

【二三】

たり、私の喜びの源となったすべての人たちの生誕の日でもあるかのように思えてくるのでございます——こうした人たちがたんといえるわけです、八十七歳でございますから。」

「幸せで楽しかったというのか」とレドローが眩いた。

部屋が異様な気色で暗くなっていった。

「ですから」と老フィリップは続けた。彼の健康ではあるが、老いの影の隠せない頬が火照って赤みを帯びて輝き、話を続ける彼の青い目はきらきらと光っていた。「このクリスマスをお祝いする時、私にはまた、たん^おと祝うものがございます。さて、おとなしいお

⁸ 一五五八～一六〇三

⁹ 『ハムレット』、第一幕、第二場の国王クローディアスの台詞にある。

ねず¹⁰はどこにいるのかね？お喋りはどうも老人の悪い癖でしてね。まずもってわたしどもが寒気で凍りついたり、風に吹き飛ばされたり、暗闇に呑み込まれてしまわない限り、柵を持って後まだ建物の半分を回らなければなりませんまい。」

おとなしいおねずが老人のそばにその穏やかな顔を寄せてきて、彼が喋り終えぬうちにそっと彼の腕をとった。

「さあ、行こうか」と老人が言った、「私がいたのではレドローさまは落ち着いて食事ができぬし、料理も冷え切ってしまう。どうか私の下らないお喋りを御容赦下さいますように。おやすみなさいまし、そして今一度クリスマス——」

「行かないでくれ！」とレドロー氏は、その態度から察するところ、自分自身の食欲を多少でも思い出したというよりは、年老いた管理人を安心させるために食卓にもどりながら言った、「私のためにももう少し時間を割いてくれないか、フィリップ。ウィリアム、君は立派な奥さんの

【二四】

名誉となるような言葉をさっき言いかけていたね。君のほめ言葉を聞くのは奥さんにとっても気持ちが悪からうはずはない。何を言おうとしていたのかね？」

「まあ、そこのところなんですがね」とかなり狼狽して妻の方に目をやりながらウィリアム・スウィッチャー氏が答えた、「家内に見つめられているのでは。」

「しかし、奥さんの目がこわいわけでもあるまい？」

「もちろんですとも」とスウィッチャーが答えた、「私の言い草なんです、家内の目は人のこわがるような目ではありませんよ。人に恐れを与えるのがその意図であれば、あのような穏やかな目であるはずがありません。ですが、どうも——ミリィ！——あの人のことだよ。町のあの建物に住んでいる。」

ウィリアムは食卓の背後に立って、狼狽してその上の物にやたらと手を出しながら妻の方に言い聞かすような視線を送り、彼女の注意をレドロー氏の方に誘おうとするように、頭と親指とを本人に気づかれないようにレドロー氏の方にさっと動かした。

「ほら、あの人のことだよ、」ウィリアムは言った、「町のあの建物に住んでいる。さあ話しておくれ。私なんかと比べると、君はシェイクスピアほども話し上手なんだから。ね、町のあの建物に住んでいる——あの学生さんのことだよ。」

「学生だって？」と顔を上げてレドロー氏が言った。

「そうですとも！」と、ひどく元気づいて、ウィリアムは同意の叫びを上げた。「あの建物にいる貧しい学生さんのことでなければ、家内の口から話を聞いてみようという気持ちを先生が持

¹⁰ 老人のよく用いる嫁の愛称。

【二五】

たれるはずもありませんからね。さあ、君——あの建物の。」

「少しも存じませんでした、」ミリィはいささかもあわてたり、うろたえたりすることもなく、落ち着いたある率直な態度で言った、「主人はそんな話をしたんです。それが分かっておりましたら、こちらにはお伺いしなかったでしょう。口外しないようにとっておきましたのに。その方は病気で苦しんでおられます——とてもお金に困っていらっしゃるようです——とてもお悪くってこのクリスマス休暇にも帰省できず、誰にも知られずにエルサレム館の、立派な方には少しばかり粗末な下宿に住んでいらっしゃるのです。それだけのことなんです。」

「なぜ今まで私の耳に入らなかったのだ？」急いで立ち上がりながら化学者が言った。「なぜその学生は自分の状態を私に知らせてくれなかったのだ？病気だなんて！——帽子と外套をくれ。可哀そうに！——所と番地は？」

「いえ、先生はいらしてはいけません」と、^{しゅうと}舅のそばから離れて、手を組み、可愛らしい顔に落ち着いた表情をたたえ、穏やかな態度で彼の前に立って、ミリィが言った。

「行ってはいけないですと？」

「それはとても！」だめであることが実にはっきりしていて分かり切ったことであるかのように頭を振りながらミリィが言った。「考えられないことです。」

「どういうことなのです？なぜ？」

「ああ、それはですね」と相手を説得し、秘密を打ち明けるような口調でウィリアム・スウィッチャーが言った、「私の言い草ですが、その学生さんは自分の状態を男の人には絶対に打ち明

【二六】

けたりはなさらなかったでしょう。家内には打ち明けましたけどね。ですが事情がまるで違うんです。学生さんはみんな家内の所に内緒事を持ち込むんです。それも家内を信頼しているからです。男があの人から少しでも聞き出そうとしたって無理なんです。ところが女である上にウィリアム夫人ということになりますと——！」

「ウィリアム、君が言うことももっともだし、よく言ってくれた」とレドロー氏は、彼の肩のところにある優しく穏やかな顔を見守りながら答えた。そして唇に手を当てると、こっそりと財布を彼女の手の中に滑り込ませた。

「ああ、それはいけませんわ！」財布を返しながらミリィが叫んだ、「事態が悪くなるばかりです。とてもそんなことは！」

ミリィは実に沈着で実際的な主婦であり、このようにとっさに拒んだからといって一時的にでも取り乱して動揺することもなく、彼女は次の瞬間には、柵の枝を整えている間に

鉄と前掛けの間からこぼれ落ちた柀の葉を、きれいに拾い集めていた。

前かがみの姿勢から身を起こした時、レドロー氏が依然として疑念と驚きのこもった目で自分を見つめていたので——その間も部屋の中を見回して、見落としたかも知れない葉が他にはないかと探しながら——ミリィは前に言った言葉を穏やかに繰り返した。

「それはいけませんわ！先生の教えを受けておられる学生さんですけども、自分のことは絶対に先生には知られたくない、また援助も受けたくないとおの方はおっしゃるのです。私はあなたさまと秘密の約束を交してはませんが、あなたさまの信義を重んじられるお心を信頼してお

【二七】

ります。」

「なぜ彼はそんなことを言うのです？」

「私にはとても分かりませんわ」と、少し考えてからミリィが言った、「賢さなど何一つない女ですもの。私は、あの方の身の周りを整理して、気持ち良くしてあげることで、幾らかでもお役に立てると思いまして、世話をしてきただけです。けれどあの方がお金に困ってらして独りぼっちなのは分かりますし、何だか誰からも忘れ去られているように思えますの。——暗くなったこと！」

部屋はどんどん暗くなって行った。化学者が座っている椅子の背後に非常に重苦しい陰うつな闇が垂れこめてきた。

「学生のこともっと知りたいのだが」と彼は言った。

「生活のめどがつき次第結婚する約束ができていましてね」とミリィが言った、「あの方は生計を立てるための資格を得ようとして勉学に励んでおられるようです。もうずっとやりたいこともなさらずひたすら勉強に励んでいらっしやるんです。——まあ何と暗くなったこと！」

「それに寒くなってきた」と両手をこすり合わせながら老人が言った。「この部屋には冷え冷えとした暗い空気がこもっている。倅はどこにいるかね？ウィリアム、ランプを明るくして暖炉の火を掻き起こしておくれ！」

非常に穏やかに奏でられる静かな音楽にも似て、ミリィの声が再び流れてきた、「あの方は昨日の午後、私に話しかけられた後、お眠りになりましたが(この言葉は独り言のように眩かれた)、

【二八】

その途切れがちの眠りの中で、今は亡くなった人のことを、そしてけっして忘れることのできないひどい仕打のことを眩くように言われました。けれどそれがあの方に対するもの

なのか、それとも他の人に対するものなのかは存じません。ただあの方がなされたことでないことは確かでございます。」

「つまり、家内はですね——この新年が明けて次の新年が来るまでここに留まっているとしても、とても話すことはしないでしょうが——」とウィリアムは、レドロー氏のところに近寄って行って、その耳もとで言った、「家内はあの人のために山ほど尽くしてきてるんです。本当に、山ほどもです。それでいて家事の方もいつに変わらずきちんとやってくれましてね——親父も相変わらず気楽にくつろいでいます——わらくずを見つければ五十ポンドの現金をやると言われても、我が家にはわらくず一つ見当りません——家内は見た目には、世間の女とちっとも違いません——それでいながら、席を暖める暇もなく、あっちこっち、上へ下へと駆けずり回って、あの子の母親代わりになってやってるんです！」

部履はますます暗くなり寒さを増していった。そしてレドロー氏の座る椅子の背後に漂う陰うつな闇もますます重苦しさを募らせてきた。

「これで満足しないで、家内は、今夜のことですが、帰宅した時(ええ、まだ二時間も経っていません)、戸口で震えていた幼い畜生と言った方が似つかわしいような子供をわざわざ見つけてくるんですからね。無論家内のことですから、その子を家に入れて衣服を乾してやり、食べ物を与え、クリスマスの朝、私どもが昔から人に施している食べ物や衣服の贈り物がなくなるまで

【二九】

家に置いてやりますよ！その子が火の暖かさを知っているとしても、今夜ほどその暖かさを感じたことはありませんまい。その子は宿舎の古い炉に座って、その飢えた両眼を閉じるのを忘れたように一心に私どもを見つめているんですから。少なくとも今そこに座っていますよ、」そこで思い直してウィリアムは言い換えた、「逐電してしまっていれば話は別ですが！」

「この^{ひと}夫人に幸あれ！」と、化学者は声を上げて言った、「フィリップとウィリアム、君たちにも幸あらんことを！私はこのことで何をしたら良いか考えなければならない。その気になったら学生に会って見よう。今晚はこれ以上、引き留めることはすまい。おやすみ！」

「有難くお礼を申し上げます！」と老人が言った、「嫁と倅のウィリアム、それに私自身になり代わりまして。倅はどこかね？ウィリアム、昨年も一昨年もそうだったが、カンテラを持って先に立ってあの長くて暗い道を歩いておくれ。ははっ！私はもの覚えがいいんです——八十七ではございますが。『主よ、我が記憶を褪せしめ給うなかれ！』これは立派なお祈りの言葉です、レドローさま。首に襷襟をつけて、尖った顎ひげを生やした、あの学識豊かなお方の祈りなのですよ——昔、年俸を貰うようになるまで、学寮の今は亡

き十人委員会の方たちが食事を賄われた時に晚餐用の大食堂として使われていた部屋の、鏡板の上の右から二つ目に掛かっておりますものです。『主よ、我が記憶を褪せしめ給うなかれ！』実に立派で敬虔な祈りの言葉でございます。アーメン！アーメン！」

皆が出て行き、重い扉が閉められた。強く閉まらないように注意して扉を押さえていたにもかかわらず、やがて扉が閉まると、轟き渡るほどの反響音が生じ、それが長く尾を引いて、部屋は

【三〇】

一段と暗くなった。

彼が独りになって腰かけたまま物思いに沈み込んだ時、壁に飾ってあった瑞々しい柵が萎れて床に落ちた——枯れ枝と化して。

先ほどからとりわけ暗さを募らせていた、彼の背後のあたりの陰うつな闇が一段と濃度を増して行くにつれて、それは少しずつ、ぞっとするような彼の似姿を帯びてきた、——と言うよりは、何か超現実的な、得体の知れない過程によって——人間の感覚では捕えられぬほどに、——彼の似姿が闇の中から現われて来た。

見るも薄気味が悪く、冷ややかで、その鉛色の顔や手には血の気はまったく見られなかったが、まさしく化学者の相貌に違いなく、目はぎらぎらと輝き、髪には白髪がまじり、同じ衣服を陰うつな影のようにまとい、じっと、音もなく、恐るべき実在の姿となって現われ出たのである。彼が椅子の肘掛けに腕をのせ、暖炉の前に身をかがめて物思いに沈むと、それも彼と生写しの身の毛のよだつような顔で、彼のすぐ真上のところで椅子にもたれ掛かり、彼と同じ表情を顔に浮かべて、彼の顔が向けられる方向に、その顔を向けるのであった。

果たせるかな、先ほど、ひそかに通り過ぎて消えて行ったのはこれだったのだ。これがこの愚かれた男の恐るべき連れ合いだったのである。

彼がその存在に意を払わないのと同様、それも、しばらくの間は、彼に気をとめているようには見えなかった。どこか遠くの方でクリスマス・キャロルを歌う聖歌隊の歌声が聞こえてきた。彼は物思いに耽ってその調べに耳を傾けているように見えた。それもまた耳を傾けているようで

【三一】



【三二】

あった。やがて彼が沈黙を破った。顔は相変わらず動かず、うなだれたままだった。

「また現われたのか！」と彼が言った。

「また現われた！」と亡霊が答えた。

「炎の中におまえの顔が見える」と憑かれた男が言った、「歌声にも、風にも、夜のしじまの中におまえの音がする。」

亡霊がうなずいて同意を示した。

「なぜこのように現われて、私に取り憑くのか？」

「呼ばれるから来るのだ」と幽霊が答えた。

「いや、呼んではいけない」と化学者が叫んだ。

「たとえ呼ばれてはいなくとも」と幻影が言った、「それはいいではないか。こうしてやって来たのだから。」

それまで、炉火の明りがこの二つの顔を照らしており——椅子の背後にあるものが、顔と言えらとしての話だが——両者とも初めから同じように火に向かって語りかけ、互いに顔を見合わすことはなかった。だが、この時憑かれた男が突然振り返って幽霊をじっと見つめた。幽霊もまた同じように急な動きを示し椅子の前に出ると、彼をじっと見つめた。

生身の男と生気に満ちた彼自身の死の幻影とがこうして互いに睨み合っているのだ。冬の夜、神秘の旅路を辿る風——いずこで生まれて、いずこに吹き行くのか開闢^{かいびやく}以来知る人ぞいない——

【三三】

が唸るように吹き荒れ、地球が穀粒に過ぎず、老齡な地球が未だ幼児に過ぎないと思わせる永劫の大宇宙の彼方から、満天にきらめく無数の星くずが、吹きすさぶ風を突き抜けて輝きを送ってくる冬の夜、住む者もない古めかしい建物にある、奥まった寂しい場所で展開される、背筋の凍りつくような睨み合いなのだ。

「私をよく見るのだ！」と幻影が言った、「若き日に誰からも見捨てられ、みじめな貧困の中で、もがいては苦しむといった苦節の果てに、やっとの思いで知恵の宝庫から、そこに埋れていた知識を発掘して、疲れ果てた足を休め、それを土台にして昇って行ける粗末な踏み段をこしらえた男、それが私なのだ。」

「私とその男だ。」と化学者がやり返した。

「母親の無私の愛情も、」亡霊は続けた、「そして父親の忠告もこの私の助けになっはくれなかった。未だほんの子供の時、見知らぬ男がやって来て私の父親となってしまう。すると、母の愛情はいともあっさりと私から離れてしまった。両親は、いくらひいき目に見ても、親としての心遣いも義務もあっさりと忘れてしまい、小鳥がそのひなを早々に放り出すように、自分たちの子供を早くから放り出して知らぬ顔をしながら、子供たちがちゃんとやればその手柄を横取りするし、うまくいかないと同情を求める、そうした親だった。」

亡霊は口を噤んだ。その凝視と、独特な語り口とほくそ笑みによって、それは彼の心をそそり立て、煽り立てようとするかのようにであった。

「その男が私なのだ」と亡霊は話しを続けた、「こうした苦闘のあげく、私は一人の友を知っ

【三四】

た。私はその男を手なづけ——我がものとし——私に縛りつけたのだ！私たちは相共に勉学に励んだ。子供の頃、はけ口もなく表わすすべも知らなかった愛情と信頼とをすべてその友に注いだわけだ。」

「すべてではない」とレドローがしゃがれ声で言った。

「その通り、すべてではない」と亡霊が答えた。「妹がいたからだ。」

憑かれた男は両手に顔をのせて言い返した、「いたとも！」亡霊は陰険な笑みを浮かべながら椅子に近寄ってきて、組み合わせた両手に顎をのせ、その手を椅子の背に置いて火

が燃えているとも見える鋭い目で彼の顔を覗き込み、言葉を続けた、

「私なりに知っている家庭の明るい輝きが、妹から流れ出ていたものだ。実に瑞々しい娘で、美しく、愛らしかった。初めて私が持った^{しず}賤が家も妹がやって来て豊かなものに変えてくれた。^{あれ}彼女は私の暗い生活の中に入って、それを明るいものに変えてくれたのだ。——今も眼前に彼女の姿が見える！」

「私はたった今、火の中に彼女の姿を見たところだ。聖歌の調べが、風が、夜のしじまが、彼女の声を運んでくれる」と憑かれた男が言った。

「あの男は妹を本当に愛していたのだろうか？」彼の思いに沈んだ調子をそのまま受けて亡霊が言った、「愛したことはあったのだろう。それは確かだ。妹が、あれほど熱をあげなければ良かったのだ——あんなにひたむきに思いつめないで、もっと気楽な、軽い気持ちで愛してくれたら良かったのだ！」

【三五】

「そのことは思い出させないでくれ」と化学者は怒ったように手を振って言った。「記憶から消して欲しいのだ。」

幻影は微動だにしないで、まばたき一つせぬ冷酷な目を依然として相手の顔に注ぎながら言葉を続けた。

「妹にあった夢が私の人生にも忍び入ったことがある。」

「そうだ」とレドローが言った。

「妹にあったような愛情が」と亡霊が続けた、「ろくでもない私なりの愛情が私の胸にも生まれてきた。貧しさの極みにあっては、約束とか懇請といった糸によって愛する^{ひと}女性をとて私の運命に縛りつけるわけにはいかなかった。私は心の底から愛していたので、そんなことはとて求められなかったのだ。しかし、私はそれまでの苦闘に加えてさらに自らを鞭打って上へ這いのぼろうとした！—インチでもものぼると、頂上は幾らかでも近づいてくる。骨身を削るようにして私は励んだ！その当時、夜更けになって苦しい勉強に一息ついた時——私の妹(ああ、何と愛らしい連れであったことか！)も火の消えかかった寒々とした暖炉の前で、眠らないで座っていてくれた——朝の光が射してくると、私は幸せな未来図をどんなにか心に描いてみたことだろう！」

「たった今、火の中にそれを見たところだ」と彼は呟いた。「それは、巡っては過ぎ行く幾多の歲月、歌声に乗って、風に乗って、そして夜のしじまの中で、私の前に舞いもどってくる。」

「——苦学力行の精神的支えとなってくれた女性との将来の家庭生活の想像図、妹が何の引け

【三六】

目もなく私の親友の妻となってくれる想像図——彼には多少とも財産があり、私たちにはなかった——穏やかな老境や落ち着いた幸せの想像図、そして無限に遡る金色の連鎖が、美しく輝く花輪となって、私たちと子供たちとを結び合わす想像図」と亡霊が言った。

「それらはみな妄想だったのだ」と憑かれた男が言った、「こうしたことをまざまざと記憶にとどめておくのが、私の定めなのか！」

「妄想だったのだ」と亡霊は、変化のない声でおうむ返しに言い、相変わらず同じ目つきで彼を見すえた。「私の友(その胸の裡に、私の胸と同様、しっかりと私の秘密がしまい込まれていたのに)が、私の希望と苦闘の全体系の中心である女性との間に割り込んできて、彼女を我がものとし、私の空中楼閣を無残に打ち砕いてしまったからだ。このことがあって私の家庭で、従前にも倍して愛らしく、献身的になり、かつ明るさを振りまいてくれた妹は、私が有名になって、かねての大望がこうして成し遂げられるのを見届けてくれた。だが、発条に緩みが生じ、そして——」

「それから帰らぬ旅路についた」と彼が口をはさんだ、「この上なく穏やかな幸せに包まれて、そして兄のことだけを念じつつ。黙るのだ！」

亡霊は黙って彼を見守った。

「覚えているとも！」と一呼吸おいて憑かれた男が言った。「そうだ、はっきりと記憶に刻みつけられている。幾多の歳月を経て、遠い昔に置いてきた子供じみた愛情ほど空しくて無益なものはないように思える現在においてすら、弟が姉に対して、子供が母親に対して抱くような優しい心で、私は薄幸な妹の生涯に思いを馳せるのだ。私は、妹の心が初めてあの男に傾いたのはい

【三七】

つのことであろうとか、妹がどんな気持ちで私のことを思っていてくれたのだろう、といったことをふと考えることがある。——軽はずみな愛情だけではなかったと思う。——しかしそんなことを考えても仕方がない。幼少期の不幸、私が愛し信頼していた友人の裏切り、そして取り返しのつかない妹の死という損失が、そうした無益な空想を消し去ってしまうのだ。」

「かようにして」と亡霊が言った、「私は悲しみと災いとを我が身にまとっている。かようにして、私は苦悶に苛まれ、かようにして記憶を呪っているのだ。我が悲しみと災いとを忘れられるのであれば、是が非でもそうしたいところだ。」

「人をなぶるのはやめろ！」と化学者は跳び上がり、怒りに震える手で彼の分身の喉元につかみかかりながら言った、「なぜ私は、おまえの嘲りにいつもかつも耳を貸さねばならないのだ？」

「辛抱するのだ！」と幻影はぞっとする声で叫んだ、「私に手を掛けて死ぬがいい！」

その言葉に麻痺させられたように、彼の動作が途中で止まり、彼は幻影を見つめて立ちすくんだ。幻影は彼の腕から滑るように抜け、警告を与えるかのように腕を高く上げた。幻影が、黒々とした姿を勝ち誇ったようにそびえ立たせた時、そのぞっとするような面貌に、笑みが過った。

「我が悲しみと災いとを忘れられるのであれば、是が非でもそうしたい」と亡霊は反復した。「我が悲しみと災いとを忘れられるのであれば、是が非でもそうしたい！」

「我が悪霊よ、」震えを帯びた小さな声で、憑かれた男が言った、「おまえの音が絶え間なくささやきかけ、私の人生は暗澹たるものだ。」

【三八】

「それは反響だ」と亡霊が言った。

「もしそれが私の理念の反響なのであれば——今の場合、確かにその通りなのだが」と憑かれた男が答えた、「だからといって、なぜこんなにも苦しめられるのだ？これは手前勝手な考えではない。それが私以外の者に及んで行こうと詮方ないのだ。男と言わず女と言わずすべての者が悲しみを背負っている、——そして殆どの者が災いを被っている。忘恩、薄汚ない嫉妬心、それに私欲があらゆる人間に取りついて苦しめている。悲しみや災いを忘れたくない者などいるものか。」

「その通り、忘れたくない者などいるものか。誰だって、そんなことは忘れて、より幸せに、より善い人間になりたいのだ。」と亡霊が言った。

「年々歳々巡り来るこの時節を私たちは祝っている、」レドローが続けた、「だがそれが何を思い出させると言うのか！この時節が訪れる時に悲しみや苦しみをその心に少しでも呼び覚まされないような人がいるであろうか？先刻までこの部屋にいた老人の思い出などが一体何だと言うのだ。悲しみと苦しみの連続に過ぎぬではないか。」

「しかし凡庸な人間は——」透けるような顔に醜悪な笑みを浮かべて、亡霊が言った、「愚かで凡庸な人間は、高い教養や深遠な思想の持ち主とは違い、こうした事柄について感じたり考えたりはしないものだ。」

「悪にいざなう者よ」とレドローが答えた、「おまえのうつろなまなざしと声は言いようもなく私を怯えさせる。そしてこうして話していても、さらに大きな恐怖を暗示するおぼろな影がお

【三九】

まえから私を包むように忍び寄って来て、また我が心の反響が聞こえてくる。」

「私の力を示す証拠としてそれを認め給え」と亡霊が言った。「私の提案に耳を傾ける

のだ！己が身の悲しみ、災い、そして苦しみを忘れてしまうのだ！」

「忘れると言うのか！」と化学者が言った。

「私にはそうした記憶を抹殺する力がある、——そうすれば、いやな記憶もかすかで混沌とした跡しか残さず、じきに消え失せるだろう」と幻影が答えた、「さあ！受けるかね？」

「待ってくれ！」と幻影が高く掲げた手を、怯えた身振りで押さえながら憑かれた男が叫んだ。「私はおまえに対する不信と疑惑から恐れおののいている。おまえが投げかける漠とした恐怖がどんどんと深まってきて、とても耐えられぬほどの名状し難い恐怖へと脹れあがって行く。——私にとっても、あるいは他の人たちにとっても有益である心和む思い出や思いやりの心を棄て去るつもりはない。おまえの提案を受ければ私は何を失うことになるのか？何か他に記憶から失われていくものがあるのか？」

「知識とか研鑽の成果などは違う。消えて行くのは、消し去られた記憶に順次支えられ、そして培われてきた感情や連想のもつれた鎖だけだ。そうしたものは消えて行く。」

「そんなにもあるのか？」と驚いて考え込みながら憑かれた男が言った。

「暖炉の火の中に、歌声の中に、風の中に、夜のしじまの中に、巡り来る歳月の中にいつも現われてきたものだよ」と亡霊は嘲るように言った。

「それ以外には？」

【四〇】

亡霊は無言のままだった。

亡霊は、しばらくの間、そのまま彼の前に立っていたが、やがて暖炉の方に移動し、そこで立ち止まった。

「機会のあるうちに決断し給え！」と亡霊は言った。

「ちょっと待ってくれ！神に誓って言うが、」彼は動揺して言った、「私は人を憎んだことはない、——自分の周囲のものに対して不機嫌であったり、冷淡であったり、無情であったりしたこともけっしてない。孤独な生活を送る中で、私が過去のもの、あるいは過去にあったかも知れないものをあまりに重視して、現在あるものをあまりに軽視してきたとすれば、その禍は誰よりもこの私に降りかかってくるても不思議はない。だが、体内に毒素がある場合、解毒剤やその使用方法についての知識を持っているなら、それらを当然役立てるだろう。だから、精神が毒素に冒されていて、この恐るべき幻影の力によってそれを排出できるのであれば、それを利用して悪いことはあるまい。」

「さあ」と幻影が言った、「受けるかね？」

「もう少し待ってくれ」と彼はあわてて答えた。「忘れたいのには山々だ！これは私だけの思いなのか、それとも幾世代にもわたって、数限りない人たちの胸に去来した思いなのであるのか？誰の記憶だって悲しみと苦しみとに満ちている。私の記憶も他の人たちの記

憶と変わるものではない。だが私だけにこの選択ができるのだ。よし、手を打とう。決まりだ！私は悲しみも苦しみも忘れ去ってやる！」

【四一】

「さあ」と幻影が言った、「受けるかね？」

「受けた！」

「決まった！では、受け取るがいい。おまえとはこれでお別れだ。今授けた贈り物を、おまえはどこへ行こうと、さらに人に授けることになる。今おまえが放棄した能力を取り戻さない限り、おまえが今後接触するすべての人間の内にいる同じ能力を破壊することになる。おまえはいみじくも悲しみ、災い、苦しみの記憶が全人類の宿命であるということ、そしてもろもろの記憶からこの苦い記憶を取り去ってもらえれば、人類はより幸せになれるということを見出したのだ。さあ、行け！人類の恩人になれ！かの記憶から解放された者として、これより、本能の赴くままこの解放の恵みを携えて回るのだ。それを行き渡らせることが、おまえとは切り離せない、そして誰も奪うことのできないおまえだけの能力なのだ。行け！獲得した善きものを人に施して幸福になれ！」

亡霊は、こう話を続ける間も、何か邪悪な呪文か呪詛を唱えているかのように、彼の頭上に血の気の失せた手を掲げ、その目を彼の目にじわじわと接触するまで近づけて来た。顔にはぞっとするような笑いが漂っているにもかかわらず、間近に迫った目は、その笑いとは無関係にじっと固定して動かず、彼を恐怖で震憾させた。そして亡霊は、彼の眼前で溶解し消え去った。

恐怖と驚愕に襲われてその場に立ちつくし、もの悲しい反響を繰り返しつつかすかな余韻を残して消えて行く、「おまえが接触するすべての人間の内にいる同じ能力を破壊するのだ！」という言葉が彼が耳にしたように思った時、甲高い叫び声が彼の耳に入ってきた。その叫びは扉の向

【四二】

こうにある廊下から聞こえてきて、道に迷った者が暗闇の中で上げる叫び声にも似ていた。

我が身を確認するかのようには彼は自分の手足をうろたえて見つめ、耳にした叫びに呼応する大きな物狂おしい叫びを發した。それというのも、彼自らが道に踏み迷ったかのようには言い知れぬ恐怖が襲ってきたからであった。

彼の叫びに応じるように、その叫び声が近づいてきたので、彼は^{あかり}灯火を手にして、彼が講義する階段教室——それは彼の居間に隣接していた——への出入り口として普段使っているくり抜かれた壁に掛かっている重い幕を引き上げてみた。若々しい学生たちとその醸し出す活気、そして彼が講義に現われるや、すり鉢状の教室に並んだ学生たちの顔に魔法

にかけられたように興味が湧き上がってくる請景を思えば、今や、この場所は、そうした生気がすべて、消え失せた幽霊の出そうな場所であり、死の表象のように彼を睨めつけていた。

「おい！」と彼は叫んだ。こっちだ！明りの方に来い！彼が片手で幕を持ち、もう一方の手で灯火を掲げてその場に垂れこめる闇を見透そうとした時、何か山猫のような生き物が彼のそばをさっと駆け抜けて部屋に踊り込み、隅にうずくまった。

「何だ、これは？」と彼はあわてて言った。

ほどなく彼は気を取り直して、部屋の隅に小さくうずまっているものをじっと見つめたが、そうしてじっくりと見た後でも、「何だ、これは？」という疑問を發したことであろう。

それはまるでぼろの塊りであって、一本の手がくずれを防ごうとするかのように、ぼろをしっかりと抱き締めていたが、その手は、大きさや形からすれば幼児のものとも言えるが、貪欲にそ

【四三】

していやらしいほど必死につかんでいるのを見れば、さもない老人のものでもあった。顔は、六歳の子供を思わずように丸味があって肌はすべすべしていたが、一生涯を経てきたように引きつって歪んでいた。竈謹と光っているが年寄りくさい目。子供のものらしくきゃしゃで美しくはあるが、——血と埃にまみれてひび割れの跡がついている醜いむき出しの足。赤児の野蛮人。幼児の怪物。子供とは無縁の子供。生き延びて成長すれば人間の外形は呈するが、内面は終生野獣に過ぎない生き物。

これまで狩り立てられ、いじめまかれてきた獣のように、この子供は見つめられるとますます小さくうずくまって相手を見返し、打たれることを予期して身体の前に片腕を構え、それを防ごうとした。

「おいらを殴ったら咬みついてやる！」と子供が言った。

ほんの少し前ならば、このような姿を見て化学者の心は苦しみで締めつけられたことであろう。今や彼は冷然とその子供を見下ろしていた。だが、何かを思い出そうと苦しみながら——それを知るすべもなかったが——彼は、何用あって、どこからやって来たのかと尋ねた。

「あのひとはどこ？」と子供が答えた。「あのひとに会いたいんだ。」

「誰のことかね？」

「あのひとだよ。おいらをここへ連れてきて、でっかい火のそばへ座らせてくれたひとだよ。あのひとが出て行ってからなかなか帰って来ないので、探しに出て、道に迷ってしまったんだ。あんたなんかには用はない。あの人に会いたいんだ。」

【四四】



【四五】

子供は出し抜けに逃げ出そうとして跳び上がり、あっという間に床を蹴る裸足の鈍い音が幕の近くに達したが、レドローは子供のまとうぼろ布をつかんでいた。

「ねえ！放してよ！」と子供はもがいて歯をくいしばり、ぶつぶつと不平を言った。

「あんたには何もしてないじゃないか。放してくれ、あのひとの所へ行かせてくれよ！」

「そっちじゃない。もっと近道があるんだ、」レドローは、子供をつかまえたまま、当然この醜悪な子供につながりのあるはずの記憶を呼び戻そうと相変わらず空しい努力を重ねながら言った、「おまえの名は？」

「あるもんか。」

「どこに住んでる？」

「住んでる！そんなこと知らないね。」

少年は、目に掛かっていた髪の毛を頭を振って払いのけ一瞬彼を見た。そして体を捻って離れようともがきながら、急に大声を出して、前の言葉を繰り返した、「ねえ、放してよ。あのひとを見つけないんだから。」

化学者は彼を戸口へ連れて行った。「こっちだ」と彼は言った。彼はまだ困ったように子供を見つめていたが、彼の冷ややかな心には子供に対する嫌悪感と子供を遠ざけたいという気持ちが募っていた。「私が連れて行ってやる。」

部屋をあてどなく見回していた子供の鋭い目が、夕食の残り物が置いてある食卓にとまった。

「あれを少しおくれ！」と子供は欲をむき出しにして言った。

【四六】

「おばさんに食べさせてもらったんじゃないのかね？」

「明日^{あした}はまた腹が空くじゃないか。おいらはいつも腹が空いてるんだ。」

解放されると知るや、彼は何か小さな獣のように食卓に飛びかかり、パンと肉とぼろぼろの服とを一緒くたにして胸に抱きかかえ、そして言った、

「さあ！あのひとの所に連れて行っておくれよ！」

子供に触れたくないと思う嫌悪感が新たに募ってきたので、後について来るように厳しく合図して戸口から出ようとした途端、彼は身震いを覚えて立ちすくんだ。

「私が授ける贈り物を、おまえはどこへ行こうともさらに人に授けることになるう！」

亡霊の言葉が風の中に聞こえ、風が冷たく彼の身体に吹きつけてきた。

「今夜はあそこへは行くまい」と彼は弱々しい声で呟いた。

「今夜はどこにも行くまい。おい！この長いアーチ型の廊下を真直ぐに進み、大きな黒い扉を抜けて中庭へ出る、——そうすればその窓に火が照り映えているのが見える。」

「あのひとの家の火だね？」と子供が尋ねた。

彼がうなずくと、子供のむき出しの足はあっという間に飛び出して消えてしまった。彼は灯火^{あかり}を持って自室にもどり、急いで扉の錠をかけ、椅子に腰を下ろしてまるで自分自身を恐れているかのように手で顔を覆った。

今や彼は本当にひとりになってしまった。まったくひとりに。

【四七】



第二章

行き渡った贈り物

新聞の小さな切り抜きが一面に貼られている小さな衝立によって、小さな店から仕切られている、小さな居間の椅子に、小さな男が腰を掛けていた。小さな男と共に、数えあげようとすれば際限がないほど沢山の小さな子供たちがいた——少なくともそう思われた。彼らはきわめて不十分な活動範囲内に置かれているので、数という点で、実に際立った効果をあげていた。

この子供たちの群れのうちの二人は、ある強力な超自然力¹¹によって、むりやり隅のベッドに押し込まれて、当然子供らしいあどけない眠りについて、気持ち良く休息して良

【四八】

いものを、そんなことは体質に合わないのか、いつまでも起きていて、ベッドの中や外で取っ組み合いをやめなかった。目覚めている外界へのこの略奪的突撃の直接の原因は、年端の行かない別の二人が、部屋の隅に牡蠣殻の城壁を建設していることだった。ベッドに入れられた二人の子供は、(歴史学習の初期において、大多数の若きブリトン族¹²を悩ます例の呪わしい、ピクト族¹³やスコット族¹⁴よろしく)その砦を間断なく急襲して自分の領地に撤退するのであった。

こうした侵略や、侵略を受けた側が相手を激しく追跡し、相手の逃げ込んだ寝具に猛攻を加えるといったことで生じる混乱に端を発して、別の小さな子供が、別のベッドでその深靴を水に投げ込み、¹⁵家財に大混乱という一灯を献じた。¹⁶つまり、深靴とか、固くて飛び道具とは考えられても、それ自体傷を負わせる恐れのない幾つかの小さな品物を睡眠の邪魔をする相手に投げつける——すると相手もすぐにそのお返しをするといった具合であった。

さらに別の子供——その中では一番大きいのだが、小さいことに変わらない——が、大きくて重い乳呑児をかかえ、そのために膝に相当な支障をきたし、片方に傾いてそこら中

¹¹ 親の暴力をからかった表現。

¹² 五世紀のアングロサクソン族の侵入当時、ブリテン島に先住していたケルト人。ここでは一般的にイギリスの子供のこと。

¹³ スコットランドの北東部に三世紀末から九世紀中ごろまで定住し、八四五年スコット族に征服された民族。

¹⁴ 六世紀にアイルランドからイングランド北西部に移住した。スコットランドはこの種族名による。

¹⁵ 「伝道の書」第十一章一節「あなたのパンを水の上に投げよ・・・」をもじったもの。一般に「陰徳を施す」の意に用いられる。

¹⁶ 「マルコ伝」第一二章四十三節の「貧者の一灯」をもじったもの。

よろめき歩いていた。楽天的な家庭で時折信用されている根も葉もない考えから、そうやってその子が赤ん坊をあやして寝かせつけているとみな思っていた。だが、ああ！その時、何も知らない子供の肩越しに、乳呑児の目はひたすら大きく見開かれ、考察と警戒という果てしない広がりに向かって

【四九】

目を凝らし始めていたのだ！

その乳呑児は、まさにモレク神¹⁷のような子で、飽くことを知らぬその祭壇には、他ならぬこの幼い兄の生活すべてが、日々の生贄^{いけにえ}として捧げられていた。この乳呑児の特性はひと所に五分も続けてじっとしていることができず、寝かせようとしてもけっして眠ろうとはしないというところにあると言えるだろう。「テタビィの赤ん坊」は、この辺りでは、郵便集配人や酒場のボーイのようによく知られていた。乳呑児は、月曜日の朝から土曜日の晩まで、小さなジョニィ・テタビィの腕に抱かれて戸口から戸口へとうろつき、軽業師や猿のあとについて歩く子供たちの群れのどんじりをのろのろと進み、片方にひどくかしいだ状態でやって行くのだが、すんでの所で面白いところはいつも見逃していた。このモレク嬢は、ジョニィをへとへとにさせて、子供たちが集まって遊んでいる所にはどこにでも姿を見せた。ジョニィがどこかで休みたいと思うときまってモレク嬢はむずかり、じっとしていようとはしない。ジョニィが外に出ようと思うといつでもモレク嬢は眠っており、そばで見守ってやらなければならないのだ。ジョニィが家に居たいと思うといつもモレク嬢は目を覚ましていて、外に連れ出してやらなければ承知しない。だが、ジョニィは、その子がイギリス王国においてまたとない完全無欠な赤ん坊であると心から信じていて、その赤ん坊の服の裾のところから、あるいは縁のぐにゃりと垂れた帽子越しに、世間一般の出来事を控え目に眺めたり、また、宛先不明のため配達不可能な大そう大きな荷物を預けられた大そう小さなポーターのように、その子を抱いてよろよろと歩き回ることじゅうぶん満足していた。

【五十】

小さな居間の椅子に腰をかけ、この騒ぎの中で静かに新聞を読もうと無駄な努力をしている小さな男は、子供たちの父親であり、また「A・テタビィ^{カンパニー}商会、新聞・雑誌販売業」という名称と商号とが、その小さな店の正面上部に刻まれている商会の頭首でもあった。しかし、厳密に言えば、その名称にかなう人物は彼一人だけであった。それというのも、^{カンパニー}商会というのはまったく根拠のない、非人格的な詩的抽象概念に過ぎなかったからである。

テタビィ商会は、エルサレム館の角にある店であった。陳列窓には、主に遠い昔の絵入

¹⁷ 『旧約聖書』において、古代セム族が幼児を犠牲として供えた神。

り新聞や続き物の海賊版や盗賊版などの文学作品が麗々しく置かれていた。ステッキやビー玉も商品の中に含まれていた。以前、テタビィは、ちょっとした菓子販売に商売を広げたことがあった。しかし、そのような優雅なものは、エルサレム館界隈では需要がないと見えて、菓子販売業の名残を留めているものといえば、陳列窓に飾られている、形がくずれて固まり状になった黒い鉄砲玉の入っている、小さなちょうちん型のガラス容器だけであった。その飴は、夏には溶け、冬には固まり、容器から取り出すこともできず、食べようとするれば容器ごと食べざるを得ないような有様であった。テタビィ商会は、幾つかの商売に手を出してきた。ある時は、遠慮がちにおもちゃを売ってみたこともあった。というのも、別のちょうちん型の容器の中には、実にちっぽけな蠟人形が山ほども入っていてそれがめちゃくちゃにくっつき合っており、お互いの頭に足を載せあい、底には折れた手足が沈澱し、まったくすさまじい混乱状態を呈していたからである。また婦人帽子を商ったこともあって、それを証拠だてるように陳列窓の隅に、ひからびて筋ばった婦人帽の型が、二つ三つ置かれていた。また煙草販売によって、生活の資が得られるかもしれぬとい

【五一】

う考えから、大英帝国を構成する主要三カ国¹⁸ それぞれの国の人物が、その香しい煙草を味わっている絵を看板にして立てたこともあった。その絵には詩の題銘がついていて、その趣旨は、腰を下ろし、冗談を言い合っている三人は煙草のことでは意見が一致していて、一人は煙草を噛み、もう一人は煙草を嗅ぎ、残りの一人は煙草をふかしているというものである。しかし、その絵からは何も良い結果は生まれてこなかったようである——ただし、蠅だけは出てきた。また、模造宝石細工類に、空しく望みが託された時期もあった。一枚の窓ガラスに、安価な印鑑の見本カードや九ペンスの正札のついた鉛筆入れとか用途の知れない黒い謎めいたお守りの見本カードが貼られていることでもそれは分かった。しかし、エルサレム館の人たちが、これまでにそこで物を買ったためしはなかった。要するに、テタビィは、エルサレム館の人たちから、どうにかして生活の資を得ようと、実に懸命に努めてきたのだが、どの商売も左前になってしまったようで、テタビィ商会^{カンパニー}における最上の地位が、テタビィにではなく^{カンパニー}商会の方にあることは火を見るよりも明らかであった。無形の創造物であるが故に、商会は、飢えや渴きといった通俗的な不自由に悩まされることも、救貧税や評価税を課せられることもなく、養うべき子供もいないからである。

しかしながら、テタビィ自身は、既に述べたように小さな居間にいたが、騒々しい子供たちの存在が彼の神経にさわり、それを無視することもまた静かに新聞を読んで気を鎮めることもできず、新聞を置いて、途方にくれ、行くあてもない伝書鳩のように部屋を二、三度ぐるぐると回った。その間に、かたわらを一人、二人かすめて通った寝間着姿の子供めがけて、テタビィは徒ら

¹⁸ インド、アフリカ、西インド諸島のこと。

【五二】

につっかかった後、子供たちの中でただ一人罪のないモレク嬢の子守りに襲いかかって、彼の横つつらをぴしゃりと打った。

「このいたずら小僧め！」とテタビィ氏は言った、「冬のこんなに厳しい朝も、五時から起きて、疲労と心労の一日を過ごした哀れな父親に少しも同情をしないで、こんないたずらをしてわしの休息を奪い、折角つかんだ最新の情報を台なしにしてしまうのか。おまえの兄ちゃんのドルファス¹⁹は、こんな霧と寒さの中で、懸命に働いているというのに、おまえはぜいたくのしほうだいをしてまだ不足なのか——赤ん坊もいるし、望みのものは何でもあるというのに」とテタビィは、これを祝福のきわみとしてつけ加えながら、だめを押して言った、「家の中をめちゃくちゃにし、親を気違いにしなければ気がすまないのか？ そうなのか、ジョニィ？ ええ？」質問のたびにテタビィはその子の横つつらをまたひっぱたくふりをしたが、思い直して手をひっこめた。

「ああ、父ちゃんたら！」ジョニィは、すすり泣きながら言った、「ぼくは、一生懸命サリィの世話をし、寝かしつけようとしているだけで、何も悪いことはしていないよ。父ちゃんたら！」

「うちのおちびさんが、帰って来てくれるといいんだが！」テタビィ氏は、その子を不憫ふびんに思い、自分の行為を悔いて言った、「おちびさんが帰って来てくれると本当にいいんだが！ わしは子供が苦手だ。目がまわってしまって、わしにはお手上げだ。ああ、ジョニィ！ その可愛い妹を、母さんから与えてもらっただけで、じゅうぶんではないか」と彼はモレク嬢を指差して言

【五三】

った、「おまえたち七人は、女気のない男の子ばかりだったから母さんは、おまえたちに可愛い妹ができるようにと、苦勞に苦勞を重ねてきたのに、おまえたちは、わしの目を回すようなことをしなければ気が済まんのだな？」

彼自身も傷ついた息子も自分たちの優しい心に感じるものがあり、テタビィ氏は次第に心を和らげ、言い終えると息子を抱き締めたが、またすぐ真犯人の一人を捕えるため勢いよく彼から離れた。かなりうまくスタートをきったので、彼は抜け目なくひと走りし、骨の折れる野外横断作戦よろしく、寝台の下に潜ったりその上に上がったり、入り組んだ椅子の間を出たり入ったりして、かなり苦勞したあげく子供を逮捕することに成功し、それに相応の罰を加えてから、ベッドに運んだ。この見せしめは、明らかに強力な催眠作用を深靴投げの児に及ぼし、この子はほんの一瞬前までは、ぱっちり目を開けて実に意気盛んであったのに、立ちどころに深い眠りに落ちてしまった。それはまた、二人の幼い建

¹⁹ アドルファスの略称。

築家にも作用を及ぼし、彼らは大急ぎで、しかも実にこっそりと、衝立一枚を隔てた隣室のベッドに退却した。途中で逮捕された幼児の仲間もまた、同じように分別を働かせて自分のねぐらに引っ込み、テタビィ氏がやっと一息ついた時、彼は思いがけない静寂の中に置かれていた。

「おちびさんでさえ」テタビィ氏は紅潮した顔を拭きながら言った、「これほどうまくはできなかつたらう！本当は、おちびさんにそうしてもらいたかったんだが、まったく！」

テタビィ氏は、子供たちの心にこの際しっかり刻み付けるのにふさわしい一節を衝立に貼られた新聞に求めて、次のように読みあげた。

【五四】

「『すぐれた人間はすべてすぐれた母親を持ち、後年、最良の友として母親を尊敬しているということは紛れもない事実である。』おまえたちも自分自身のすぐれた母親のことをよく考えるんだよ」と彼は言った、「まだ母さんがおまえたちのそばにいる間に、その尊さを知らなくてはいかん！」

彼は、暖炉のそばの椅子に腰を掛けて脚を重ね、新聞を読んで心を鎮めた。

「今度ベッドから出てくる者がいたら、それが誰であろうと、」テタビィ氏は非常に優しい口調で全員に対して布告を下した、「驚愕が、かの名だたる同業誌を見舞うことであろう！」——この言葉は衝立に貼られた切り抜きから選り抜かれたものであった。「おい、ジョニィ、おまえのたった一人の妹サリィの面倒を見てやっておくれ。サリィは幼いおまえの額に輝く最も美しい玉のような子なんだから。²⁰」

ジョニィは小さい床机に腰を下ろしたが、モレク嬢の重さに耐えかねて、献身的な気持ちから押し潰されてしまった。

「ああ、ジョニィ、その赤ん坊はおまえにとって素晴らしい贈り物なんだよ！」と父親は言った、「感謝をしなければ罰があたるぞ！」彼は、ここで再び衝立から引用して言った。

「『一般には知られていないが、正確な統計によると、二歳未満の嬰兒の死亡率は以下のごとくきわめて高いことが確認されている。すなわち——』」

「ああ、父ちゃん、もう言わないで！」とジョニィは叫んだ。「サリィのことを考えるとぼくはもうこらえられないよ。」

【五五】

父親が読むのを止めてくれたので、ジョニィは父親に一層の信頼感を抱き、涙を拭くと乳呑児をあやした。

²⁰ これも切り抜きの文章。

「ジョニィ、兄ちゃんのドルファスは」と父親は火を掻き立てながら言った、「今夜は遅いから、氷の固まりのようになって帰ってくるだろうな。母さんはどうしたんだろう？」

「ほら、母ちゃんが帰って来たよ、ドルファス兄ちゃんもだ、父ちゃん！」とジョニィは叫んだ、「きっとそうだ。」

「おまえの言う通りだ！」父親は聞き耳をたてながら答えた。「確かにおちびさんの足音だ。」

自分の妻が、小さい女であるという結論をテタビィ氏がどのような帰納的推理を経て得たのかは彼自身の秘密であった。彼女は優に彼の二倍はあったであろう。比較を離れて見ても、彼女は驚くほど頑丈で大柄な女であったが、夫と比較すると、彼女の大きさは誠に堂々たるものであった。いかにも小柄な息子を七人そろえた上で彼女の大きさを吟味しても、その堂々たるかっぷくはいささかも変わらなかった。しかしながら、サリィの場合にはテタビィ夫人はついに自己を主張した。²¹ このことは昼間絶えずその苛酷な偶像の体重を計り、寸法を取っている生贄^{いけにえ}のジョニィが一番よく知っていた。

籠を持って買い物に出かけていたテタビィ夫人は、帰ってくるなりボンネットとショールとを後ろにかなぐり捨てた。そして、疲れて椅子に腰を下ろすと接吻してやりたいから、可愛い赤ん坊をすぐ連れて来るようにジョニィに命じた。ジョニィがそれに応じ、自分の床机のところにもどって再び潰れた時に、アドルフアス・テタビィ君が、見たところ果てしない長さのある虹色の毛

【五六】

糸の襟巻き²²を胴体から解き終え、母親と同じ恩恵を施してくれるように求めた。ジョニィがまた、それに応じ、また自分の床机のところにもどって、また潰れた時、テタビィ氏は突然ある思いに突かれて、父親の立場から同じ要求を持ち出した。この三番目の要求に応じて疲労困憊^{こんぱい}した生贄は、すでに息も絶え絶えで自分の床机のところにもどる元気も、再び潰れる元気も、血族に向かって喘^{あえ}いでみせる元気もなくなっていた。

「ジョニィ、どんなことがあっても」テタビィ夫人は頭を振りながら言った、「サリィには気をつけてやってね。そうできないと言うのなら、二度と母さんの顔を見ないでちょうだい。」

「兄ちゃんの顔もだよ」とアドルフアス。

「お父さんの顔もだ、ジョニィ」とテタビィ氏も付け加えた。

ジョニィは、この条件付きの絶縁宣言に大変動揺して、モレク嬢の目に今のところまったく異常がないことを覗いて確かめると、(上になっている)乳呑児の背中を軽く巧みに叩

²¹ サリィだけが太柄な赤ん坊であったこと。

²² 汚れたつぎはぎ模様の襟巻きを美化した表現。

き、足で揺すった。

「おい、ドルファス、濡れたのか？」と父親が言った、「わしの椅子に座って乾かしたらどうだ。」

「いや、父ちゃん、いいんだ」アドルフアスは濡れた服を両手で伸ばしながら言った。

「それほど濡れちゃいけないと思うよ。ぼくの顔そんなに光ってるの、父ちゃん？」

「そうだな、ろうのように見えるのは確かだな」とテタビィ氏は答えた。

「この天気 of せいなんだ、父ちゃん、」アドルフアスはすり切れた上着の袖で頬をこすりなが

【五七】

ら言った。「雨やみぞれ霧や風や雪や霧でたしかに顔に発疹が出ることもあるんだ。そう、光るんだよ——ああ、いやだなあ、もう！」

父親と同様に新聞販売を仕事にしているアドルフアス君は、父親の商会よりももっと繁盛している商会に雇われて、駅で新聞を売っていた。みすばらしいなりをしたキューピッドのような彼の小さな丸ぼちゃの身体と、甲高い可愛い声(彼は十歳にはとても満たなかった)は、駅を出入りする機関車の出すかすれて喘ぐような蒸気の音と同じように人々の馴染みになっていた。幼くして仕事に身を投じていた彼は、仕事を怠ることなく長い一日を興味ある段階に分割して楽しむ方法を運よく発見しなかったら、若さの安全なはけ口がなくて少々困っていたかも知れない。多くの素晴らしい発見と同じように、驚くほど単純なこの独創的工夫は、「ペーパー」という語の第一母音を、一日の各段階で文法的順序に従い、他の母音に置き換えることにあった。したがって、冬の夜明け前に、彼は、小さい油布製の帽子と外套、大きい毛糸の襟巻きとを身につけて、行ったり来たりしながら重い空気を突き破って「モーニング・ペーパー (Morn-ing Pa-per)！」と叫んだ。この叫びが、正午の一時間前には「モーニング・ペパー (Morn-ing Pep-per)！」に変わり、二時頃には「モーニング・ピパー (Morn-ing Pip-per)！」、その二時間後には、「モーニング・ポパー (Morn-ing Pop-per)！」となり、日没とともに「イーヴニング・パパー！ (Eve-ning Pup-per)！」になって格変化を終えると²³ この若い紳士は心が大変軽くなり、ほっと救われた気持ちになるのであった。

彼にとっては淑女でもあり母親でもあるテタビィ夫人は、前述したようにボンネットとショー

²³ 原語の decline には「夕日が傾く」と「格変化させる」の二重の意味が持たせてある。pup-per は Supper (夕食) を連想させる。

【五八】

ルとを後ろにかなぐり捨て、椅子に腰を下ろすと、指にはめている結婚指輪をくるくる回して物思い耽っていたが、やっと立ち上がり、外出着を脱いで夕食の支度を始めた。

「ああ、やれやれ！」とテタビィ夫人は言った。「これが世の成り行きというものなのね！」

「何が世の成り行きだって、おまえ？」テタビィ氏は振り返って尋ねた。

「あら、何でもないのよ！」とテタビィ夫人は言った。

テタビィ氏は眉をあげて、新たに新聞を折り返し、目を上下左右に動かしてはいたが、心ここにあらずといった感じで読んではいなかった。

テタビィ夫人はその時食事の支度をしていたが、食卓をナイフやフォークでやたらとひどく打ったり、皿でぴしゃりと叩いたり、塩入れで打ってへこませたり、パンの塊りをドスンとぶつかけたりして、家族の夕食の準備をしているというより、まるで食卓に刑罰を課しているかのようであった。

「ああ、やれやれ！」とテタビィ夫人は言った。「これがこの世の成り行きというものなんだわ！」

「なあ、おまえ」夫は再び振り返って言った、「同じことばかり言っているが、何がこの世の成り行きなのかね？」

「あら、何でもないのよ！」とテタビィ夫人は言った。「ソファイア！」と夫は抗議した、「それも前に言ったではないか。」

「それでしたらもう一度言ってさしあげますわ」とテタビィ夫人は言葉を返した。「あら、何

【五九】



【六〇】

でもないのよ——そら！よろしかったらもう一度、あら、何でもないのよ——ほら！よろしかったらもう一度、あら何でもないのよ——これでいいわね！」

テタビィ氏はいささか驚いて、最愛の妻に視線を向けて言った。

「おちびさん、何をいらいらしているんだい？」

「私などに分かるものですか」と彼女は答えた。「ほっておいて下さいな。一体誰がいらいらしてるって言ったの？自分の口からは言ってませんよ。」

テタビィ氏は、新聞を読むのは無駄な骨折りだと分かって諦め、両手を後ろに回し、肩を上げ、部屋の中をゆっくりと歩いて——その歩き振りは彼の様子からうかがえる諦めの心境を如実に表わしていた——上の息子二人に話しかけた。

「おまえの夕食はすぐできるからな、ドルファス」とテタビィ氏は言った。「母さんは雨の中をそれを買いに料理店へ行ってくれたんだ。優しい母さんだからそれほどまでにしてくれるんだ。おまえにもじきに夕食を食べさせてやるからな、ジョニィ。母さんは、おまえが大切な妹の世話をよくしてくれるから喜んでるんだよ。」

テタビィ夫人は黙っていたが、食卓に対する憎しみの気持ちは明らかに消えており、食事の準備を終えると、たっぷりと入る籠から紙に包んだ分厚い焼きたての豆粉プディングと、受け皿で蓋をした鉢とを取り出した。その受け皿が取られると、実に快い香りがぱっと漂い出たので、二つのベッドの中の三組の目が大きく見開かれ、その御馳走の上に釘づけになった。テタビィ氏は、食卓につくように誘うこの無言の招きから顔をそらして、立ったままゆっくり繰り返して言った、

【六一】

「そうとも、そうとも、おまえの夕食はすぐできるからな、ドルファス——母さんは雨の中をそれを買いに料理店へ行ってくれたんだ。優しい母さんだからそれほどまでにしてくれるんだよ」——その時、彼の背後でいろいろと後悔の気持ちを顔に表わしていたテタビィ夫人は、彼の首を抱き締め、そして泣き出した。

「ああ、ドルファス！」とテタビィ夫人は言った、「どうして私はあんな振る舞いをしてしまったんでしょう？」

この和解に、アドルフ君とジョニィはいたく感動し、二人は合わせたように陰うつな叫び声を上げた。そのためベッドの中の丸い目はたちまち閉じられ、折しも隣室から食事の様子を窺いに忍び込んで来たもう二人のちびたちも尻に帆をかけて退散した。

「ほんとに、ドルファス」テタビィ夫人は、すすり泣きながら言った、「帰る道すがら、死産した子供のことで頭が一杯になって——」

テタビィ氏には、この言い方が気に入らなかつたらしく、「赤ん坊のことで、と言った

らどうかね」と彼の意見を述べた。

「——赤ん坊のことで頭が一杯だったの」とテタビィ夫人は言った。——「ジョニィ、私を見ないで、その子を見ておやり。おまえの膝から転がり落ちて死んだらどうするの。そんなことになったら、悲しみのあまり死んでその報いを受けることになるわよ——家に帰る時、その子のことで頭が一杯でむしゃくしゃして仕方がなかったの。でも、どういうわけか、ドルファス——」テタビィ夫人はそこで言いためらって、指にはめている結婚指輪を再びくるくると回した。

【六二】

「そうだったのか！」とテタビィ氏は言った。分かったよ！ちびさんは、いらいらしていたんだ。辛い時勢ではあるし、気候も厳しく、家事も大変なのだから苦しい思いをすることだってあるわけだ。そうだったのか、可哀そうに！それもそのはずだ！おい、ドルフ」テタビィ氏は、フォークで鉢の中を探りながら続けた、「母さんは、料理店に行って豆粉プディングのほかに、芥子入りの肉汁でふんだんに味付けされた、たっぷりと上皮のついている、立派な焼き豚の膝肉を丸ごと買って来てくれたのだよ。さあ、皿を渡しなさい。煮えている間に食べ始めようじゃないか。」

アドルフ君は、再び呼ばれるまでもなく、食欲で目を潤ませながら分け前を受け取り、彼専用の床机のところに行って、夕食に猛然と襲いかかった。ジョニィをのけ者にしたわけではない。彼は、肉汁を飛び散らして乳呑児の上に少しなりとも垂らすようなことがないように、自分の糧食としてパンを貰った。彼は同じ理由から、服務についている時は、ポケットに自分のプディングを入れておかないように命じられていた。

趾骨^{しこつ}にはもっとたくさんの肉がついていてもよかった——料理店で肉を切る人が、前の客に切り分ける際に、その趾骨から忘れずに肉を切り取ったに違いない——だが調味料はたっぷりかけてあった。この調味料という添加物が豚肉をおぼろげに連想させ、味覚を心地よく欺くのである。さらに豆粉プディングや芥子入りの肉汁は、たとえ豚肉そのものではないにしても、あの東洋の薔薇の周りで歌う夜暗鳥^{ナイティンゲール}²⁴のように、豚肉の傍で暮らしていたのである。そのような次第で、大体のところ中位の豚程度の

【六三】

香りはしていたわけである。安らかに眠っているふりをしていたベッドの子供たちはその香りにとても抵抗できず、やがて両親が見ていないすきをねらって這い出てくると、兄た

²⁴ トマス・ムア<一七七九 - 一八五二>の物語詩『ララ・ルク』の中に、<夜啼鳥の声ひねもす聞こえ / 我が幼かりし日々、かぐわしき夢の如く / 薔薇のしげみに座してそを聞きぬ>という一節がある。

ちに兄弟愛のあることを幾らかなりとも示して、食べ物を分けてくれるよう無言で訴えた。彼らは薄情ではなかったのでそれに応えて食べ残しを与えてやると、寝間着姿の軽散兵の一隊は食事の間中、居間を駆け回ってテタビィ氏を大いに悩ますことになった。彼がやむなく、一、二度突撃すると、このゲリラ兵たちは算を乱して四方八方に退却した。

テタビィ夫人は味気ない思いで食事をしていた。何かが気に掛かっている様子であった。わけもなく笑ったかと思うとわけもなく泣き出し、ついにはまったく常軌を逸した泣き笑いをして夫を狼狽させた。

「おちびさん」とテタビィ氏は言った、「もしそれが世の成り行きというものなら、どうも変てこなことになって、おまえさんは息がつまってしまうよ。」

「水を少しおくれでないかい、」テタビィ夫人は自分と戦いながら言った、「今話しかけたり、私に構ったりしないでちょうだい。後生だから！」

テタビィ氏は水を手渡した後で、突然、(同情心に盗れている)不運なジョニィに食ってかかり、そこでぶらぶら怠けて大飯を食らってばかりいないで、赤ん坊を連れて来て母さんを元気づけてやったらどうだと迫った。ジョニィは、赤ん坊に押し潰されながら、すぐに母親のところへ行った。しかし、テタビィ夫人が片手を差し出して、そんなにして母親の情愛に訴えられるととても辛くて耐えられないという気持ちを伝えたので、彼は一歩でも近づけば、最愛の血縁者全員

【六四】

から永久に憎まれると察し、それを無視してまで近づくことはできなかった。したがって、彼は再び自分の床机のところにもどってくると、以前と同じように潰れてしまった。

しばらく間があって、テタビィ夫人は、もう気分が良くなったと言い、笑い出した。

「おちびさん」夫は半信半疑で言った、「本当に良くなったのかい？それとも、ソファイア、またおかしくなってしまうんじゃないだろうね？」

「いいえ、ドルファス、けっして」と妻は答えた。「もう大丈夫だわ。」彼女はそう言いながら、髪を直し、両の手の平を^{まぶた}目蓋に押し当てて、また笑った。

「ちょっとでもあんなことを考えるなんて私はひどいお馬鹿さんだったわ！」とテタビィ夫人は言った。「ドルファス、もっとそばに来てちょうだい。寛いだ気持ちで話したいの。私の話を全部聞いてね。」テタビィ氏が自分の椅子を寄せると、妻はまた笑い、彼を抱き締めて涙を拭った。

「ねえ、おまえさん」とテタビィ夫人は言った、「私が娘の時は、もしそんなことが許されるなら、幾人かの男の人のお嫁さんになることもできたはずだったわね。一度に四人の男性から^{ひと}言い寄られたこともあったのだから。そのうちの二人はマルスの子²⁵ だったわ。」

²⁵ マルスは軍神でマルスの子と言えば軍人のこと。

「わたちはみな」とテタビィ氏は言った、「パパとの連帯で生まれたママの子²⁶だよ。」

「そうじゃないの」と妻は答えた、「軍人のこと——軍曹のことを言っているのよ。」

「ああ！」とテタビィ氏は言った。

【六五】

「ところで、ドルファス、今、私がこんなことを思い出すのは、何も後悔しているからじゃないのよ。私には誰にも負けない立派な夫があるんだから。その人を愛していることを立証するためなら何でもするわ。誰だって私ほど——。」

「世界中のどんなおちびさんほどもな」とテタビィ氏は言った。「大変結構。実に結構なことだ。」

かりにテタビィ氏の背丈が十フィートあったとしても、妖精のごときテタビィ夫人にこれ以上の優しい思いやりを示すことはできなかつたであろう。また、テタビィ夫人の背丈が二フィートしかなかったところで、彼女はそれを、至極当然なことと感じたことであろう。

「でもね、ドルファス」とテタビィ夫人は言った、「今クリスマスでしょう。休暇の取れる人は取り、お金のある人は少しでも買い物がしたくなる時なのよ。さっき街に出た時なぜだか元気がなくなってしまったの。とっても沢山のものが売られているの——とても美味しい食べ物とか、見ていてとてもきれいなものとか、自分のものになればとても楽しい気持ちになれるものとかがね——でも私は、ごくつまらないものに六ペンス使う勇気が出るまでに、何度も何度もお金の計算をしなくちゃならなかつたし、とても大きな買物籠で本当に沢山のものが入れられるっていうのに、私の持っているお金はほんの少力で、買えるものなんてたかが知れているの——いやな女でしょう。ドルファス？」

「そうでもないよ」とテタビィ氏は言った「今のところはね。」

「あら！じゃ全部ぶちまけるわ、」彼の妻は懺悔ざんげをするように言葉を続けた、「そうすれば

【六六】

きつといやになってよ。とぼとぼ寒い戸外を歩き回って、ほかにも沢山の女たちが、私と同じように大きな買物籠を手に、お金を勘定しながらとぼとぼ歩いているのを見た時、さっき私が言ったことを痛切に感じて、自分はもっとましな生き方ができて、もっと幸福になれたのでは、と考え始めたわけ。もし——私が、」結婚指輪がまたぐるりと回った。テタビィ夫人は指輪を回しながら、うつむけた頭を横に振った。

²⁶ 発音が「マーズ」と同じだったので間違えたもの。

「なるほど」夫が静かに言った、「もしおまえが一度も結婚していなかったら、あるいは、他の誰かと結婚していたら、とそう言いたいのだね？」

「ええ」とテタビィ夫人はすすり泣きながら言った。「その通りのことを考えたわ。今度はいやになったでしょう、ドルファス？」

「いやそんなことはない」とテタビィ氏は言った、「そうは思わないよ、まだね。」

テタビィ夫人は、彼に感謝の接吻をし、話し続けた。

「ドルファス、今の私は、あなたに嫌われなければいいと思い始めているの。一番悪いことはまだ話していないって言うのに。自分が何に取り憑かれたのか想像もつかないのよ。病気だったのか、気がおかしくなっていたのか、また自分がどうなっていたのか私には分からないけど、私たちをお互いに結びつけてくれるように思われるもの、あるいは私を自分の運命に満足するようにしてくれると思われるものを、何ひとつ思い出すことができなかったの。二人で味わってきた過去のあらゆる楽しみや喜び——そうしたものがとてもみずばらしく、無意味なように思えていや気がさしたの。それらをさげすんで、踏みつけることさえ、その時の私にはできたでしょう。」

【六七】

そして、私たちが貧乏で、家には養わなければならない多くの家族がいるということしか思い出せなかったの。」

「うん、うん、おまえ」テタビィ氏は元気づけるように彼女の手を取り、それを揺すって言った。「結局、そういうことなんだ。まったくわたちは貧乏で、家には食べさせなくてはならない家族が沢山いるんだから。」

「ああ！でもドルフ、ドルフ！」妻は彼の首に取りすがって泣いた。「立派で優しくて寛大なあなた、家にもどって来てからほんの僅かの間に——何て変わったんでしょう！ああ、ドルフ、本当に何という変化かしら！突然にいろいろなことが思い出されるようで、心が和み、胸が一杯になって今にも張り裂けそうになったのよ。結婚して私たちが生計を立てるために苦勞を重ねてきたり、生活上の苦勞とか不自由を忍び、家族が病気になるとお互いに、また子供たちに助けられて看病の時を過ごしたこと、そうしたすべてのことが私に語りかけてきて、私たちが心を一つにすることができたのはそのお陰であり、私がこの通りの妻であり母であって、それ以外のものにはけっしてなり得ないし、それ以外のものになれるはずもないし、それ以外のものであることはけっしてなかったであろうと教えてくれたわけなの。それで、本当に残酷にも踏みつけかねなかったちっぽけな喜びが私にとって本当に大切なもの——ああ、かけがえもなく貴いものなのに！——と感じられてきて、それをどれほど不当に考えたかと思うと、耐えられない思いだったわ。私は自分に言ったの、また何度でも言うわ、ドルファス、どうしてあんな態度が取れたのでしょうか？よくもまあ、あんな気持ちになれたものだわ！」

【六八】

善良な妻は、持ち前の真心からの優しさと悔恨の情に駆られて泣きむせんでいたが、突然悲鳴をあげて立ち上がり、走って夫の後ろに隠れた。この怯えた叫びに、子供たちは眠りを覚まされベッドから飛び起きると、彼女の身体にしがみついた。いつの間にか部屋に入り込んでいた黒マント姿の青白い顔をした男を指差して、それを凝視する彼女のまなざしが、叫び声にこめられた恐怖心をそのまま伝えていた。

「あの人を見て！ほらそこよ！どうしてここに？」

「ねえ、おまえ」と夫が答えた、「訊いてみるから手を放してくれないか。どうしたっていいのだい？こんなに震えて！」

「ついさっき外に出た時、道であの人が会ったの。私の顔を見て、私のそばで立ち止まったのよ。私、あの人がこわいの。」

「こわいだって！一体どうして？」

「どうしてなのかわからないけど——私は——待って！おまえさん！」そう彼女が言ったのは、夫が見知らぬ男の方に行きかけていたからである。

彼女は片手を額に、片手を胸に押しあてた。身体中が奇妙な震え方をしており、目は失くし物をした時のようにせわしく不安定に動いていた。「おい、どこが悪いのか？」

「私からまた出て行こうとしているものは何なのかしら？」彼女は小声で呟いた。「本当に何が私から出て行こうとしてるんだろう？」

【六九】

そう言ったあと、彼女はぶっきら棒な調子で夫の問いに答えた、「悪いかって？至極元気ですよ。」そして彼女は突っ立ったまま、気が抜けたように床を見ていた。

彼女が最初に示した恐怖が彼に与えた衝激からじゅうぶん立ち直っていなかった上に、今目にした彼女の奇妙な振る舞いによって、夫はますます不安な気持ちを掻き立てられ、じっと立って地面を見下ろしている黒マント姿の青ざめた顔をした訪問者に話しかけた。

「私どもに何か御用でしょうか？」と彼は尋ねた。

「気付かれずに部屋に入ってしまった」と訪問者が答えた、「あなた方を驚かせてしまったようだ。話の最中で聞こえなかったのでしょうか。」

「うちのおちびさんの話では——お聞きになっていたとは思いますが」とテタビィ氏が言った、「あなたが家内を驚かせたのは、今初めてのことでありませんよ。」

「気の毒なことをしてしまいました。道でほんの少しだけ目をとめたのは覚えています。こわがらせようなんて気はありませんでした。」

そう言いつつ彼が目を上げると、彼女の方も目を上げた。彼女がこの男に対して示す強

い恐怖心や、またそれを彼がどれほどの恐怖心を持って——しかも、わき目も振らずじっと凝視する様子は、いかにも異様であった。

「私は」と彼は言った、「レドローという者です。すぐ近くの古い学寮にいる者です。そこで勉強している青年があなたの家に下宿しているはずなんですが？」

「デナムさんですか？」とテタビィは言った。

【七〇】

「ええ」

それは自然な所作で、ほとんど目にとまらないほど取るに足りないものであったが、小さな亭主は再び口を開く前に、その部屋の雰囲気のちょっとした変化に気付いたかのように、手で額を撫で、素早く周囲を見回した。化学者は、妻に向けていた恐怖のまなざしを即座に夫に移すと、さっと後ろにさがり、その顔はいよいよ青ざめていった。

「その方の部屋は」とテタビィが言った、二階でございます。もっと便利な私用出入口があるのですが、もうこちらに入って来ておられることですから、この小さな階段をのぼって下されば、寒い戸外に出る必要もございません」と彼はその居間と直接通じている階段を指し示して言った。「お会いになりたいのでしたら、そちらからどうぞ。」

「ええ、会いたいです」と化学者は言った。「^{あかり}灯火を貸してもらえませんか？」

化学者のやつれた顔にうかがえる警戒心と、その表情を曇らせる言い知れぬ不信感とがテタビィに戸惑いを起こさせたようだった。彼はためらった。そして、答える代わりに相手をじっと見つめ、麻痺してしまったか、あるいは魅入られでもしたかのように、しばらく立ちすくんでいた。

ようやくのことで彼は口を開いた、「ついて来て下されば、私が御案内いたしますが。」

「いや結構です」と化学者が答えた、「案内も取り次ぎも要りません。彼は私が来るとは思っていないのです。一人で行きます。よければ、その灯火をお借りしたいのだが。自分で探して行きますから。」自らの気持ちをこうして口早に述べ、ろうそくを取ろうとしたはずみに、手がその新聞販売人

【七一】

の胸に触れてしまった。図らずもその男に傷を負わせでもしたかのように、彼はあわてて手を引っ込めると(彼に与えられた新しい力が、自分の身体のどのあたりに潜んでおり、それがどのようにして相手に伝えられていくのか、またその影響の受けとめ方が人によってどんなに違って来るか、彼にはまだ分かっていなかったためなのであるが)、くるりと踵を反して、階段を上がって行った。

だが彼は階段の上まで来ると立ち止まり、下を見下ろした。妻は同じ所に立って指にはめた指輪をくるくると回していた。亭主は深くうなだれてむっつりと物思いに耽っていた。子供たちは、今も母親の周りに群がってその訪問者をこわごわと見やっていたが、見下ろされているのに気付くと互いに身体を寄せ合った。

「さあ！」父親が荒々しい口調で言った。「大概にしないか。おい、寝るんだ！」

「それでなくても、」さらに母親が付け加えた、「部屋が狭くて不自由してるんだからね。ベッドにお入り！」

子供たちはどの子も怯えて震えながら、悲しい気持ちでこそこそと出て行った。ジョニ坊やと乳呑児は、ぐずぐずしていて一番あとになってしまった。母親はそのむさ苦しい部屋をさげすむように見渡し、残った食べ物を放り投げ、後片付けもすぐにやめて椅子に腰を下ろすと、力なくぼんやりと物思いに沈んだ。父親の方は、炉端まで足を運び、いらいらと小さな火を掻き寄せ、まるで独占してやるとばかりにその上に身を屈めた。二人は一言も口をきかなかった。

化学者はますます青ざめ、夜盗のようにこっそりと上がって行った。彼は階下の変化を振り返

【七二】



【七三】

って眺めたが、進むのももどるのも等しく恐れている様子であった。

「私は一体何をしてしまったのだ！」彼は狼狽して言った。「私はこれから何をしようとしているのだ！」

「人類の恩人になろうとしているのだ。」彼は誰かの声が聞こえたような気がした。

彼は辺りを見回した。だが何も見当たらなかった。廊下に出て下の小さな居間が見えなくなかったので、彼は自分の進む方向だけに目を向けて進んで行った。

「部屋に閉じこもっていたのはほんの一晩だけだというのに、」彼は憂うつそうに眩いた、「何もかも奇妙に思われる。まるで自分が自分でないようだ。ここにこうしていても夢を見ているような気がする。この場所にしてもそうだが、どこでもいい、私が思い起こせる場所に対してどんな関心も持てないではないか。私の心はめくらになりかけている！」

扉の前に来たので、彼はそれを叩いた。中からのどうぞという声に従って彼は部屋に入った。

「ぼくの優しい看護婦さんですか？」とその声は言った。「でも聞く必要はありませんね。他に来てくれる人などいないのですから。」

その声は、もの憂げな調子ではあったが嬉しそうに話しかけ、レドローの注意力を、暖炉のそばまで引き寄せられた寝椅子の上に、背を扉の方に向けて横たわっている青年に向けさせた。青年の顔は火の入った暖炉に向けられていたが、その暖炉というのは、病人の頬のように痩せこけ落ちくぼんでいて、ほとんど暖まることのない炉床の中央に煉瓦ではめ込まれた貧弱きわまりない代物であった。吹きさらしの屋根の間近にあるために、火はせわしい音を上げてあっという間

【七四】

に燃え尽き、燃え殻が急速に崩れ落ちた。

「この暖炉で燃え尽きると、燃え殻がちりんと音を立てる」と、その学生は微笑みながら言った、「だから、噂されているように、これはお棺ではなくて財布を暗示しているんだ。うまくいけば、ぼくはいつの日か元気になり金持ちになって、やがておそらくはミリィの娘を愛し、こよなく優しく穏やかな女性のことを偲ぶようになるだろう。」

彼は、彼女に取って下さいというように手を上げた。しかし、身体が弱っているせいかもう一方の手に顔をのせ、横になったままで振り向こうとはしなかった。

化学者は部屋を見回した——まず隅の食卓の上に積み重ねられている研究書や論文——今は読むのを禁じられて取り片付けられているこうした書物や論文、そして明りの消された読書用ランプは、彼が患う前に過ごし、そしておそらくは、今の患いの原因となった長い苦学の経過を物語っていた——に彼の目は向けられた。また、かつての彼の健康と自由の印であったが、今は着られることもなく壁に掛けられたままになっている外出着に——

さらに、炉棚の上の小画像、生家のスケッチといった今ほど孤独ではなかったことを感じさせる品々に――そして、彼の競争心の証、おそらく幾分かは個人的な愛情の証でもある、傍観者自身(レドロー)を彫った額縁入りの版画にと、彼の視線は移っていった。ほんの昨日であったなら、これらの品々は、目の前にいる血のかよった人間とのほんの僅かな結びつきからでも、ひとつとしてレドローの心を打たずにはいなかったであろう。今、それらは物でしかなかった。たとえそのような連想が彼の心に閃いたところで、当惑こそすれ彼の心がそれで開くものでもなかった。彼はただいぶかしげに、ぼんや

【七五】

りと部屋を見回しながら立っていた。

学生は、上げていた細い手に誰も触ってくれないのに気が付き、寝椅子から身を起こして振り向いた。

「レドロー先生！」彼は叫んで飛び起きた。

レドローは腕を前につき出した。

「それ以上近寄ってはいけない。私はここに座る。そのままい給え！」

彼は、戸口にある椅子に腰を下ろすと、寝椅子の上に片手をついて起き上がっている青年をちらりと見て、目を床にそらして話し始めた。

「私は偶然、どういう偶然であったかはいいとして、私の講義に出ている学生の一人が病気になって、孤独に置かれているということを目にした。その学生がこの通りに住んでいるということしか分からなくて、最寄りの家から尋ね始めて、やっと探し出したわけだ。」

「ずっと具合が悪かったのですが」と学生は言った。その言葉には憤り深いためらいと、幾分彼を畏怖する気持ちがこもっていた。「もうかなり良くなりました。熱にやられまして――頭からきていると思うのですが――衰弱してしまっただけです。でも前と比べるとずっと回復しました。具合が悪かった時に、ずっとひとりきりであったとは言えません。そんなことを言ったら、ぼくのそばに居て看護してくれたあのひとのことを忘れたことになります。」

「管理人の奥さんのことだね」とレドローが言った。

「ええ、そうです。」学生は、彼女に無言の敬意を払うかのように頭を下げた。

【七六】

化学者は、寝椅子に片手をついて上体を起こしている学生に再度ちらりと目をやり、また床に目を落とすと、あたかも暗い心に光を受けようとするかのように虚空を見つめた。彼の淡々として冷たい心は、物に感じる力を失ってしまい、そのため、彼は生きている人

間というよりも、昨日この学生の状態を初めて耳にして夕食の席から飛び上がって驚いた人物の、墓に刻まれた大理石の像のような感じを与えた。

「君の名を思い出したんだ」と彼は言った、「今し方、階下で君の名前を聞いてね。君の顔にも覚えがある。親しく交わることは少なかったね！」

「ええ」

「君は他の学生よりも私を避けて、遠ざかっていたと思うのだが？」

学生はうなずいて同意を示した。

「しかし、なぜかね？」と、まったく無関心であるというよりも、不機嫌で気まぐれな好奇心を感じさせる調子で化学者が言った。「なぜかね？他の学生たちがみな帰省してなくなっているこの時期に、こうして君が残っていることや病気であることを、特に私に隠そうとしたのはどういうことなのかね？その理由を教えてくださいませんか？」

心の中で動揺をますます募らせながら彼の言葉を聞いていた青年は、目を上げて彼の顔を見つめ、両手を握り締めると、突然真剣な面持ちになり、口唇を震わせて叫んだ。

「レドロー先生！とうとう分かってしまいました。先生はぼくの秘密を知っていらっしゃるのでしょうか！」

【七七】

「秘密だって？」化学者は厳しい口調で言った。「私が知っているだって？」

「そうですとも！」学生は答えた、「心からの関心と共感をお示しになられることから、多くの学生たちに慕われていらっしゃるいつもの御様子とはとても違いますし、お声の感じも違ってきます。そして先生のお言葉とか表情に改まった感じがして、先生がぼくのことを知っておられるのが分かるんです。今でさえ、そのことを隠そうとなさるのは、先生が本当は優しい方であること、そして先生とぼくとの間には越え難い壁があることをぼくに確証して(そんな確証など欲しくはないのに！)くれるだけです。」

レドローは何も言わず、ただ空ろな軽蔑的な笑いを顔に浮かべた。

「しかし、レドロー先生」と学生は言った、「先生の受けられた不当な仕打ちや、先生がこれまで耐えてこられた悲しみも、名前と血筋を受け継いでいることを除けば、ぼくには何の関係もないのだということを、公平で善意ある一人の人間としてお考え願えませんか。」

「悲しみだって！」レドローは笑いながら言った。「不当な仕打ちだって！それが私にとって一体何だと言うのかね？」

「どうかお願いですから」学生はこわくて縮み上がりながら嘆願した、「ぼくと少しばかり言葉を交わただけで、そんなに態度を変えないで下さい！ぼくのはまた忘れて気にとめないようにして下さい。これまで通り先生の教え子の中でぼくに与えられた遠い指定席に座らせて下さい。どうかロングフォードという名前ではなくて、ぼくのはこ

れまで使ってきた名前だけで考えて下さい——」

【七八】

「ロングフォードだって！」とレドローは叫んだ。

彼は頭を両手で抱え込むと、一瞬の間、持ち前の知的で思慮深い顔を青年に向けた。しかし、束の間に射し込んだ日光のように、顔に現われた光はすぐ消えて、その表情は再び曇った。

「母の名前なのです、」青年は口ごもりながら言った、「母が自分から選んだ名前です。もっと名誉ある名前を選ぶこともできたのですが。レドロー先生、」こう言って彼はためらった、「たしかにぼくは、名前のいわれは分かっているつもりです。分からないことでも憶測すれば真実に近いものは得られます。ぼくは、釣り合いの取れたとも幸せとも言えない結婚によって生まれた子です。幼い頃から先生のごことが敬意と尊敬とをこめて語られるのを耳にしてきました——ほとんど崇拜の念とも言えるものでした。ぼくは、先生的情熱、不撓不掘^{ふとう}の精神や慈愛に満ちたお心のごこと、さらに先生が人を押し潰すような障害にも敢然と立ち向かって行かれる方であるといったことを耳にしてきましたので、母親からささやかな教えを受けてからというもの、ぼくの空想の中で先生のお名前は輝かしい光を放ち続けてきたのです。こうして貧しい学生となった今、ぼくが教えを請える人は先生をおいて他にはないのです。」

レドローは、心を動かされた様子もなく、表情ひとつ変えないで、しかめ面をして青年を見すえ、一言も答えず、その素振りさえ見せなかった。

学生は言葉を続けた、「お話ししても無駄ではないと思うのですが、ぼくたち学生は(大抵はもっとも謙虚な者たちですが)、高潔なレドロー先生のお名前に、感謝や信頼を勝ち得ずにはいないある威信を感じております。ぼくは、その威信の中に、神聖な過去の名残を見出して、どれ

【七九】

ほど強い印象を受け心を動かされたことでしょう。年齢も立場も非常に違い、いつも遠くから先生のお姿を見守っているような者が、このようなことをほんの僅かにせよ口にする厚かましさに自分でもあきれてしまいます。しかし、ある方——かつてぼくの母に並々ならぬ関心を寄せられた人と申しても差し支えはないと思いますが——にとって、万事が過ぎ去った今、その人にぼくの話聞いてもらっても悪くはないと思うのです。卑賤に身を置くぼくは、本当に口では言いつくせないほどの愛着を感じてその人を見守ってきたのです。その人のほんの一言の励ましで満ち足りた気分になれたものを、悩みに悩んだあげく苦渋の思いでそれを避けてきました。そして、ぼくはたとえその人に認めてもらえなくても、

その人を知っているだけで満足して、自分の生き方を続ければそれで良いと思ってきたのです。レドロー先生、」学生は力なく言った、「言いたいことがうまく言えませんでした。まだ身体の調子がおかしいのです。しかし、これまでのぼくの話にまやかしがあって、卑しむべきことを言ったとしたら許して下さい。その他のことはすべて忘れて下さい！」

レドローは相変わらずのしかめ面で相手をじっと見すえたまま、表情を変えようとはしなかったが、学生が話しながら彼の手に触れようと近づいてくると、後退って叫んだ。

「それ以上近寄ってはいけない！」

青年は、必死な面持ちで後退りしたり、厳しく拒絶しようとする彼の態度に愕然として、近づくのをやめ、考えこむように額をこすった。

「過去は逝ってしまった」と化学者は言った。「過去は畜生のように死ぬものだ。私の人生の

【八〇】

過去の名残がどうのこうのと言っているこの男は誰なのだ？この男はうわごとを喋っているんだ、そうでなければ嘘をついているに違いない。私が君の病的な夢想と関係があるとも言うのかね？金が欲しいのなら、ほら、ここにある。これを君にやるためにここに来たんだからね。ここに来たのはそれだけのためさ。それ以外にここに来るわけがない。」彼は両手で頭を抱え込み、眩いた。「それ以外の用なんてあるものか。だが——」

彼はすでに食卓の上に財布を放り出していた。こうして彼がぼんやりと自問自答をやり始めた時、学生はその財布を取り上げ、それを彼に差し出した。

「これは引き取って下さい、先生」彼は自尊心を表に出して言ったが、怒った様子はない。

「このお金と一緒に、先生の先ほどのお言葉とお申し出とを、できればぼくの記憶から引き取って欲しいものです。」

「そうして欲しいかね？」彼は目をぎらぎらと輝かせて答えた。「そう望むのかね？」

「はい！」

化学者はこの時初めて彼に近づくと、財布を取り、彼の腕をつかんで自分の方に向き直らせ、彼の顔をまじまじと見つめた。

「病気になって、悲しく辛いだろうな？」彼は笑いながら、強い口調で尋ねた。

学生は、いぶかりながらも「はい」と答えた。

「不安で、心配で、落ち着かず、身も心も絶えず苦しめられてな？」と化学者は不気味なほど狂喜して言った。「何もかも忘れてしまうのが一番いいのではないかね？」

【八十一】

学生はそれには答えず、困惑して再び手で額をこすった。レドローはなおも彼の袖をつかんでいたが、その時、部屋の外でミリィの声がした。

「それでよく飲み込めたわ」と彼女の声が出た。「有難う、ドルフ。さあ、みんな泣かないで。お父さんもお母さんも明日になればもと通り落ち着いて、家の中もいつもの通りになりますからね。あら、あの方のところに男の人がいらしたのね！」

レドローは手を放し、聞き耳を立てた。

「最初から」と彼は呟いた、「私は彼女に出会うのがこわかった。彼女には変わる事のない善良さがあって、それを損なうのが怖い。彼女の胸中にあるこの上なく優しく善きものを私は殺してしまうかもしれないのだ。」

彼女は戸を叩いていた。

「いわれない予感として片付けてしまうべきか、それともまだ会わないでいた方が良いのだろうか？」彼は不安そうに辺りを見回しながら呟いた。

彼女は今もまた戸を叩いていた。

「誰がこの部屋を訪ねるにしても、」彼は学生に顔を向けて、怯えたようなしゃがれ声で言った、「彼女にだけは会いたくない。私を隠してくれ！」

学生は壁に取りつけられた壊れかかった扉を開けた。それは屋根裏部屋の天井が床の方に傾斜しかけているあたりにあって、奥の小部屋に通じていた。レドローは急いでその中に入ると扉を閉めた。

【八二】

学生はすぐ寝椅子の上にもどり、彼女に入るように呼びかけた。

「エドモンドさん、」ミリィは周囲を見回して言った、「男の方がおいでになってるって聞きましたわ。」

「ここに居るのはぼくだけですよ。」

「どなたかいらしたのでしょ？」

「ええ、ええ、どなたかが訪ねて来てくれましたよ。」

彼女は小さな籠を食卓の上に置くと、彼女の方に差し出されている手を取ろうとするかのように寝椅子の背のところまで行った——しかし、いつもある手がそこにはなかった。もの静かな様子に変わりはないが、彼女は少しばかり驚き、かがみ込んで彼の顔を見て、その額にそっと手を触れた。

「今夜も気分はよろしくって？ 昼間よりも熱は出ていますね。」

「ちえっ！」学生はいらだたしそうに言った、「実にくだらないことが悩みの種になった。」

彼女の顔には、先ほどよりも少しばかり驚きの色が増していたが、非難がましさはまったく見られなかった。彼女は食卓の片側にもどって、持ってきた籠から裁縫道具を入れた小さな包みを取り出した。しかし、思い直してそれを下に置くと、部屋の中を音を立てぬように歩き回り、どの調度品もあるべき場所にきちんと置き直し、すべてを完璧にととのえた。寝椅子のクッションもその例にもれなかったが、それもそっと触れただけなので、横になって暖炉の火を見ている学生はほとんど気付かない様子であった。すべてをきちんと片付け、暖炉をきれいに掃いてから、

【八三】



彼女は地味で小さな婦人帽を被ったまま針仕事に取りかかり、直に落ち着いてせせと針を動かした。

「これはね、窓に掛ける新しいモスリンのカーテンですよ、エドモンドさん」とミリィは、忙しく手を動かしながら話しかけた。「安物だけど、奇麗で素敵になりましてよ。それに日光から目を守ってくれますわ。主人が言ったことですけど、本当に良くなりかかっている時って、部屋を明るくし過ぎるのはいけないことなんですって。そうしたら、まぶしくてめまいが起きるそうですよ。」

彼は何も言わなかった。しかし、彼が非常にいらいらともどかしそうに身体を動かす様子を見せたので、

【八四】

敏しょうに動いていた彼女の手が止まり、彼女は気づかしそうに彼を見た。

「枕の具合が良くないのですね、」彼女は裁縫道具を下に置き、立ち上がりながら言った、「すぐに直してさしあげます。」

「悪くなどありませんよ」と彼は答えた。「ほっといて下さい。あなたは何でも大袈裟なんだから。」

彼は頭を起こし、そう言うと、感謝の念など少しも見せず彼女の顔を見つめたので、彼が再び身を横たえた後も、彼女はおどおどと戸惑って立ちつくしてしまった。しかし、不平がましい顔を向けることもせず、彼女は再び腰を下ろして針を手にとると、すぐにまた

せっせと手を動かし始めた。

「エドモンドさん、私は、あなたのそばでこうしているといつでも思うのだけれど、近頃あなたは『逆境は良き教師なり』という諺を真実に感じてらっしゃるようですね。御病気が良くなりさえすれば、今までにもまして健康は尊いものになりましてよ。幾年も先になって、この時節がめぐって来て、病気のことを知らせれば大切な人たちに心配をかけると思い、この部屋でひとり寂しく床に臥せっていたことを思い出される時に、あなたは家庭の有難さと恵みとを人一倍感じられるようになるでしょう。ねえ、喜ばしい真実ではありませんこと？」

彼女は、一心に針を動かし話に熱中しており、心には何一つ不安もなく平静そのものであり、彼がどのような顔を向けて答えるかなどという気遣いは少しもしなかった。それ故に、彼の恩知らずのまなざしが矢となって彼女に当たってもそれは傷を負わせることなく地に落ちてしまった。

【八五】

ミリィはうつ向いて、忙しく動かしている指を目で追っていたが、思い悩むように美しい^{うなじ}項を片方に傾けると「ああ！」と言った。「私のような者でさえ——エドモンドさん、私はとてもあなたとは違って学問はありませんし、筋道をたてて物事を考えることはできませんが——あなたが病気で臥せられてからこうした物の考え方に私はとても心を動かされてきました。階下の貧しい人達の親切や心尽くしを深く感じ取っておられるあなたを見ますと、そんなことからでも、健康を失ったことが何がしか報われていると思っておられるようですし、また、多少とも苦しみや悲しみがなければ私たちの周りにある善いことの半分は分からずじまいだと思ってるのが顔からはっきり読み取れるのです。」

彼が寝椅子から立ち上がったため、なおも話しを続けようとしていた彼女は言葉をさえぎられた。

「奥さん、そういった美点を大袈裟に言う必要はありませんよ」と彼は軽蔑的な口調で言った。「階下の人達に、ほんの少しでも余分に世話をしてもらっているというのなら、そのうちにその報酬は支払いますよ。おそらくあの人たちも、それぐらいは貰えると思ってるでしょうからね。あなたにも大いに感謝してますよ。」

彼女の指の動きが止まった。彼女は目を彼に向けた。

「ことさら事を大袈裟にして、それだけぼくに感謝させようとしたって無駄です」と彼は言った。「ぼくに対して関心を寄せて下さるのは承知してます。あなたには深甚の感謝を申し上げます。その上に何がお望みなのでしょうか？」

【八六】

我慢ならぬといった風に、部屋の中をあちらこちらと歩き回り、時折立ち止まる彼の姿をじっと目で追っていた彼女の膝に、縫い物が落ちた。

「もう一度言っておきますが、あなたには大いに感謝しているのです。なぜあなたはぼくに途方もない要求をして、当然あなたに対してぼくが感じている恩義に水をさすのですか？ 苦しみ、悲しみ、不幸、それに、逆境ですか！ そんな言い方をされれば、ぼくがここで何度も死にかけたように聞こえるじゃないですか！」

「エドモンドさん、」彼女は立ち上がると彼の方に歩み寄って言った、「あなたは、私がちょっとでも自分のことを引き合いに出したくてこの家の貧しい人たちのことを言ったと考えるらっしゃるの？ この私のことを言いたいために？」彼女は、素朴で無邪気な驚きの微笑を浮かべて、胸に手を当てた。

「ああ！ そんなことを考えちゃいけませんよ、奥さん」と彼は答えた。「ぼくは軽い病気にかかっていたのに、あなたの取り越し苦労のせいで——いいですか！ 取り越し苦労と言っているんです——それを、ことのほか重病にしまうんです。でも、もう済んだことです。お互いにいつまでもかかわり合うこともないでしょう。」

彼は冷ややかに本を一冊取ると、食卓についた。

彼女はしばらくの間、彼をじっと見つめていたが、やがてその顔からは微笑みが完全に消えていった。彼女は籠の所までもどって来ると穏やかに言った。

「エドモンドさん、私がいては邪魔なんですね？」

【八七】

「あなたをここに引きとめる理由は別にありませんね」と彼は答えた。

「でもね——」とミリィは言って、口ごもり、縫い物を示した。

「ああ！ カーテンですか」と答えて、彼は小馬鹿にしたような笑い方をした。「そんなことでここに居ていただくことはありませんよ。」

彼女はそれを元通り小さく束ねると、籠に納めた。それから彼が目を向けざるを得ないような辛抱強い哀願する態度で、彼の前に立ち口を開いた。

「御用があたりでしたら、喜んでもどって来ますからね。あなたがお望みの時には、これまでも本当に喜んで伺いましたのよ。そうしたからって、別に有難く思っていたかどうかはなかったのです。あなたは今、回復に向かってらっしゃるので、私のことが邪魔になりそうでそれが気がかりなのに違いありませんわ。本当にお邪魔をしてしまったようですね。身体が弱って床についていらっしゃる間だけ伺えば良かったのです。私に恩義を感じられる必要はありません。ですけど私をちゃんとした女として——あなたが愛しておられる女性と同じように——私に対して礼儀正しく振る舞っていただいても良いと思うのです。」

あなたの部屋を居心地良くしようと考えてした些細なことを、浅ましくも大袈裟に言っていると勘違いされるのでしたら、それ以上の誤解はありませんことよ。悲しいのはそのことです。そう思われるのはとても悲しいことですわ。」

-彼女はもの静かで、穏やかで、優しく、その声は小さく澄んでいたが、それと対照的に、彼女が感情的で、怒りっぽく、怒りの色を顔に表わし、声高な物の言い方をする女だったとしても、彼女が去ったあと孤独な学生を襲った縁どの寂寥感を、その部屋に残すことはなかったであろう。

【八八】

先ほどまで彼女の居た場所を彼が佻しく見入っていると、レドローが隠れ場所から現われ、戸口まで歩いて行った。

「今度、病魔に取りつかれた時には」と彼は後ろを振り向くと、学生を鋭く見すえて言った、

「——すぐにでもそう願いたいものだ！——ここで死ぬがいい！ここで腐ってしまうがいい！」

「あなたは何ということをしてくれたのです？」学生は彼の外套につかみかかって言った。「ぼくをどう変えてしまったのですか？一体どんな呪いをかけたのです？元のぼくに返して下さい！」

「元のぼくに返せだと！」レドローは気が違ったように叫んだ。「私は病毒に冒されている！そして他人にそれを感染させてしまうのだ！私は体内に、自分自身の、そして全人類の精神を冒す毒を詰め込まれている。以前には関心や哀れみや同情を覚えたはずなのに今では心が石と化している。病毒に冒された私が歩いた後には、利己主義と忘恩が生まれるのだ。卑しい私が、他の人間を私よりもはるかに卑しいものにしてしまう。だから、人が変貌をとげた途端、その人間がいとわしくなってくるのだ。」

彼は、そう言い終えると——なおも外套をつかまれていたので——青年を振り離し、殴りつけ、狂ったように夜の戸外へ飛び出して行った。外は風が吹きすさび、雪が降り、ちぎれ雲が夜空を駆けり、月がぼんやりとした光を放っていた。風に乗り、雪とともに舞い降り、雲とともに漂い、月の光となって輝きそして重苦しい暗闇から不気味に迫ってきたのは、「私が授けた贈り物を、おまえはどこに行こうとも、さらに人に授けることになるう！」という亡霊の言葉であった。

【八九】

いずこに歩を向けようとひとりになれる場所であれば、そこがどこであれ、彼は気にもとめず知ろうともしなかった。彼の心が変化を来し、人の行き交う通りもまた彼自らも荒

野と化し、彼を取り巻いてあまたの辛苦に耐えつつもさまざまに生きる無数の人々は、さながら広漠たる砂漠となり、風がその砂を巻き上げて定かならぬ形の砂山に変え、混沌とした荒廃をつくっていた。亡霊が彼に「たちまちにして消え去る」と告げた、彼の胸中にある記憶の痕跡は未だ消失までの道のりを残して、ひとりになりたいと願うほどに彼は自らの何者たるかを、そして自らの他者への影響力を承知していた。

それが故に、彼の心に浮かぶものがあつた——彼は歩みを続けながら、自分の部屋に突然飛びこんできた少年のことを思った。さらに彼は、亡霊が消えてからこれまでに自分と接触した者の中で、その少年だけが変化の兆を何一つ見せなかったことを思い出した。

野獣のようなその少年は、醜悪でむかつきを催させたが、その子を探し出して、自分の考えることの真否を確かめようと彼は心に決めた。その決心には、その時ふと思いついた別の意図もあつた。

そこで、多少苦勞して自分のいる場所が分かると、彼はあの古い学寮の学生に踏まれてその敷石だけがすりへっている正面玄関へと歩みをもどした。

管理人の宿舎は鉄の門扉のすぐ内側にあり、中庭を囲む主要な建物の一部をなしていた。その宿舎の外側には小さな回廊があり、そこに隠れて居間の窓を覗けば、中に誰がいるかを確かめられるのを彼は知っていた。鉄の門扉は閉まっていたが、彼は慣れた手つきで鉄棒の間に手首を突

【九〇】



っ込んで留め金を外し、静かに通り抜け、元通りに閉めると、薄く凍結している雪面を踏み砕きながら窓辺にと忍び寄った。

昨夜、彼が少年に道を教えて、行くように指示した宿舎の暖炉の火は、中であかあかと燃えており、窓ガラスを透して地面の一角が明るく照らされていた。彼は本能的に明るみを避けてぐるりと迂回し、窓の中を覗き見た。初めは、ただ明るい炎が天井の古い梁と黒ずんだ壁とを赤く染

めているのが見えるだけで、誰もいないようであつたが、目を凝らしてさらに注意深く覗き込むと、白当ての少年が暖炉の前の床に丸くなっている姿が見えてきた。彼は足早に戸口に行き、扉を開けて中に入った。

化学者が少年を起こそうとして身をかがめた時、少年は顔を焦がさんばかりの強い熱気

を浴びて眠っていた。身体に手を触れられた

【九一】

瞬間、少年はねとぼけたまま、本能的に相手から逃れようとして、身にまとっているぼろをひたたくように掻き集め、部屋の片隅に転がるように走り込んだ。そして地面に積み上げられたぼろの塊りとおぼしきものから、身を守らんとするかのよう片足が突き出された。

「起きないか！」と化学者は言った。「私を忘れてはいないだろうな？」

「おいらに構うなったら！」と少年は答えた。「ここはあのひとの家だろ——あんたのじゃないんだ。」

化学者にじっと見すえられて多少ともそれに威圧されてしまったのか、あるいは従順になる気になったのであろう、少年は立ち上がると相手の視線を素直に受けた。

「足を洗ってもらい、傷をしてひび割れているところに包帯をしてもらっているが、誰がしてくれたのかね？」と化学者は前とは様子の違う少年の足を指差して尋ねた。

「あのひとさ。」

「顔をきれいにしてくれたのもそのひとかね？」

「ああ、そうだよ。」

レドローは、少年の目を自分に向けさせようとした質問をし、本当は手を触れるのもいやであったが、同様の意図から彼の顎をつかんでそのぼさぼさの髪を掻き上げた。少年は次に何をされるのか見当もつかず、自分の身を守るためにはただそうするほかないというように、相手の目に鋭い視線を返した。

レドローは、彼に何の変化も現われないことをはっきりと認めることができた。

【九二】

「みんなはどこにいる？」と彼は尋ねた。

「あのひとはいないよ。」

「それは分かっている。白髪の老人とその息子はどこにいるんだね？」

「あのひとのだんなのことかい？」と少年は尋ねた。

「そうだ。その二人はどこにいる？」

「出かけたよ。どこかで何かあるんだろう。みんな急に呼び出されたのさ。それでおいらはここにいるように言いつけられたんだ。」

「私について来い」と化学者は言った、「ついて来たらお金をやる。」

「どこへだい？ 幾らくれる？」

「見たこともないほどさ、それにすぐに連れて帰ってやろう。おまえが住んでいるとこ

るへ行く道は分かっているかね？」

「離せたら」と少年は言い返すと、突然身体をよじって彼の手から逃れた。「おいらはあんたをそこへは連れて行かないぜ。ほっといてくれないと火を投げてやる！」

彼は火の前にしゃがんで、火のついた石炭を小さな卑しい手でつかみ出そうとした。

自分の魔力が自分と接する人々にいつの間にか暗い影を落とすのを見て、この化学者が感じてきたこれまでの感情などは、この時のこの小さな怪物のまったく動じない態度に彼が覚えた鳥肌の立つような漠とした恐怖感に較べれば、取るに足りぬものであった。彼は子供の姿をしたこの平然として得体の知れない生き物が、狡猾で敵意に満ちた顔を彼に向け、子供のそれと変わらぬ

【九三】

手で炉格子をつかもうとしているのを見て、血の凍る思いであった。

「おい、よく聞くんだ！」と彼は言った。「とても不幸で、とても悪い人のいるところならどこでもいい、連れて行ってくれ。役に立ちたいだけで、別に悪い事はしやしないから。さっきも言ったように、お金をやるし、連れて帰ってやるからね。立つんだ！さあ早く！」彼は、彼女がもどって来るのを恐れて、あわただしく戸口に向かって歩きかけた。

「おいらに触ったり、つかんだりせずに、一人で歩かせてくれるかい？」と少年は言って、^{いかく}威嚇しようと伸ばしていた手をゆっくりと引っ込め、立ち上がろうとした。

「いいとも！」

「それから、あんたの前でも後ろでも、おいらの好きなように歩かせてくれるかい？」

「いいとも！」

「じゃあ、先ず金をおくれ。そしたら行くよ。」

化学者は数枚のシリング銀貨を一枚ずつ、少年の差し出す手の中に置いてやった。勘定などはとてもできなかったが、それでも銀貨を貰うたびに少年は「一つ」と言って、その銀貨とその施し手の顔とを貧欲な目つきで見やっていた。彼は手にした銀貨を入れる場所として、口以外は持ち合わせていなかったもので、それを口の中にしまい込んだ。

レドローは手帳から一枚破り取って、子供を連れて行くと鉛筆で書き記すと、それを食卓の上に置き、ついてくるように彼に合図した。それに応じて少年は、身にまとっているぼろを例によって掻き集め、頭と足には何もつけず寒々とした夜の戸外へと出て行った。

【九四】

入った時のあの鉄の門扉から出れば、何とか会わずに済ませたいと願っている夫人に出くわす危険があるため、化学者は先に立つと以前に少年が迷い込んだ例の廊下を幾つか通り抜け、彼の住居となっている場所を通して自分で鍵を持っている小さい扉の所までやっ

て来た。通りに出ると、彼は立ち止まって案内者——この時、さっと彼から身を引いた——に、この場所が分かるかと尋ねてみた。

その野蛮児は、きょろきょろと辺りを見回していたが、やがてうなずくと、これから進むとする方向を指差した。レドローがすぐに歩き始めると彼も少しは素直になって、その後についてきた。野蛮児は歩きながらも、銀貨を口から手に、そしてまた口の中へと移動させ、さらには身にまとったぼろでこっそりとそれを磨いていた。

彼らは途中三度肩を並べた。肩を並べた時に、彼らは三度立ち止まった。化学者は三度その子の顔をちらりと見下ろし、そのたびにある思いに襲われて身を震わせた。

一度目は、ある古い墓地を通っていた時だった。寒々とした墓と優しく心を和ませ、やすらぎを与えてくれる思い出とをどうしても結びつけることができず、当惑して墓の間に立ちつくしたのである。

二度目は、突如として姿を現わした月に誘われて、大空を見上げた時であった。人類の科学が名前と由来とを与え、彼がまだそれらを記憶にとどめているきらめく星々に囲まれて、月は輝かしく夜空に浮かんでいたが、それを目にしても、以前明るい夜空を仰ぎ見た時のように、示唆を受けることも感慨を催すこともなかった。

【九五】

三度目は、もの悲しい楽の調べに立ち止まって耳を傾けた時であった。しかし彼には、その調べも、楽器の、そして彼自身の聴覚の機械的な構造によって伝わる音としか響かず、彼の心の深奥に潜むものを呼び覚ますこともなく、過去や未来をささやきかけることもなく、一年も前に耳にした水の流れや風の音同様に、何一つ訴えかけてはこなかった。

二人の間には、知性の上でも肉体の上でも大変な隔たりがあったが、この三度の機会にレドローは、少年の顔の表情が自分自身の表情とそっくりであるのに気付いて戦慄した。彼らはしばらくの間歩き続けた——人ごみの中にさしかかった時には、案内の少年とはぐれてしまったのではないかとしばしば肩越しに振り返って見たが、少年は大抵振り返った方とは反対側の彼の影に寄り添っていた。そして、ひっそりとして人気のない道を通った時には、後ろから裸足でついて来る子供の短く速い足音さえも数えることができるほどであった——やがて荒屋の立て込んでいる場所に来ると、少年は彼に手を触れて止まった。

「その中だよ！」彼は一軒の家を指差して言った。幾つかの窓にちらほらと灯りが点っていて、戸口にあるほの暗い角灯には、「簡易旅館」とペンキで書かれていた。

レドローは辺りを見回した。彼はその家屋から目を移して家屋が立っている、いや何とか崩れるのを免れている荒れ果てた一区画の土地に目をやった。そこには柵も排水^{きよ}渠もなければ街灯もなく、周囲を淀んだ^{どぶ}溝が流れていた。そこから目を移すと、ゆるく湾曲したいくつかのアーチが目に入った。それは近くにつくられてその区域を取り巻いている高架橋か橋のようなものの一部で、二人の方に向かって徐々にアーチは小さくなって、手前か

ら数えて二つ目のアーチは犬一匹

【九六】

しか入れないような犬小屋に、そして一番手前のアーチは、煉瓦を抜き取られて、残った煉瓦がわずかに積み重なっているだけのものになっていた。彼はさらに目を移して、すぐそばにいる子供を見た。子供は寒さに身を縮めてぶるぶると震えており、びっこをひくように片足で立ち、それを暖めようとして片方の足を巻きつけるようにしていたが、これら一切のものをじっと見つめているその表情は、レドローの顔に表われた表情と恐ろしいほどに酷似しており、レドローはぎょっとして思わず子供から離れた。

「その中だよ！」少年は再度その家を指し示して言った。「おいらは待ってるよ。」

「中に入れてくれるかね？」とレドローは尋ねた。

「医者だとお言いよ」と子供はうなずいて答えた。「ここには病人が多いんだ。」

レドローが旅館の戸口へ歩いて行きながら後ろを振り向くと、子供は鼠のようにごみの上を這うようにして進み、一番小さいアーチの下に潜り込もうとしていた。この生き物に憐憫の情など少しも感じなかったが、それを恐れる気持ちは強く、穴からじっと見つめられると彼はあわてて建物の方に逃げ込んだ。

「悲しみと災いと苦しみとが」と、化学者はより確かな記憶を呼びもどそうと苦しみながら言った「少なくともこの家には秘かに取りついている。こうした不幸を忘れさせようとして訪れた者が、これ以上どんな危害を加えられると言うのか！」

こう言いながら彼は楽に開いた扉を押して中に入った。

階段に女が一人腰を下ろしていたが眠っているのか絶望してか、膝の上に置いた手に頭をのせ

【九七】

ていた。女を踏みつけずに通ることは容易なことではなく、おまけに近くに寄っても少しもとんちゃくしない様子なので、彼は立ち止まって女の肩に手を触れた。はっと見上げた女の顔はとても若々しいものであったが、老いさらばえた冬が自然に反して春の生気を奪ったと思わせるほどに、その顔からは青春の希望と輝きとが完全に失せ去っていた。

女は、彼にほとんど、あるいはまったくと言っていいほど関心を示さず、壁にいっそう身を寄せ、彼を通すために通路を空けようとした。

「君は何をして暮らしているのかね？」レドローは立ち止まり、片手を階段の壊れた手擦りにのせて言った。

「何だとお思い？」女は再び彼に顔を見せて言った。

彼は、創造されて間がないにもかかわらず、かくもあっけなく損なわれてしまった神の

宮²⁷であるはずの女の身体を眺めた。同情心とは言えない何か——こうした不幸に対する真実の同情心が湧き出る泉は彼の胸の中では干上がっていたからである——と言っても、その時、明りを失いつつもまだ真の闇とはなっていない彼の心に最近入り込んだいかなる感情よりも同情心に近い感情のため、彼が次に口にした言葉には、わずかではあれ優しさがこもっていた。

「私がここに来たのはできれば慰めを施したいと考えてのことだ」と彼は言った。「君は自分が被った災いのことを考えているのかね？」

女は眉をひそめて彼を見ると声を立てて笑った。笑い声はしばらく続いたが、やがてそれは、

【九八】

わななくようなため息と変わり、女は再び頭を垂れて髪に指を指し込んだ。

「君は自分の被った災いのことを考えているのかね？」と彼はもう一度尋ねた。

「あたしは自分の人生のことを考えてるの」と女はちらっと彼に目をやって言った。

彼は、自分の足許にうなだれて座っている女を見て、この女こそ不幸を背負った数多くの人間のうちの一人であり、幾千もの不幸の実例であると悟った。

「両親はどういう人なのかね？」彼は聞きただすように言った。

「ひところはこのあたしにもいい家庭があったわ。父さんは遠く離れた田舎で野菜を作ってたの。」

「亡くなったのかね？」

「死んだも同然よ。そんなことはみなあたしとは縁もゆかりもないことだわ。あなたは立派な人なのにそんなことも分からないの！」彼女は再び目を上げ、彼を見て笑った。

「むすめさん！」レドローは厳しい口調で言った、「そうした不幸の中でも特に死が訪れる前に、君はひどいめにあったことはなかったかい？必死に忘れようとしても、傷を受けた時の記憶はいつまでもつきまとうのではないかな？そうした記憶によって自分がみじめになることが幾度もあるのではないかな？」

外見を見る限りでは、彼女には女らしいところはほとんど残されていなかったもので、彼女がワッと泣き出した時には、彼は驚いてその場に立ちつくしてしまった。こうした過去の不幸な記憶が呼び覚まされることによって、かつての暖かい人情や、今では凍てついてしまった優しさの痕

【九九】

跡が再び彼女に甦ってきたように思われ、彼はその最初の兆を認めるとさらに驚き、不安

²⁷ 「コリント人への第一の手紙」第三章一六節 - 一七節にある言葉。

に襲われた。

彼は少し身を引いて彼女から離れた。その時、彼女の両腕が黒ずんでおり、顔には切り傷が、胸には打ち傷がついているのに彼は気付いた。

「どんな残酷な手がその傷を負わしたのだね？」と彼は尋ねた。

「あたしの手よ。自分でやったの」と彼女はとっさに答えた。

「まさか。」

「ぜったいにあたしがやったの！あのひとは触れもしなかったわ。ついかってして自分でやってしまったの。それでここに身を投げ出してたってわけ。あのひとはあたしのそばにはいなかったわ。あたしに手をかけるなんてことはしてません！」

このように彼の目の前で真実を包み隠そうとする、彼女の顔に表われた並々ならぬ決意の中に、彼は、どんなに押し曲げられ歪められても、その不幸な胸中に善がなおも生き残っているのを知って、この女に近寄るのではなかったという後悔に襲われた。

「悲しみ、災い、そして苦しみ！」彼はその恐ろしい眼差しを彼女からそらせて眩いた。「身を落とす前に置かれていた境遇に彼女を結びつけるものすべてにこれらの元がある！どうかこのまま行かせてくれ！」

彼は彼女を振り返って見ることも、手を触れることも、また彼女が神の慈悲にすがりつくよすがとなる最後の綱を自分が断ち切ったと考えることも恐ろしかったので、外套をしっかりと身に

【一〇〇】

まとして音もなく足速に階段を上がって行った。

踊り場に出ると彼の向かい側に扉があった。その扉は少しばかり開いていたが、ちょうど彼が昇りつめた時、ろうそくを手にした男が中から現われて扉を閉めようとした。この男は彼を見た瞬間、ひどくあわてふためいて後退りし、とっさの衝動に駆られたかのように彼の名前を大声で言った。

こんな場所で自分が知られていることに驚いた彼は、はたと立ち止まり、青ざめ愕然としている男の顔を思い出そうとした。しかしそれを考えるいとまもなく、さらに驚いたことには、フィリップ老人が部屋から現われ、彼の手を取った。

「レドローさま」と老人は言った、「それでこそあなたさまです！あなたさまにふさわしい振る舞いがございます！私どものことをお聞きになり、少しでも助力をして下さると後から来て下さったわけですね。ああ遅すぎましたよ、手遅れになりましたわい！」

レドローは当惑した面持ちで、導かれるままに部屋の中に入った。そこには男が車付きベッドに臥しており、ウィリアム・スウィッチャーがそのそばに立っていた。

「遅すぎましたわい！」老人はもの悲しげに化学者の顔を覗き込んで呟いた。涙が彼の頬を伝って流れた。

「そうですとも、父さん」彼の息子が小声で口をはさんだ。「まさにそのこのところですよ。私どもにできることは、この人がうとうとしている間は、ただ黙ってじっとしておくぐらいのことですから。おっしゃる通りです、父さん！」

【一〇一】

レドローは枕許に立って、敷きぶとんの上に横たわっている病める人物を見下ろした。それは人生の盛りにあるはずなのに、二度と日の光は見られそうにない男の姿であった。四、五十年の生涯にわたる悪習が、この男に罪の烙印を消しがたく押ししており、それがこの男の顔に刻みつけたものに較べれば、男をじっと見守る老人の顔にずしりとこのしかかる歳月の力などまだ慈愛深く、美を添えてくれているほどであった。

「これは誰なのかね？」化学者は辺りを見回して尋ねた。

「倅のジョージでございます、レドローさま、」老人は手をもみしぼりながら言った。「長男のジョージでして、母親が一番の自慢にしておりました。」

レドローは視線を、今はベッドにのせられている老人の白髪の間から離して、皆と離れて部屋の片隅にたたずんでいる彼の名を口にした人物に移した。その男はレドローとほぼ同年齢であろうか。このような救いようのないほど落ちぶれ果て、打ちひしがれている様子の男には、少しも見覚えがなかったが、背を彼に向けて立ち、今、戸口から出ようとしている男の姿を見ると、彼は妙に胸騒ぎを覚え額をこすった。

「ウィリアム」彼は陰うつな声で呟くように言った、「あの男は誰なのかね？」

「ああ」とウィリアム氏が答えた、「私の言い草なんです、愚かにも賭博なんぞにうつつを抜かし、じわじわ身を持ち崩して行きつくところまで行ってしまう人間が私には分かりません。」

「あの男がそうだとでも？」レドローは先ほどと同じように落ち着かぬ仕草を見せて、その男の後ろ姿を目で追った。

【一〇二】

「まさしくその通りなのです」とウィリアム・スウィッチャーが答えた、「聞いた話ですが、あの男には少しばかりの医学の心得があるようでございます。ここにいる私の不幸な兄と一緒にロンドンに向かっていたのですが、」ウィリアム氏は上着の袖で目をこすった、「この二階で一夜の宿をとってましたので——つまり、お分かりと思いますが、この奇妙な連れ合いは、時折ここで泊まり合わせるのです——この部屋に兄の看護のために入って来て、兄に頼まれて私どもを呼びに来てくれたわけなんです。実に哀れな有様です！しかしこれが事実なのです。これで父の寿命は縮まりましょう！」

レドローはこの言葉を聞いて顔を上げると——驚きのあまり忘れていたのであるが——

自分がどこにいて、話している相手が誰であるかを、そして自分が恐るべき力を具えていることを思い出し、急いで身を引いて、今すぐにここから去るべきかあるいはとどまるべきか思案した。

目下の精神状態から生まれる心の葛藤があって、彼は不機嫌な強情さと闘っているように思われたが、その気持ちに屈して彼は残るべく自分に言い聞かせた。

「ほんの昨日」と彼は言った、「私はこの老人の記憶が、悲しみや苦しみの連続であることを認めただけではないか。なのに、今夜はもうその記憶を掻き乱すのをこわがっている。私が取り去ってやれる記憶が、心配する必要があるほどこの瀕死の男にとって大切なものなのであろうか？いや！私は帰るまい。」

しかし、こうした言葉を口にして部屋にとどまった後も、彼は恐れおののいていた。彼は黒い外套に身を包み自分自身がそこで悪魔と化した気持ちになり、顔をそむけてベッドから離れて立

【一〇三】

ち、彼らの話に耳をそばだてた。

「父さん！」病人は昏睡状態を幾らか脱して呟いた。

「倅や！ジョージや！」と老フィリップが言った。

「たった今、おれが昔、母さんの気に入りだったと言ってたね。今、昔のことを考えるとこわいんだ！」

「いや、いや、そんなことはないぞ！」と老人が言った。「昔のことを考えるんだよ。こわいなどと言うもんじゃない。倅や、わしはこわくなんかないぞ。」

「おれのことで胸を痛めてるんだね、父さん。」老人の流す涙が、彼の上に流れ落ちていた。

「ああ、ああ」とフィリップが言った、「そうだと、だがそれがわしにはいいんだよ。その時分のことを考えるのはひどく辛いことだが、わしの為にもなるんだ、ジョージ。ああ、そのことも考えておくれ、そのこともな。そうすれば、おまえの気持ちだってだんだんと和らいでくるだろう！ウィリアムはどこにいる？ウィリアムや、母さんは最後までおまえの兄を心から愛していて、息をひきとる時に『私が、あの子を許し、祝福し、そしてあの子のことを祈っていたということをおの子に伝えてやって下さい』と言ったんだよ。母さんがわしにそう言ったんだ。その言葉をけっして忘れたことはないぞ。八十七になってもな！」

「父さん！」とベッドの男が言った、「おれは死ぬだろう。自分でも分かるんだ。思いはとめどなく馳せるのに、それを口にはできないほどにおれは弱ってしまっている。このベッドから離れられぬおれに希望の光なんてあるのだろうか？」

【一〇四】

「あるとも」と老人は答えた、「和らいだ心と、悔い改めの気持ちがあれば、誰にだってそれはあるのだよ。その気持ちがあれば、どんな者にでもな。ああ！」彼は両手を強く握り合わせ天を仰いで叫んだ、「不幸せな倅ではあるが、無邪気だった子供の頃の姿が思い出されて、感謝を捧げたのはつい昨日のことであった。だが、今、神さまもまた倅の子供の頃のことを覚えていて下さると思うと何という慰めであろう！」

レドローは両手で顔をふさぎ、殺人犯のように身をすくませた。

「ああ！」ベッドに寝た男が弱々しくうめいた。「それ以後空しく費した人生、何という空費だ！」

「だが倅にも子供の時があったのだ」と老人が言った。「他の子供たちと遊んだ頃があったのだ。夜、床に入り無邪気な眠りに落ちる前に、倅は今は亡き母親の膝許で祈りを捧げたものだった。わしは倅がそうするのをこの目で何度も見てきた。また、母親が倅の頭を胸に抱き接吻してやるのも見てきた。倅が道を踏み外し、倅に託した希望や計画がすべて打ち砕かれた時、こうしたことを思い出すのは、母親にとってもわしにとっても悲しいことであったが、それでも、その思い出は掛け替えのないものであり、それがあってこそ、倅はわしたちにとっても愛しい子であったのだ。おお、世の父親たちよりはるかに心優しき父よ！おお、汝の子の過ちに世の父親よりもはるかに心をお痛めになる父よ！このさまよえる子を立ち返らせて下さい！わたしどもにしばしば切々と訴えかけてくれたように、倅が現在の心根からでなく、あの幼い頃の心で汝に救いを求めることを許してやって下さいますように！」

【一〇五】

老人が震える両手を上げて息子のために祈りを捧げるや、息子はあたかも老人の言った子供にもどりででもしたかのように、支えと慰めとを求めて、うなだれた頭を老人にもたせかけた。

その後に訪れた沈黙の中で、レドローほど震えおののいた者はいなかったであろう。彼には例のものが必ず彼らを襲うということが分かっていたし、その力が急速に現われ始めていることも知っていた。

「おれの死期はもう間近にせまっている。息が切れてきた、」病人は片腕で身体を支え、片方の腕でむやみと空を切りながら言った。「今、思い出したが、今し方ここにいた男のことが何か気にかかる。父さん、それにウィリアム——いや、ちょっと待った！——あそこに黒いものに包まれているものが見えるが、本当に何かあるのかね？」

「ああ、そうだよ、本当だとも」と年老いた父親が言った。

「人なのかい？」

「その通りだよ、ジョージ、」弟が優しく彼の上に身を屈めて言葉をさしはさんだ。
「レドローさまだ。」

「その人の夢を見たような気がする。ここに来てもらってくれ。」

化学者は、その頻死の男以上に青白い顔をして、彼の前に現われた。彼は男の手招きに
応じて、ベッドに腰を下ろした。

「今夜はここが張り裂けるばかりの思いです、」病人は手で胸を押さえ、苦悩に満ちた
彼の状態を暗黙のうちに訴えかけんとするように、目にいっぱい思いを込めて言った。

「哀れな年老

【一〇六】

いた父を目にし、父が苦しみをなめたのもすべて私のためであり、不幸や悲しみはすべて
私に因^{もと}があると思いますと——」

この時彼が急に口を閉じたのは、彼の不幸な人生の歩み^{きた}が来るべきところまで来たため
であろうか、それとも新たな変化が心に兆し始めたためであろうか？

「——私の心は、さまざまにとめどなく移り変わっていくのですが、こんな私でもちゃ
んとやれることがあれば、やってみたいのです。ここにもう一人の男が来ていましたが、
お会いになりましたか？」

レドローは口に出しては答えることができなかった。というのも、今ではもうはっきり
と分かってきた額に手を持っていくというあのゆゆしき兆候を男が示すのを見て、彼の声
は口まで出かかって消えたからである。しかし何とか彼は肯定の気持ちを伝えた。

「あの男は一文無しのうえ空腹をかかえ、衣食にも事欠いています。おまけに完全に打
ちのめられていて、そこから這い上がるすべを知らないのです。あの男の面倒を見てやっ
て下さい！一刻の猶予も許されません！あの男が自殺しようとしているのが私には分かる
んです。」

例のものが作用を及ぼし始めていた。それは彼の顔に現われてきた。彼の顔は刻々と変
化し、表情はこわばり、くまが深まり、悲しみの表情がすっかり消えて行った。

「覚えていませんか？知りませんか？」と彼は言葉を続けた。

彼は、額のあたりにこの時も上がっていた手で、一瞬顔を隠した。そして恐れを知らぬ
残忍で無情な顔がレドローを睨みつけた。

【一〇七】

「何だ、こん畜生が！」彼はあたりを睨みつけて言った、「あんたはここでこのおれに
何をしようってんだね。おれはこれまで破廉恥に生きてきた。だから破廉恥に死ぬのだ。
あんたなんかくたばってしまうがいい！」

そして彼はベッドに身を投げ、これ以上絶対に人を近寄せぬ、誰にもおかまいなく死んでやるとばかりに両の腕をぐいと頭上に上げた。

たとえレドローが雷に打たれたとしても、ベッドのそばでこの時受けたほどの強烈な衝激は受けなかったであろう。ところで老人は、彼の息子が化学者に話しかけている間ベッドから離れていて、この時またもどりかけていたが、嫌悪の念をあらわに見せて、またさっとベッドから離れた。

「ウィリアムはどこにいる？」老人はあたふたと言った。「ウィリアム、ここを出よう。家にもどるんだ。」

「家ですって、父さん！」とウィリアムは言った。「自分の息子を置き去りにしようって言うのですか？」

「わしの倅はどこにいる？」と老人が応じた。「どこにですって？ほら、そこに！」

「やつはわしの倅なんかではない、」フィリップは憤りで身体をわなわなと震わせながら言った。「あんな外道にどうこう言われる筋合いはないぞ。わしの子であれば感じの悪かるうはずがない。わしに仕え、わしに食べ物や飲み物を喜んで与え、わしのために動いてくれるのがわしの

【一〇八】

子ではないのか。わしにはそうしてもらふ権利があるんだ！八十七にもなるんだぞ！」

「父さんはもうこれ以上年がとれないほどの老いぼれですよ、」ウィリアムは両手をポケットに突っ込んで父親を恨みがましく見ながら呟いた。「父さんが何のために生きているのか分かりませんね。父さんがいなければずっと楽しくなるのに。」

「やつがわしの倅だなんて、レドローさま！」と老人は言った。「しかもわしの倅が！こいつがわしにわしの倅のことを言って聞かすとは！ああ、あいつがわしを少しでも喜ばせるためにいったい何をしてくれたと言うのだ？」

「父さんは私を少しでも喜ばせるためにいったい何をしてくれたと言うんです」とウィリアムは不機嫌に言った。

「はてさて」と老人は言った。「暖かい所に座って、寒い夜空の下に出る気遣いをするともなく、また、あそこにいるやつのような不快でみじめたらしい姿を目にして心を乱されることもなく、御馳走を食べて楽しく過ごしたクリスマスは何度続いてきたのだろう？二十回だったかな、ウィリアム？」

「四十回に近いだろう」と彼は呟いた。「そう、父を見てそのことを考えますと、」彼はこれまでにはまったく見られなかったじれったそうないらいらした様子を見せて、レドローに話しかけた、「はっきり申して、四十年の間、きまりきったことのように、しょっちゅう飲み食いして誠に気楽に日々を送っている父の姿以外、見たことはありませんね。」

「わしは——このわしは八十七にもなるんだ、」老人は子供じみた、弱々しい、とりとめのな

【一〇九】

い調子で言葉を続けた、「これまでどんなことにでもひどく腹を立てたことはけっしてなかった。わしはウィリアムがわしの倅だというやつのために、今さら腹を立てようとは思わん。あれはわしの倅なんぞではない。わしは愉快的時をたんと過ごしてきた。覚えているが、いつか——いや、思い出せないぞ——何としたことだ、記憶がとぎれてしまっている。あれはたしかクリケットの試合やわしの友人に關したものだ。だがどういふものか記憶の糸が切れている。彼は誰だっけ——わしの好いてた男だったと思うが？ どうしたんだろう——死んだのだろうか？ だがわしには分からん。なに、どうだって構いはせぬ。ちっとも構うものか。」

老人はまどろむように悦に入って、首を振り、チョッキのポケットに両手を突っ込んだ。その片方のポケットに、^{ひいらぎ}柎の切れ端(おそらく昨夜からそこに入ったままになっていたのであろう)を見つけると、それを取り出して眺めた。

「おや、柎の実かな？」と老人は言った。「ああ！ 食べられないのが残念だ。思い出したが、わしがまだちびでこのぐらゐの背の高さだった頃、一緒に出かけ——はて——誰と一緒にいったっけ？——いや、どうだったか思い出せないぞ。だれか定まった人と歩いたり、だれかのことをわしが好いていたり、だれかがわしを好いてくれたこともあったようだが、わしには思い出せぬ。ああ、柎の実だな？ これがある時は御馳走が食べられた。そうだ、わしはその分け前に与り、給仕をされて、温かく心地よくしてもらわねばならん。わしは八十七歳にもなる哀れな年寄りではないか。わしは八十七にもなるんだ。八十七だからな！」

このような繰り言を口にしながら柎の葉をかじり、そのかすを吐き出し、よだれを流している

【一一〇】

哀れな老いの姿、末の息子(これも大変な変わりようであった)が老人を見た時の冷やかかたでよそよそしい目つき、罪を恥とも感じないでベッドに横たわる長男の冷然とした態度——レドローは、これ以上こうした情景を目に刻みつけることはしなかった、——彼の足は一点に釘付けされてしまったように思われたが、そこから身を引き離すと、彼は走るようにその建物を飛び出して行った。

彼の道案内は隠れ場所から這い出てきて、レドローがアーチのところまで行かぬうちに、身を構えて彼を待っていた。

「あのひとの所にもどるのかい？」と彼は尋ねた。

「もどるんだ、すぐに！」とレドローは答えた。「途中どこにも足を止めるんではないぞ！」

少年はしばらくは先に立って進んで行ったが、帰りを急ぐあまり、二人の足取りは歩くというよりは飛ぶようで、裸足の少年は、大股で急ぐ化学者の歩調に遅れを取らないようについて行くのがやっとであった。外套をまとったレドローは、通りですれ違うすべての人々から身をひるませ、まとっているものが風に吹かれて人に触れ、もしや死の感染を及ぼしはせぬかとその外套をぴったりと身体にまといつけ、瞬時も足を休めることなく道を急いで、出かけた時に通った戸口に辿りついた。彼は鍵で扉をあけ、少年を従えて中に入ると、幾つかの暗い廊下を通して自分の部屋へと急いだ。

少年は、レドローが扉をしっかりと閉めるのを見ていたが、彼が振り返ると食卓の後ろに逃げ込んだ。

【一一一】



「ねえ！」と少年は言った。「おいらに触れないでくれ！おいらの金を巻き上げようとここに連れもどしたんだろう。」

レドローはさらに数枚の銀貨を床に投げてやった。金を見て取り返す気になられでもしたらという不安から、その金を彼から隠そうとでもするかのように、少年はすぐにその上に身体を投げ出した。レドローがランプのそばに座って両手で顔を隠すのを見ると、少年はこそこそと金を拾い始めた。それが終わると、彼は暖炉のそばへと這って行き、その前に置かれた大きな椅子に腰を下ろして、懐から食べ物残り屑を取り出し、むしゃむし

【一一二】

やと食ったり、暖炉の炎を見つめたり、その合間に、片手にまとめて握りしめている銀貨を眺めたりしていた。

「すると、こいつが」とレドローは嫌悪と恐怖の念を募らせながら彼を見つめて言った、「この世にただ一人残された連れなのか。」

心に強い恐れを感じるこの少年のことで、彼が長い思いにひたり、ふと我に帰るまでどれほどの時が流れたのであろう——三十分ほどなのか、あるいは夜半までなのか——彼には分からなかった。部屋の静寂は、少年(レドローは、少年が耳をそばだてているのは見ていたのだが)が突然に跳び上がり、扉に向かって走り出したために破られた。

「あのひとがやって来た！」と少年は叫んだ。

彼女が扉を叩いた瞬間、化学者は扉に向かって走りかけた少年を引き留めた。

「ねえ、あのひとのところに行かせてくれよ」と少年は言った。

「今はだめだ」と化学者は答えた。「ここにいるんだ。今は誰もこの部屋から出入りしてはいかん。どなたかな？」

「私です」とミリィが叫んだ。「どうか中に入れて下さい！」

「だめです！ぜったいに！」と彼は言った。

「レドローさま、レドローさま、どうか中に入れて下さい。」

「どうしたというのです？」彼は少年をつかんだままで言った。

「あなたがお会いになったあの不幸なお方の具合がとても悪いのです。私が何を言っても、

【一一三】

あの方が苦しんでおられる恐ろしい迷いを解いてあげられないのです。義父^{ちち}はあっという間に子供のようになってしまいますし、主人も変わってしまいました。あの方には衝激があまりに急だったのですわ。でも私にはあの方が分からなくなりました。まったく違う人みたいなんです。ああ、レドローさま、どうか良いお知恵をお貸し下さって、私をお助け下さい！」

「だめです！だめです！ぜったいに！」と彼は答えた。

「レドローさま！お聞き下さい！ジョージはうわごとであなたさまがあそこで出会われた男の人のことをしきりに言うのです。その人が自殺するのではないかと不安なのです。」

「私のそばに来るよりも、その方がいいというものだ！」

「ジョージのうわごとですけど、あなたさまはその男の人を御存知で、その人が昔あなたさまの友人だったこともあるとか、今では身を落としています、こちらの学生の父親だとも言ってるんです——私、あのご病気の学生さんのことではないかと心配で。どうしたらいいのでしょうか？どうして探しに行けばいいのでしょうか？どうして救ってあげたらいいのでしょうか？レドローさま、本当にどうか、どうか、良いお知恵をお貸し下さい！私をお助け下さい！」

彼はこの間ずっと少年をつかんで離さなかったが、少年は彼のかたわらを抜けて、彼女を部屋の中へ入れようと半狂乱になっていた。

「亡霊よ！不信心な思いを懲らしめる者よ！」レドローは苦しみ悶えながら辺りを凝視して叫んだ。「私に目を向けてくれ！この心の暗闇の中にあるはずの悔恨の情から放たれる小さな輝きをひときわ強めて、私の不幸な姿を照らし出してくれ！これまで長い間学生たちに教えて

【一一四】

きたことだが、物質界に余分なものはないはずだ。驚くべき構造を支える一単位、もしくは一原子といえども、もし失われることになれば大宇宙に空隙を生ぜしめることになる。それと同じことが人間の記憶にある善悪や、幸、不幸についても言えることが今になって私にも分かってきた。私に哀れみをかけてくれ！救い出してくれ！」

答えはなかった。ただ彼女の「手をお貸し下さい、手をお貸し下さい、中に入れて下さい！」という叫び声が聞こえ、少年が何とかして彼女の許に行こうとしてもがいているだけであった。

「私の影よ！私の闇の世界を支配する精霊よ！」レドローは心を取り乱して叫んだ。「私の許に帰って来て、ひねもす、私に取り憑くがいい。だが、この贈り物は取り去ってくれ！それとも、私からどうしてもそれを取り去れないのであれば、それを他人に施すという恐ろしい力だけは取り去ってくれ！私が仕出かしたことを元に戻してくれ。私は闇の中に取り残されても構わないから、私の呪いを受けた人々に、光を取り戻してやってほしい。私は、この婦人だけは最初から感染させずに済んだし、二度とは外に出ず、ここで、私の感染力を受けないこの子供だけに看取られて死ぬつもりでいる——だから私の願いを聞き入れてくれ！」

返ってきた答えは、この時も同じだった。取り押さえられた少年は、もがいて何とか彼女の所に行こうとしていたし、次第に大きくなる彼女の叫び声が聞こえるだけだった。「手をお貸し下さい！中に入れて下さい。あの男の人は昔はあなたさまの友人だったのですよ。どうして探しに行けば良いのでしょうか、どうして救ってあげれば良いのでしょうか？みんな変わってしまいました。私を助けて下さるのはあなたさまだけです。どうか、どうか、私を中に入れて下さい！」



CHAPTER III.

THE GIFT REVERSED.

NIGHT was still heavy in the sky.
On open plains, from hill-tops, and
from the decks of solitary ships at

第三章

取り消された贈り物

空には今も重苦しい闇が垂れこめていた。広漠とした平地に^{たたず}佇む者や、高い丘の頂や海に佗しく浮かぶ船の甲板に立つ者の目には、やがては^{あけぼの}曙の光に浸されるはずの、遠く横たわる低地の輪郭が、ぼんやりと霞む地平線に望見された。しかし曙はまだ遠く、その気配はなく、月が夜空をせわしく流れる雲と相争うように顔を出していた。

レドロウの心を覆う影は、重くそして速やかに移り変わって行き、月を覆い、地表を闇に変える夜空の雲のように、彼の心に点る光を暗く包んだ。影の秘める秘密と、そのあいまいな啓示は、夜空の雲が投げかける影のように、移り気であつかまえ所がなかった。そしてまた、夜空の雲のように、そこから一瞬明るい光が洩れ出たとしても、あっという間に

影がその光を覆って、さらに深い闇を生じさせるだけであった。

戸外の古びた広大な建物には深く重々しい静寂が漂っていた。建物の控え壁や角は、地面に黒々とした謎めいた影を投げかけ、月の歩みが雲によって幾らかでも乱されるたびにそれらの影が滑らかな白い雲の中に引きこもるように見えるかと思えば、またその中から現われ出るようにも

【一一六】

思われた。内部の化学者の部屋は、ランプの明りが今にも消えかかって、うす暗い陰うつさに包まれていた。扉の叩かれる音そして戸外で人の声が聞こえたが、すぐに静寂が幽霊のように訪れた。静まり返った静けさの中で、最後の息を引き取るような低い音が、火が消えて白くなった炉の灰から時折聞こえるだけであった。炉の前の地面には例の少年がぐっすりと眠っていた。化学者は、扉を叩く音が止んだ時に取っていた姿勢をそのまま崩さず、椅子に座っていた。――石と化した人間のように。

この時、聞き覚えのあるクリスマスの歌が聞こえて来た。彼は以前墓地で聞いた時のように、初めは、その調べにじっと耳を傾けていたが、やがて――その調べは、止むことなく低く、甘く、哀愁を帯びた旋律を奏でながら夜風に乗って彼のもとへと運ばれて来た――彼は立ち上がり、手で触ってもその悲しみの手を優しく支えてくれ、しかも何の害も及ぼさずにすむ友が彼の手の届く所に近づいているかのように、立ったまま両手を差し出した。こうした動作とともに、彼の顔は和らぎ、もの思わしげな表情も薄れていった。身体に静かな震えが起こり、やがて目は涙で溢れ、彼は目に両手を当てて頭を垂れた。

悲しみ、災い、苦しみの記憶は、まだ彼の心に甦ってはいなかった。彼にはそれが分かっており、それが甦るといふ確信や希望を束の間にも抱くことはなかった。だが彼の内部に秘かに覚醒するものがあり、それがいつかのように遠い歌の調べに隠されているものに感応した。たとえそれが、彼が失ったものの尊さを悲しく語りかけるだけであっても、彼は熱い思いで神に感謝を捧げた。

最後の和音が消え去ると、彼は顔を上げて、たゆとう余韻に耳を傾けた。少年の向こうに、ち

【一一七】

ように眠る少年を足許に置く格好で、じっと彼に目を注ぎ、静寂をたたえて、動き一つ見せぬ亡霊が立っていた。

恐ろしいことには変わりなかったが、以前の残忍で無慈悲な様子は見られなかった――あるいは、震えおののきながらその亡霊を見つめるレドローの切ない願いがそう思わせたのかも知れない。亡霊は一人ではなく、その影のような手に別の手を握っていた。

一体誰の手を？亡霊のかたわらに立っている姿は、本当にミリの姿なのか？あるいは彼女の影かまぼろしか？彼女の頭は、いつものように静けさをたたえて少しうつ向き、その目は眠る少年を哀れむように見ている。光がまばゆく彼女の顔を照らしていたが亡霊はその光には感応せず、彼女のそばにいるにもかかわらず、相変わらず暗く色を持たなかった。

「幻影よ！」化学者はその姿を見て新たな困惑に襲われて言った、「私は、彼女のことと頑固な態度を取ったり不遜なことをした覚えはない。どうかここに彼女を連れてくるなんてことはよしてくれ。それは勘弁してほしい！」

「今おまえに示しているのは影であるが、朝の陽が輝く時、その実像を探し出すのだ」と亡霊が言った。

「それが私の避けられぬ過酷な運命だと言うのか？」と化学者は声を大きくして言った。

「そうだ」と亡霊が答えた。

「あの女性^{ひと}の平安と優しさを台なしにし、私のような情けない者に、そして私が不幸にしてしまった人たちと同じように、あの女性を変えてしまうのか！」

【一一八】

「『探し出せ』と言ったのだ」と、それに答えて亡霊が言った。「それ以上のことは言っていない。」

「後生だから言ってくれ、」レドローは亡霊の言葉にあるいは秘められているのではないかと思われた希望にすがって言った、「私のやったことは取り返しがつかないのだろうか？」

「そうだ」と亡霊は答えた。

「自分を取り戻してくれと言うのではない」とレドローは言った、「私が捨てたものは、自らの意志で捨てたのであり、それが取り戻せなくても仕方ない。だが、あの不幸な贈り物を、けっして求められもしなかったのに、私が譲り渡してしまった人たちに対して、そして、前もって警告されることもなく、何一つ知らないまま呪いを受け、それを避けるすべを知らなかった人たちに対して、私は何もできないのだろうか？」

「何もできない」と亡霊が言った。

「私にはできなくとも、誰かにそれができないのか？」

亡霊は彫像のように立ったまま、しばらく彼を凝視していたが、急に顔を動かすとかたわらの影に目をやった。

「おお！この女性^{ひと}に？」とレドローは、その影から目を放さずに言った。

亡霊はそれまでつかんでいた手を離すと、行って良しといった素振りで自分の手をゆくりと上げた。と同時に、彼女の影は、同じ姿勢を保ちつつ、ゆらめくように消え始めた。

「待ってくれ、」レドローは、言葉にならない必死な気持ちで叫んだ。「少しの間でい

い！

【一一九】

情けをかけてくれぬか！今しがた漂ってきたあの調べを耳にして、私の心のどこかに変化が起きたようだ。教えてくれ、あの女性を損なう力を私は失ったのではあるまいか？恐れることなく彼女の近くに行けるのではないだろうか？ああ、私にも希望のかけらが残されていることを、彼女に示して欲しい！」

レドローと同じように亡霊も彼女の影——レドローには目を向けなくて——に目をやったが、何も答えなかった。

「せめて、これだけは言ってくれ——あの女性は、私がしてしまったことを元通りにできる力が自分にあることを、これから知っていてくれるのだろうか？」

「知ってはいない」と亡霊が答えた。

「知らないうちに授けられた力が彼女にはあるのかね？」

亡霊が答えた、「探し出すのだ。」そして、彼女の影はゆっくりと消えて行った。

二人は再び面と向かい合い、贈り物が授けられた時のように、余念なく、いかめしい面持ちで、亡霊の足許に今も横たわる少年をはさんで、じっと見つめ合っていた。

「^{おそれ}畏多き導き手よ、」亡霊の前にひざまずき、哀願の姿勢を取りながら化学者が言った、「一度は見捨てられながらも、こうして再度の訪れを受けた今、(そなたの再訪と、そなたの以前とは違う穏やかな様子とから、私は一縷の希望が残されていると信じたいのだが)、私は何も聞かずそなたに従い、苦悩に苛まれる私の魂の改俊の叫びが、人の力では償うことができぬほど私が傷つけてきた人たちのために聞き入れられてきたことを、そしてこれからも聞き入れられること

【一二〇】

を祈りたい。しかし、ただひとつ——」

「ここに眠っている子供のことでないのかね」と、亡霊は化学者の言葉をさえぎり、少年を指差した。

「その通りだ」と化学者は答えた。「そなたには私の気持ちが分かっている。どうして、この子だけ私の影響を受けずにおれるのだろうか、本当にどうしてこの子の思いが、恐ろしいほどに私の思いと相通じるのであろうか？」

「これは」と亡霊は少年を指差しながら言った、「おまえが放棄したのと同じような記憶を完全に奪われた人間の、究極のそして完璧な実例なのだ。悲しみ、災い、苦しみといった人間の心を和らげる記憶がこれにはない。というのは、このみじめな子供は生まれながら獣よりもひどい状態に打ち捨てられ、そのような記憶をわずかでもその固く閉ざした

胸に甦らせてくれる暖かい思い出の一つも、心の触れ合いも、この子は経験したことがないのだ。このみじめな子供の中には不毛の荒野しかない。おまえは記憶を放棄したが、それを奪われた人間の心にあるものは、これと同じ不毛の荒野だけなのだ。かくある者に災いあれ！ここに横たわるような人でなしが幾百も幾千もいるような国に十倍も災いあれ！」

それを聞くとレドローは、ぎょっとして身をすくませた。

「こうした人でなしが——」と亡霊が言った、「みんな例外なく害悪をまき散らし、人類はその害悪の実を刈り取る責を負わされる。この少年の中にある悪のすべての種子から、破滅が畑に実り、取り入れられ、蓄えられ、さらに世界の幾多の場所にまかれることになる。やがては多く

【一二一】

の地域に悪がはびこり、再びノアの洪水が必要となる。巷で公然と殺人を行なって行方をくらますという犯罪でも、このようなおぞましい姿に比べると、一時的に辛抱すれば済むという点ではまだ罪が軽い。」

亡霊は眠る少年に目を注いでいるようだった。レドローもまた、新たな感情に襲われて少年を見下ろした。

「日夜の歩みの中で、そのかたわらを、こうしたみじめな生き物が通り過ぎるのを目にとめぬ父親は一人としていない。この国のあらゆる情愛に満ちた母親たちの中で、それを目にとめぬ母親はいない。子供から大人になったものでこの大罪に対して、それぞれに応じて責任を逃れられるものはいない。この地球上に、この大罪によって呪われない国は一つだってない。この地球上にこの大罪によってないがしろにされないような宗教はない。この地球上にこの大罪によって辱められないような人は誰一人いない。」

化学者は手を固く握り、恐怖と憐憫とで心を震わせながら、その目を眠り続ける少年から、下を指差し少年の背後に立っている亡霊の方に移した。

「よいか、よく見るのだ」と幻影は言葉を続けた、「これがおまえが望んでなろうとした究極の姿なのだ。おまえの力にはこれにあっては働く余地がない。この子供の胸には取り去るものなど何一つないからだ。おまえはこの子供の無残な状態にまで身を落としたが故に、これの思いはおまえの思いと『恐るべき友誼』で結ばれているのだ。これは人間の無関心の産物であり、おまえは人間の厚顔無恥のできものなのだ。情け深い神の御配慮を、おまえたちはそれぞれ台なしにし

【一二二】

てしまった。空虚な内面世界の両極からおまえたちはやって来たのだ。」

化学者は少年のかたわらに身をかがめ、今、自らに対して感じる哀れみと同じ哀れみをこの少年に感じて、眠る少年を夜具でくるんでやった。もう、嫌悪感や冷たい気持ちから尻込みすることはなかった。

間もなく、遙か地平線に明りが射し、闇は薄れ、太陽が赤々と輝いて昇ってきた。澄んだ大気の中で、古びた建物の組み合わせ煙突や破風が光を受けてきらきらと輝き、町に漂う煙霧は黄金色の霞^{かすみ}と変わった。性質に反した几帳面さで、風がくるくると旋回していたほの暗い片隅にある日時計でさえも、夜の間積もった細かい雪をそのぼけた顔から払い落とし、顔を出して、自分の周りを小さな渦を巻いて踊る紛雪の輪を見つめていた。朝の盲目の手とでもいったものが、ノルマン風のアーチが地中に半ば埋もれている、誰一人かえりみるものもない冷え冷えとして陰気な地下納骨堂にまで手探りで伸びて行って、壁にまつわっている無精な植物の中に深く眠っている樹液に働きかけ、実に繊細なそして驚くべき創造がなされている生き物たちの小さな世界の、鈍い生命の根源を刺激して太陽が昇ったということをかすかながらに伝えたことは確かであった。

テタビィ家はすでに起きて元気に働いていた。テタビィ氏は店のよろい戸を開け、飾り窓に並べられた宝物を、その誘惑にけっして屈することのないエルサレム館の人たちの目に少しずつ開陳していった。アドルフアスはすでにずっと前に家を出ており、昼前のモーニング・ペーパーの段階²⁸ の中途にさしかかっていた。五対の目を石けんと摩擦によって赤くはらして、五人の小さなテタビィたちは、テタビィ夫人の指揮のもとに、裏の台所で冷水摩擦の拷問を受けてい

【一二三】



²⁸ 本文五十七ページ参照。

【一二四】

た。モレク嬢が横暴振りを発揮すると(いつものことであったが)、ジョニィは、身づくろいを急ぎ立てられ、即座に放免されると、いつもより難儀して店の扉の前をその荷を抱えてよろよろと歩き回っていた。というのも、モレク嬢の体重は、やりくり算段で寒さを防ごうとして毛糸の編み物で頭巾から青いきゃはんまで、鎖かたびらで完全に武装したように身体を包んでいるため、その重量を大いに増していたからである。

この乳呑子の特徴はいつも新しい歯が生えかけていることであった。歯が全然生えてこなかったのか、あるいは生えてもすぐ取れてしまうのかは、はっきりしない。しかしテタビィ夫人の言い張るところでは、「雄牛の口亭」の看板に立派に使いそうな歯が確かに生えていたということである。赤ん坊は、腰に(と言ってもあごのすぐ下であったが)若い尼僧の口ザリオにでもなりそうな大きな骨の輪をいつもぶらさげていたにもかかわらず、あらゆる類のものがその歯茎の運動に供されるのであった。ナイフの柄、こうもり傘の先、杖の頭といったところが特に好まれた品物であるが、さらに家族全員の指、特にジョニィの指、にくずくおろし、パンの皮、扉のハンドル、火かき棒の先についている熱よけの握りといったものがこの赤ん坊の気晴らしのために見境なく使われるもっともありふれた道具であった。一週間のうちにこの赤ん坊からすり取られていくはずの電量は計り知れないであろう。「歯がもうじき生えてくるわ。そうなれば、この子も正常に振る舞ってくれるでしょう」といつもテタビィ夫人は言っていたが、なかなかそうはいかず、この赤ん坊は相変わらず異常な振る舞いを続けていた。

テタビィ家の子供たちの気分は数時間のうちに悲しい変わり方を見せていた。テタビィ夫妻で

【一二五】

すら子供たちほどには変わっていなかった。常日頃、この家の子供たちは思いやりがあり、善良で、食物の不足があっても(しばしばのことであったが)不満は見せず、実に気持ちよくそれを分ち合う素直な子供たちで、ほんのわずかの肉でも心から喜んで食べていた。しかし彼らは今、石けん水のことばかりでなく、まだ始まらない朝食のことまでも言い争っていた。すべての小さなテタビィの手が、他の小さなテタビィの手と争っていた。そしてジョニィ——我慢には慣れている辛抱強く、愛情深いジョニィ——ですら赤ん坊に手を出したのだ！嘘ではない。たまたま戸口のところに来たテタビィ夫人が、鎖かたびらの、叩くところたえるような防御の弱い部分を意地悪くも選んで、ジョニィがその清らかな赤ん坊をピシャリとやるのを目撃したのである。

テタビィ夫人は電光石火、ジョニィのえり首をつかみ、客間に連れて行くと、彼をおつりがくるほど叩いてその乱暴に報いてやった。

「畜生、何てことをするんだね」とテタビィ夫人は言った。「よくもまあ、あんなひどいことを。」

「じゃ、どうしてこの子の齒はちゃんとならないんだ、」大きな反抗的な声を出してジョニィは言い返した、「ぼくを苦しめてばかりいるんだから。母ちゃんはどうかなんだい？」

「どうなのかって！」とテタビィ夫人は、名誉を傷つけられた荷物をジョニィの腕から救出しながら言った。

「うん、どうなの、母ちゃんは？」とジョニィは言った、「とつてもたまらないよ。もし母ちゃんがぼくの立場だったら、兵隊にでもなるだろうね。ぼくだってむろんさ。軍隊には赤ん坊は

【一二六】

いないからね。」

この騒動の現場にやってきたテタビィ氏はこの叛逆児をたしなめようともせず、物思わしげにあごをさすって、この軍隊生活の話に深く心動かされた様子であった。

「この子の言うことが正しいのだったら、私も軍隊に入りたいもんだわ」と夫を見ながらテタビィ夫人は言った、「こんな家で穏やかに生活できるもんですか。私は奴隷だわ——ヴァージニアの奴隷よ。」こうした穏やかならざる言葉を彼女に思いつかせたのは、おそらく、この家族がへっぴり腰で挑戦した煙草の商いを、その土地にぼんやりと結びつけたためであろう。「年中私には少しの休日も楽しみもないんだから！ああ、この子を祝し守り給え」と、この敬度な願いにはとてもそぐわない苛立たしさに赤ん坊を揺さぶりながらテタビィ夫人は言った、「いったいこの子はどうしたっていうのだろう？」

疑問を解くすべもなく、赤ん坊を揺さぶったところでそれがはっきりするわけでもなかったので、テタビィ夫人は赤ん坊を揺りかごに入れて片付け、腕組をして腰を下ろすと揺りかごを腹立たしそうに足で揺すった。

「なぜそんなとこに突っ立ってるの、ドルファス、」彼女は夫に向かって言った、「何かしたらどうなのよ。」

「何もする気にならんのだね」と夫は答えた。

「それは私の言うことよ」と妻。

「何と言おうと、わしの方だ」と夫。

【一二七】

ここでジョニィと五人の兄弟たちとの間に変化が生じた。子供たちは家族の朝食を準備している時に、少しの間でもパンを自分のものにしようと小ぜり合いを起こしていたが、

今や派手な殴り合いを始めた。一番年下の男の子は、年に似合わぬ分別を働かせて、かたまってやり合っている兄たちの外に出て、その脚を攻撃していた。この争闘の真只中に、テタビィ夫妻は、あたかもそれが二人の意見がまとまる唯一の場所であるかのように、大変な意気込みで飛び込んで行った。そして持ち前の優しい気持ちはみじんも見せず、容赦なく子供たちを打ちのめし、大いに戦果をあげると、二人は以前と同じくそれぞれの位置関係にもどった。

「何もしないんだったら新聞でも読んだらどうなの」とテタビィ夫人が言った。

「読むものなんて何もありません」と、はなはだ不機嫌に夫が答えた。

「何も？」とテタビィ夫人が言った。「ほら警察欄が！」

「つまらん」とテタビィが言った。「人が何をしようと思われようとかまうもんか。」

「自殺はどう」と妻。

「知ったこっちゃないね」と夫。

「人が生まれたり、死んだり、結婚したりすることがつまらないって言うの？」と妻が言った。

「出生が今日で永久に終わりを告げ、ただ死が明日から始まっていくとしてもだね、わしの番がまわってくるまではそれに関心を持つ理由なんてありません」とテタビィ氏はぶつぶつ言った。「結婚なら自分もやってしまったことだ。そのことはいやというほど承知してるさ。」

テタビィ夫人の不満げな表情や態度から判断すると、彼女も夫と同じ見解を抱いているように

【一二八】

見えた。それでも彼女は、夫と口論して得られる満足感からあくまでも夫に逆らった。

「ええ、おまえさんは、主義を曲げない人ですよ」とテタビィ夫人は言った、「新聞なんかで自分の閉じこもる壁をつくって、他には何もしないで三十分も続けて子供たちにそれを読んでやるんだから！」

「読んでやったと言ってもらいたいね」と夫がやり返した。「もうそんなことは御免だ。少しは賢くなったからな。」

「ふん！賢くね。いやはや！」と妻は言った。「少しはましな人間になりまして？」

その質問は、テタビィ氏の胸の中で何か不調和な音色を奏でた。彼は沈んだ面持ちで考えこみ、額を手で何度もこすった。

「少しはましにというのか」とテタビィ氏は呟いた。「みんながましな人間になったとか、幸せになったとかわしには分かん。少しはましにと言うのか？」

彼は新聞の壁に向かい、指でそれをなぞって探していた一つの記事を見つけ出した。

「そうだ、この記事は家族のみんなが好きなものだった、」テタビィは寂しそうにそし

て気の抜けた様子で言った、「少しばかり言い争ったり、不満な気持ちを抱いている時でもこの記事は森のこまどりの話²⁹に劣らないくらい子供たちに涙を流させ、優しい気持ちにさせたものだった。『貧困の生んだ悲しい事件。昨日、腕に赤ん坊を抱き、十歳から二歳までのさまざまな年齢の、みな明らかに飢餓状態にある六人のぼろをまとった子供たちに囲まれた小柄な男が市長の前に出て、次のように話した』——おや！分からんぞ、これ

【一二九】

は」とテタビィは言った。「わしらと何の関係があるんだ。」

「あの人は何て老けてみすばらしく見えるんだろう」と夫を見ながらテタビィ夫人が言った、「一人の人間があんなに変わってしまうなんて見たことがないわ。ああ、ああ、何ということだろう。犠牲になってしまったんだわ！」

「何が犠牲になったのだね？」と夫が不機嫌な声で尋ねた。

テタビィ夫人はかぶりを振り、言葉で答える代わりに、激しく揺りかごを揺すって、赤ん坊の周りに大変な嵐を巻き起こした。

「なあおまえ、結婚が犠牲であったということなら——」と夫が言った。

「そういうことよ」と妻が言った。

「いや、それならば言わせてもらおうが」妻と同じように不機嫌に意地悪くテタビィは続けた、「これには二つの面があるんだ。つまりわしの方こそ犠牲者なんだ。そんな犠牲など払わなければ良かったと後悔している。」

「犠牲など払ってもらいたくなかったことよ、それがうそいつわりのない私の気持ちだわ」と妻は言った。「テタビィ、その気持ちは私の方がもっと強いだよ。」

「いったいこの女のどこが気に入ったんだろう」と新聞売りは呟いた。「そう、たしかに、取り柄はあったんだろうが、今は何もありません。昨夜、夕食が済んだ後、暖炉の火のそばに座ってそんなことを考えていたっけ。この女は太ってきたし、ばあさんになってきた。どの女と比べても見劣りがする。」

【一三〇】

「この人は見ばえがしないし、風采があがらないし、背は低いし、腰もまがってきた。おまけに禿げてきたじゃない」と妻が呟いた。

「彼女と結婚した時、気が変になっていたに違いない」と夫。

「分別がなくなっていたんだわ。そうでも考えないと説明がつかないもの」とことさら

²⁹ 古くから駒鳥は哀れな死骸を葉、花、イチゴなどでおおう親切な鳥として、劇、物語、民謡などで歌われてきた。

念を入れてテタビィ夫人が言った。

こんな気分で彼らは朝食の席についたのであった。ちびのテタビィたちは食事を座って食べるものというふうを考える習慣はなかった。彼らはそれを踊りやかかけこのように楽しんでいた。それはむしろ野蛮な儀式に似ていて、時折儀式には付き物の甲高い喚声を上げたり、バターつきパンを振り回すかと思うと、いろいろな隊列を組んで通りに出て行き、またもどって来る。そしてこの余興に付随して戸口の階段をピョンピョン跳び上がったたり跳び下りたりするのである。今朝の場合、食卓の上に置かれてみなで飲むことになっている、水割りの牛乳を入れた水差しを、我先にとろうとするちびたちの争いが、ワッツ博士³⁰の思い出を辱しめるほどに、怒りの激情の高じた悲しむべき実例を呈していた。テタビィ氏がすべてのちびすけたちを戸口から追い出して、やっと瞬時の平和が訪れたが、その瞬間にも、こっそりともどっていたジョニィが、貧欲さをむき出しにして、見苦しいほどのあわて方で水差しに顔をつっこみ、腹話術師のような声を出してむせんでいるのが発見され、その平和も破られてしまった。

「この子たちいつかは私を殺してしまうでしょう！」罪人を追っ払った後、テタビィ夫人は言った。「早ければ早いほどいいわ。」

【一三一】

「貧しい者は」とテタビィ氏が言った、「子供など持っちゃいかんのだ。子供はわしらにとって何の喜びにもならんのだから。」

その時、夫は妻が自分の方へ乱暴に押して寄越したコップを取り上げ、妻は自分のコップを口のところまで持ち上げていたが、急に釘づけになったように二人の動作が中断した。

「ねえ！母ちゃん！父ちゃん！」と部屋にかけこみながらジョニィが叫んだ。「ウィリアムのおばちゃんがやって来るよ！」

この世が始まってからというもの、小さな男の子が、熟練した乳母のような気の遣い方で揺りかごから赤ん坊を取り上げ、優しく赤ん坊をなだめ、あやし、そしてそれを抱えていそいそとおぼつかない足どりで出かけて行くといったことがあったとすれば、今外に出て行ったジョニィこそその男の子であり、モレク嬢こそその赤ん坊であった！

テタビィ氏がコップを置いた。そして妻がコップを置いた。夫が顔をこすった。妻が顔をこすった。夫の顔が和らぎ、明るくなり始めた。妻の顔も和らぎ、明るくなっていった。

「ああ、神よ、許し給え」とテタビィ氏が呟いた。「わしは何と情けない気持ちになっていたんだろう。いったいどうなっていたんだ！」

「昨夜、つくづく感じて夫に私の気持ちを話したばかりなのに、またどうしてこんなにつらく当たるなんてことができるのかしら？」妻はエプロンを目に当ててすすり泣いた。

³⁰ 一六七八 - 一七四八。イギリスの賛美歌作者で、その賛美歌集の一七番に怒りを戒める歌詞がある。

「わしには血も涙もないのだろうか」とテタビィ氏は言った。「それともわしのようなものにでも取り柄があるのだろうか？ねえソファイア！おちびさん！」

【一三二】

「ああ、ドルファス」と妻が答えた。「わしの——わしの陥っていた精神状態は」とテタビィ氏が言った、「今では考えるにしのびない、ソウフィ。」

「ああ！私の方こそ、もっとひどかったわ、ドルフ」と、大きな悲しみの発作に襲われて妻が言った。

「ソウフィ」とテタビィ氏が言った、「そう悲しまないでくれ。わしは自分が許せない。わしはおまえの心をさんざん痛めつけてしまった。」

「いいえ、ドルフ、いいえ。それは私の方よ。私だわ！」と妻は叫んだ。

「ねえ、おちびさん」と夫が言った、「それを言わないでくれ。おまえの気高い心を示されると、わしはとても責められるんだ。ねえ、ソウフィ。おまえはわしが何を考えていたか知らんだ。たしかに、とてもみっともない形でわしの心を見せてしまった。だがわしの考えていたことは、おちびさん！——」

「ああ、ドルフ。いいのよ！いいのよ！」と妻は叫んだ。

「ソウフィ」とテタビィ氏が言った、「はっきり言っておかなくてはいけないんだ。言わなければ良心が休まらないからね。なあ、おちびさん——」

「ウィリアムのおばちゃんがもうすぐ来るよ！」と戸口でジョニィが叫んだ。

「なあ、おちびさん、わしはどうして」と椅子で身体を支えながらあえぐようにテタビィ氏が言った、「わしはどうしておまえを崇める気持ちになったんだろうと不思議に思っていたんだ——」

【一三三】

わしはおまえによって与えられた宝のような子供たちのことを忘れていた。そしておまえが、わしの望むほどほっそりとしていないなんて思ったんだ。わしは——わしは、思い起こそうとはしなかった」と厳しい自責の念に駆られてテタビィ氏は続けた、「わしの妻として忍んでくれた苦勞をね。それもわしやわしの家族のために生じた苦勞ではないか。わしよりもおまえと幸せにやって行け、わしよりもその幸せの味を知る他の男(そんな男はどこにでも簡単に見つかるはずだからね)となら、そんな苦勞はしなくて済んだのに。それなのに、おまえがわしのために和らげてくれた辛い年月の間に、おまえが少しばかり齢を取ったと言って、おまえと言い争ったりしたんだ。わしの言うことを信じてくれるかね、おちびさん？わし自身でも信じられないくらいなんだ。」

テタビィ夫人は、笑いと涙の嵐の中で両手で夫の顔を抱え、離そうとはしなかった。

「ああ、ドルフ！」と彼女は叫んだ。「そんなふうに考えてもらうなんて本当に嬉しいわ。そう思ってくれて、本当にありがとう！だって私は、あなたが見ばえがしないなんて考えていたんですからね、ドルフ。ええ、あなたは見ばえがしないことよ。でもあなたが、その優しい手で私の目を閉じてくれるまで、私の口は誰よりもみずばらしいあなたの姿を見ていたい。私は、あなたの背が低いと思ったわ。そうには違いないけど、でもそれだからこそ私はあなたを大切にします。いやもっと大切にしますわ。だって私の夫を愛しているんですもの。私はあなたの腰がかがんで来たと思ったの。たしかにそうだけど。だったら私に寄りかかってね。あなたの身体をまっすぐにするためならどんなことでもしますよ。私はあなたには持ち味が無いと思ってました。

【一三四】



でもあるんです。家庭的な持ち味がね。それこそもっとも清らかで最善のものだわ、ドルフ。神さまが、今再び我が家とそれにまつわるすべてのものを祝福して下さいますように！」

「わーい！ウィリアムのおばちゃんが出来たよ！」とジョニイが叫んだ。

彼女がやって来た。そして彼女と一緒に子供たち全員が。彼女が中に入ると子供たちは彼女に接吻し、お互いに接吻し合い、赤ん坊に接吻し、父と母とに接吻し、走ってもどると彼女の周りに群がってはね回り、大得意になって、彼女と一緒にぞろぞろと動いた。

【一三五】

熱心な歓迎にかけてはテタビィ夫妻も子供たちにいささかも遅れはとらなかった。子供たちと同じように、彼らもウィリアム夫人に引き寄せられた。二人は駆け寄ってウィリアム夫人の両手に接吻し、彼女を押し包むようにして、これ以上ないほど熱心で心のこもった歓迎振りを示した。彼女は、善、親切、優しい思いやり、愛、家庭、それらすべての精のように、彼らのところに現われたのであった。

「まあ！あなたたちみんなもまた、この晴れやかなクリスマスの朝、私に会ってこんな

にも喜んで下さるのね！」嬉しい驚きにうたれて手をたたきながらミリィが言った。「ああ、何て嬉しいこと！」

子供たちの歓声、接吻、彼女を取り巻いての行進がまた始まり、どの顔にも一層の幸せ、愛情、喜び、名誉の表情が満ち溢れ、ミリィは感きわまる思いだった。

「まあ！」とミリィは言った、「こんなに嬉しい涙を流させてもらうなんて。これほど喜んでもらって良いのかしら。こんなにも愛されるなんて、私は一体何をしたのかしら？」

「誰だってあなたを愛さずにはおれないのです！」とテタビィ氏が叫んだ。

「誰だってあなたを愛さずにはおれないのです！」とテタビィ夫人が叫んだ。

「誰だってあなたを愛さずにはおれないのです！」と楽しそうに声を合わせて子供たちが同調した。そして子供たちはまたもや彼女を囲んで跳び回り、行進し、彼女にまわりついた。そして彼らの薔薇のような顔をミリィの服に押しつけて、接吻し、それを愛でるようにいじくった。服やミリィをどんなにいじくっても飽き足りるということはない。

【一三六】

「私は」と涙を拭いながらミリィが言った、「今朝ほど心を動かされたことはありません。話ができるようになったらすぐにみなさんにお話しします。——日の出に、レドロー先生が私のところにやって来られました。まるで私があの方の可愛い娘であるかのように、とっても優しい態度を見せて下さり、病気で臥せっているウィリアムの兄のジョージのところについて来てくれないかとお頼みになられたのです。私たちは一緒に出かけました。その道すがら、あの方はとても御親切で、もの静かで、とても大きな信頼と希望とを私にかけていらっしゃるように思われましたので、嬉しさのあまり、私は思わず泣き出してしまいました。家に着いた時、戸口で女のひと(誰かにひどく痛めつけられているようでした)に出会いましたが、そのひとは私の手を取って、通り過ぎる私を祝福してくれました。」

「そうですとも」とテタビィ氏が言った。テタビィ夫人も、そうですとも、と言った。子供たちみんなが、そうですとも、と言った。

「ああ、でもまだありますのよ」とミリィが言った。「私たちが階段を上がって部屋に入りますと、何時間もの間、どうしても起き上がれないで臥せっていた病人がベッドに起き上がり、ワッと泣き出して、手を私の方に伸ばして、言いましたの、自分は人生を空費してしまった、今は心から後悔して過去に対する悲しみに暮れている、垂れこめた暗雲がすっかり拭かれて、素晴らしい眺望が開けるように過去がはっきりと見えてきた、と。それだけでなくあの方は、可哀そうな老父が自分に許しと祝福とを与えてくれるよう私に執り成しを頼み、さらにベッドのそばに来て祈って欲しいと言うのです。私はその通りにしてあげますと、レドロー先生がとっても熱意をこ

【一三七】

めて私の祈りに加われ、何度も何度も私や神様に感謝の祈りをされますので、私は心がいっぱいになって、もし病人から自分のそばに座ってくれるようにと頼まれなかったら、ただむせび泣くより他なかったことでしょう。——腰を下ろしたことでもちろん私の心は落ち着きました。私がそうして座っていると、病人は私の手を取り、うとうととまどろみました。そしてその時、こちらに伺わなくてはなりませんので手を離したのですが(私がこちらに伺うことをレドロー先生はとても熱心に望んでおられました)、病人の手が私の手を探るものですから、どなたかが私の代わりをして、私の手をもう一度戻したように思わせなくてはなりませんでした。ああ、本当に」とすすり泣きながらミリィが言った。「こんなにしてもらって、私が感謝と幸せを感じなければ嘘ですわ！」

彼女が話している間に、レドローが家の中に入っていた。彼女を取り巻いている人たちを一瞬立ち止まって見た後、彼は静かに階段を昇って行った。階段の上に再び現われた彼は、学生が彼のそばを通り抜けて、階下に下りる間、そこにじっと立っていた。

「親切な看護婦さん、誰よりも優しく素晴らしい人」と彼は彼女の許にひざまずき、彼女の手を取ろうとしながら言った、「ぼくのひどい恩知らずを許して下さい！」

「あらあら！」とミリィが無邪気に言った、「また一人いらしたわ！まあ、この人も私を好いて下さるのね。ほんとうにどうしましょう！」

そう言った彼女のあどけない素朴な様子や、口の前に手を置いて幸せに満たされて泣く様子は見て快いものであり、見る者の心を動かした。

【一三八】

「ぼくは自分を失っていました」と彼は言った。「原因は分かりませんが、——多分、病気のせいだったのでしょ——ぼくは頭がおかしくなっていたんです。でも今はもう大丈夫です。こう話している通り、ぼくはほぼ正気にもどりました。子供たちがあなたの名前を大声で言うのが聞こえました。そしてその声が聞こえるとすぐぼくを覆っていた影が消え去ってしまったのです。ああ、泣かないで下さい！ミリィさん、もしあなたにぼくの心が読み取れ、その心がどれほどの喜ばしい敬意と愛情とで燃えているかお分かりになりさえすれば、そんな泣き顔をぼくに見せるようなことはされないでしょう。あなたの涙にぼくはとても責められるんです。」

「いえ、いえ」とミリィが言った、「そんなことで泣いているのではありません、ほんとうに。嬉しいからですわ。そんなちっぽけなことを許して欲しいとおっしゃるのね。そんなことが必要だと思われるなんてびっくりしますわ。でも、そう考えていらっしゃるのが嬉しいんです。」

「それで、もう一度来ていただけますか？そしてあのカーテンを仕上げて下さいますか？」

「いいえ」と彼女は、涙を拭い、かぶりを振りながら言った、「あなたには私の針仕事はもう要らないでしょう。」

「そのおっしゃり方では、ぼくを許して下さらないんですね？」

彼女は手招きをして彼をわきに呼び、彼の耳にささやいた。

「お宅からの知らせがあるんですよ、エドモンドさん。」

「知らせですって？どんな？」

「とてもおかげが悪い時あなたが手紙を書かれなかったためか、あるいは、良くなりかけら

【一三九】

れた時にあなたの手紙の筆跡が変わったためか、いったい真相はどうかという疑問が生じたわけです。それはそれとして——でも、悪い知らせでなければ、どんな知らせをお聞きになっても、それで悪くなられることはないでしょうね？」

「もちろんです。」

「でしたら言いましょう。ある人がいらっしたのよ！」とミリィが言った。

「母ですか？」と学生は尋ねて、思わず辺りを見回し、階段を下りていたレドローに目をやった。

「しっ！違いますのよ」とミリィが言った。

「母以外にはありえません。」

「ほんとうに」とミリィが言った、「確信が持てまして？」

「まさか——」彼がそれ以上言わないうちに、彼女は手を彼の口のところにやった。

「ええそうなのよ！」とミリィが言った、「若い御婦人が(その方はあの小画像に似てらっしゃいます、エドモンドさん、でもそれ以上におきれいですけど)、疑問を晴らすまで不安でとても落ち着くことができず、昨晚可愛らしい女中を連れてやって来られましたの。あなたの手紙はいつも学寮発になってましたので、そちらにいらっしたの。だから今朝レドロー先生にお会いする前に、お目にかかりました。その方もまた私を好いて下さるんです！」とミリィが言った。「まあ、また一人！」

「今朝ですって！今どこにいるんです？」

【一四〇】

「ええ、その方は今」と唇を彼の耳に近づけてミリィが言った、「宿舎の小さな客間であなたを待ってらっしゃるのよ。」

彼は彼女の手を握りしめ今にも飛び出そうとしたが、彼女はそれを引きとめた。

「レドロウ先生はとてもお変わりになりました。そして今朝私に御自分の記憶が損なわれたと話して下さいました。エドモンドさん、どうか先生に思いやりを持ってあげて下さい。私たちみんなですらうしてあげなくてはいけないのです。」

青年はお言葉には従いますよ、と目で彼女を安心させた。彼は、外に出る際に化学者のそばを通ったが、彼の前ではっきりと気持ちを表わして、ていねいにお辞儀をした。

レドロウはその挨拶にていねいに、そして謙遜した態度さえ見せて応え、青年が通り過ぎて行くのを見送った。彼は失ったものをもう一度呼び起こそうとするかのように、また頭を垂れて我が手を見つめた。しかし、記憶のよすがとなるものは消えてしまっていた。

賛美歌を聞き、亡霊が再び訪ねて来た時から、彼の内部に起こっていた変化は今も続いており、そのため彼は今いかに自分が多くのものを失ってしまったかを痛感し、自分の状態を哀れみ、それと周りにいる人たちの素朴な様子との対照をはっきり見ることができた。こうした気持ちの変化の中で、彼の周りにいる人たちに対する関心が甦ってきた。そして自らの不幸を穏やかなそして素直な心で受け入れる気持ちが生まれてきた。その気持ちは、老齡につきものの無感覚とか不機嫌といった気分を伴わないでその精神力が衰える時に、老齡者に時折見られる精神状態に似ていた。

【一四一】

ミリィによってこれまで犯した罪をつぎつぎと償われ、彼女と一緒にいればいるほど、こうした変化が、自らの内部でふくれていくのが彼には分かった。このために、また彼の心と呼び覚ましてくれた彼女の愛情のため(といってもそれ以上期待するというのではなかったが)、彼は、彼女が自分にとって頼みの綱であり、苦しみの中であって自分を支えてくれる杖であるとも感じるのであった。

そこで、老人と夫が待ってる家にもう帰りましょうかとミリィが言った時、レドロウはすぐに「ええ」と答え——彼もそのことが気になっていたのである——彼女の腕に自分の腕を通して彼女と並んで歩き出した。その様子には、彼が自然の驚異を手取るように究める賢明で学識豊かな人物で、彼女が無教育であるという感じはなく、むしろ二人の立場が逆になって、彼が無知な男で、彼女の方が何もかも知っているように見えた。

二人がこのように連れ立って家を出た時、彼は子供たちが彼女に群がって来て、彼女を抱き締めるのを見た。子供たちの笑い声や楽しそうな声が鳴り響くのを彼は聞いた。子供たちの明るい顔が、花のように彼の周囲に集まってくるのを彼は見た。子供たちの両親が満足感と愛情を新たにすることを彼は見た。静けさを取り戻した彼らの貧しい家庭に漂う清らかな空気を彼は吸った。彼がこの空気の中に以前まき散らしたことがあり、ミリィがいなかったら今もきっと蔓延^{まんえん}させていたであろう有毒な空気のことを彼は思った。それ故、彼がミリィのそばを素直な心で歩き、彼女の優しい胸を自分の方に引き寄せたのは多分驚

くほどのことではないのである。

二人が宿舎に着くと、老人は地面をじっと見ながら、炉辺に置かれた椅子に座っており、息子

【一四二】

は暖炉の反対側に身体をもたせて老人を見ていた。ミリィが戸口に入って来ると二人ともぎくりとして、彼女の方を振り返ったが、彼女を見ると二人の顔は嬉しそうに輝いた。

「あら、まあ、ほんとうに、この人たちもみんなと同じように私に会って喜んで下さるのね！」とミリィは叫んで嬉しくてたまらなくなつて手をたたき、また急にその動作をやめた。「これでさらに二人だわ！」

ミリィに会えて嬉しいだなんて！嬉しいなんてものではなかった。彼女を迎えるためにさっと開かれた夫の腕に彼女は飛び込んで行った。彼としては、その短い冬の日ずっと肩に彼女の頭を置いて、彼女を抱いていることができたなら、どんなに嬉しかったことであろう。しかし老人も彼女をほっておくことはできなかった。彼もまた腕を広げて、その中にしっかりと彼女を抱き締めた。

「いやはや、わしのおとなしいおねずは今までどこに行つてたんだね？」と老人が言った。「なかなか帰つてくれなかったね。わしはおねずがいないとひとりではやつて行けないんだよ。わしは——ウィリアムはどこだね——どうもわしは夢を見ていたようだよ、ウィリアム。」

「それは私の言う言葉ですよ、父さん」と息子が言った。「私の方こそ、情けない夢を見ていたようです。——おかげんはどうです、父さん？ すっかり良くなりましたか？」

「ああ、元気はつらつだね」と老人が答えた。

ウィリアム氏が、どんなにしても父親に対する暖かい気持ちは表わせないかのように、父親の手を握り、背中を軽くたたき、手で優しく身体をさすってやる様子は、なかなかの見ものであつた。

【一四三】

た。

「父さん、あなたには感心させられますよ！——おかげんはいかがですか？ もう本当に大丈夫なんですか？」また父親の手を握り、背中を軽くたたき、身体を優しくさすりながらウィリアムが言った。

「こんなに爽快で元気になったためしはないよ、おまえ。」

「あなたには本当に感心させられますよ、父さん！ まさにそのところですけどね、」ウィリアムは熱意に溢れて言った。「父さんがこれまでに経験してきたこと、そして長い

人生の間に父さんの身の上に訪れたすべての運命や変化、悲しみや労苦、そしてそのために髪の毛が白くなり、積もる歳月の重みをその髪にじっとたたえていることを考えると、この年老いた人をどれほど讃え、その老齢をどんなに気楽なものにしてあげてもじゅうぶんということはないように思いますよ。——おかげんはいかがですか、父さん？ほんとうに大丈夫なんですか？」

もし老父が、それまで目に入らなかった化学者に目をとめなかったら、ウィリアム氏はこの質問を際限なく繰り返し、またも父親の手を握り、軽く背中をたたき、身体をさすっていたことであろう。

「御免下さいまし、レドローさま」とフィリップは言った、「お見えになっておられるとは存じませんでしたので。でも存じてましたらこんなにくつろいではおりませんでしたでしょう。レドローさま、クリスマスの朝ここであなたさまにお会いしたのを覚えていますよ。あなたさまがまだ学生でいらした時で、クリスマスの時節でも図書室にいつも出入りされるほどの熱心な御勉

【一四四】

強ぶりでした。ははっ！年寄りだからそんなことも覚えておるんです。ちゃんと覚えておりますとも、八十七歳になりますかね。あなたさまがここを去られた後、妻が亡くなりました。亡くなった私の家内のことは覚えておられますでしょうか、レドローさま？」

化学者は、覚えていると答えた。

「さよう」と老人が言った。「あれはいいやつでした。思い出しますが、あるクリスマスの朝、あなたさまは若い御婦人とこちらにお越しになりました——失礼はお許し下さい、レドローさま、その方はあなたさまがとても愛しておられた妹さまではございませんでしたか？」

化学者は老人を見て、かぶりを振った。「私には妹があったが」とぼんやりと彼は言った。彼にはそれ以上何も分からなかった。

「あるクリスマスの朝」と老人は続けた、「あなたさまはその方とこちらにお越しになりました——雪が降り出しましたので、私の家内が若い御婦人を中心に招き、火のそばに座って下さるようにと申しました。その部屋は今は亡き十人委員会の方々が、お食事を賄われていた時、大食堂として使われておりましたもので、クリスマスの日にはいつも火を燃やしているんです。私もそこに居合わせておりました。若い御婦人の美しい足を暖めてさしあげるために火を掻き起こしておりました時、その方があの肖像画の下にあります巻き物型装飾で彫られた文字を大きな声で読まれたのを覚えています。『主よ、我が記憶を褪せしめ給うなかれ！』その方と亡くなりました妻はその言葉について話し始めました。今考えてみると奇妙に思えるのですが、二人とも(二人が天に召されるなどとても考えられることではありませんでしたが)それが良い祈りで、もし自

【一四五】

分たちが若くして天に召されたならば、自分たちのもっとも大切な人のために真心から捧げたい祈りだと話しておりました。『お兄さまに』と若い御婦人が、——『私の夫に』と私の亡くなった妻が言いました。——『主よ、私が愛しき人の記憶の中で色褪せ、忘れ去られることのありませぬように！』」

未だかつて味わったことのない悲痛な涙がレドローの顔にしたたり落ちた。思い出話に夢中になっているフィリップは、それまで、レドローの状態やこれ以上話が続くことに気を揉んでいるミリィには気がつかなかった。

「フィリップ！」と彼の腕に手を置いてレドローが言った、「私はうちのめされている。摂理の御手が罪の報いとして私に厳しく打ちおろされたのだ。あなたは私の理解の及ばないことを話している。私の記憶は失われたのだ。」

「慈悲深き神よ！」と老人が叫んだ。

「私は悲しみ、災いそして苦しみの記憶を失ってしまった」と化学者は言った、「それとともに人の記憶に宿るすべてを失ってしまったのです！」

年老いたフィリップがレドローに哀れみをかけ、彼がレドローに休むようにと自分のひじ掛け椅子を動かし、自らも亡き妻への思いによって厳肅な気持ちになって、レドローを見つめる様子には、老人にとって、そうした記憶がどんなに貴重なものであるかを、幾分かではあれ伝えるものがあった。

例の少年が部屋に駆け込んで来て、ミリィのところに走り寄った。

【一四六】

「あのひとが」と少年は言った、「別の部屋にいるんだ。あのひとはいやだ。」

「誰のことだね？」とウィリアム氏が尋ねた。

「しっ！」とミリィが言った。

彼女の合図に従って、ウィリアムも老父も静かに引きさがった。二人が気付かれないように部屋を出ると、レドローは自分のところに来るようにと少年を手招きした。

「このひとが一番好きだ」とミリィのスカートをつかんで少年が言った。

「それはそうだ」とかすかに笑みを浮かべてレドローが言った。「だが、私の近くに来るのを恐れることはないんだよ。優しいおじさんになったんだから。誰よりもおまえにはね！」

初めはそれでも尻ごみをしていたが、ミリィに促されて少年は少しずつ素直になり、彼に近づいていき、その足許に腰を下ろしさえした。レドローは子供の肩に片手を置いて哀れみと同情とを寄せてじっと彼を見つめ、片方の手をミリィの方へ差し出した。ミリィは

レドローの顔が見れるようにして差し出された手の方に腰を下ろし、沈黙を破って言った。

「レドロー先生、お話ししてもよろしいですか？」

「ええ」と彼女にじっと目を注ぎながらレドローが答えた。「あなたの声は私にとっては音楽と同じです。」

「お頼みしたいことがあるんです。」

「どうぞ。」

「私が昨晚お宅の戸を叩きました時、私が申しましたことを覚えておられますか？昔あなた

【一四七】

さまのお友達でしたが、今破滅の淵に立たされている人のことです。」

「ええ、覚えています」と彼は少しためらって言った。

「お分かりになっていただけますかしら？」

彼は少年の髪をなで——その間もじっと目を彼女に注いでいた——そして首を横に振った。

「その人を」と彼女は澄んだ優しい声で言ったが、その声は、彼に注がれている穏やかな目のために、いっそう澄んで優しく感じられた。「あの後すぐ見つけましたの。私は家にもどって、神様のお助けによってその人の居所をつきとめました。やっとのことで間に合いましたが、もう少しで手遅れになるところでした。」

彼は少年から手を離し、その手を彼女の手の上に置いた。彼女の声や目に劣らずその手の感触から、彼は心に響いてくる恥じらいつつも真剣な彼女の思いを感じ、さらに真剣なまなざしで彼女を見つめた。

「その人は、エドモンドさんの——たった今ここにいらっしゃった、あの若いお方のお父さまなのです。本当の名前はロングフォードです。——その名に覚えがございましたか？」

「名前に覚えはあります。」

「その人のことは？」

「いえ、どんな人かは知りません。その人は私を不幸な日に会わせただけではないでしょうか？」

「そうなのです！」

「ああ！だったら望みはない——絶望です。」

【一四八】

彼は頭を振って、彼女の同情を無言で求めるかのように、彼が握っている手を軽くたたいた。

「私は昨晚、エドモンドさんのところへは行きませんでした」とミリィが言った。――
「あなたは何かも覚えている気持ちで私の話すことを聞いて下さいますね？」

「あなたの言うことは何一つ聞き逃しませんよ。」

「私が行かなかったのは、その時、その人が本当にエドモンドさんのお父さまだということが分かりませんでしたし、もしそれが本当でしたら、病気をされた後ですから、そのようなことを知らせたら心配なことになるのではないかと思ったのです。その人が誰かということが分かりましてからも、私は行くことはしませんでした。でも、それは別の理由からです。その人は奥さまや息子さんと長い間別れていらっして――その人から聞いたのですが、息子さんがまだ幼い時から家族とは無縁になっているそうなんです――そしてもっとも大切にしなければならなかったものを諦めて、捨ててしまわれているのです。その間に、紳士の身分でしたのに少しずつ身を持ち崩し、今では――」ここで彼女は急いで立ち上がり、少しの間外に出るとレドローが昨晚目にした尾羽打ち枯らした男を連れて帰って来た。

「私を知っているのかね？」と化学老が尋ねた。

「知らないと答えられれば嬉しいのだが」とその男は答えた、「嬉しいという言葉は私には使い慣れぬ言葉でね。」

化学者は、彼の前に、自らを卑しめ落ちぶれた姿で立っている男を見つめた。そして、もしミリィがレドローのそばに来て前のように腰を下ろし、男に注がれる彼の視線を彼女の顔の方に向

【一四九】

けさせなかったなら、彼は何一つ心を開かれぬまま、その無益な凝視を続けていたことであろう。

「ごらん下さい。何と落ちぶれ果てた姿なんでしょう！」化学者の顔から目を離さず、腕をその男の方に伸ばしながら、彼女はささやくように言った。「もしこの人に関係するすべてのことを思い出すことができたなら、あなたさまがかつてあれほど愛していた人(どのくらい前のことかとか、あるいはどんな信念からこの人が何もかも放棄してしまったのかといったことはもう考えないことにしましょう)が、こんな状態になってしまったことをお考えになって、不憫ふびんにお思いにはなりませんでしょうか？」

「そうあって欲しい」と彼は答えた。「きっとそのような気持ちになるでしょう。」

彼は戸口に立っている人物の方に定まらぬ視線を送った。しかし素早く視線を彼女にもどすと、彼女の声の調子、目の輝き一つ一つからある教訓を学び取ろうとするかのように一心に彼女を見つめた。

「私には学問はありませんが、あなたさまは学識の豊かなお方です」とミリィが言った、「私は考えることは不慣れですが、あなたさまはいつも考えておられます。でも、私たち

が被った不幸を思い起こすことがなぜ私には良いことに思えるのか、お話ししてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ。」

「人の過ちを許すためですわ。」

「神よ、我を許したまえ！」とレドローは天を仰いで言った、「汝が気高き賜物を打ち捨てしことを！」

【一五〇】

「そしてもし」とミリィが言った、「私たちの願いでもあり祈りなのですが、あなたさまが御記憶をいつか回復され、もしあなたさまの被られた不幸とそれに対する許しとを一度に思い出されるならば、それはとても幸いなことではないでしょうか？」

彼は戸口にいる人物に目をやって、また釘づけされたように一心に彼女を見つめた。彼女の輝かしい顔から発したこれまでにない一条の明るい光が、彼の心の中まで照らしたように思われた。

「この人は自分が見捨てた家に帰ることはできません。帰る気はないのです。もし帰ればあんなにも無情に打ち捨てた家族の人たちに恥辱と苦悩とをもたらすだけだということ、そして自分がもうその人たちに近寄らないことがその人たちにできる最善の償いであることをこの人は知っているのです。心づくしのお金をほんの僅かでも与えてあげれば、この人はどこか遠くの土地に行って、人に迷惑を及ぼすことなく暮らして行けましょう。そしてこれまで犯してきた過ちに対して、この人の力の及ぶ限りで償いもできましょう。この人の奥さまであられるあの不幸せな御婦人や息子さまにとりまして、これが、親友として与えることのできる最良のそしてもっとも心のこもった贈り物になることでしょう——その人たちにはこの贈り物のことをけっして知らせる必要はありません。そして、評判においても精神や肉体においても、すっかり損なわれたこの人にとっては、これが救いの道となりますでしょう。」

彼は彼女の頭を両手で抱え、それに接吻して言った、「その通りにしましょう。どうか今すぐ、悟られないように、私に代わってそうして下さい。そして、理由が分かればなおさらだが、とにかく許すと伝えて下さい。」

【一五一】

彼女が立ち上がって、その落ちぶれた男に輝くような顔を向け、彼女の取り継ぎがうまく運んだことを目で伝えると、男は一步前に出て、目はふせたままレドローに話しかけた。

「あんたはとても寛大だから」と彼は言った、「——あんたはいつも心の広い男だったから——今あんたの前に立っているこの哀れな男に対して湧き上がってくる報復の気持ち

は忘れようとしてくれるだろう。レドロー、私は自分の心から己れに対する懲罰の気持ちを追い払うつもりはない。ぜひ信じてくれ。」

化学者は、身振りで、もっと自分のそばに来てくれるようにとミリィに訴えた。そして男の話に耳を傾けながらも、その話の手がかりを見つけたそうとするかのように、彼女の顔を覗き込んだ。

「私はこんなに落ちぶれてみじめな人間だから、告白なんてする柄ではないし、自分の生涯のみじめさがいやになるほど思い出されてくるので、そんなことをあんたの前で並べたてる気にもなれない。しかし私があんたを欺いて、墮落の一步を印した日から、私は確実にそして着実に破滅の道を歩んできたわけだ。嘘いつわりなくね。」

レドローは彼女を自分のすぐそばに寄せたまま、顔を話し手に向けた。その顔には悲しみが宿っていた。何かを思い出して悲しむような表情が。

「あの最初の運命の一步を踏み出していなかったら、私もそして私の人生も違ったものになっていたかも知れない。実際どうなっていたかは知る由もない。可能性のことは言わないことにしよう。妹ごは今安らかに眠っておいでだ。たとえこの私が、あんたが思ってくれたような人間で、

【一五二】

かつては自分でも思っていたようなまっとうな人間のまま今まで生きてきたとしても、私といっしょになっているよりは、その方が良かったんだ。」

レドローは、そのことに触れたくないかのように急いで手を動かした。

「私の話は」と男は続けた、「墓場に足をつっこんでいた人間のする話だ。昨晚、この尊い救いの手が私に差し伸べられなかったら、それこそ墓場に入っていたことだろう。」

「まあ、この人も私を好いて下さる！」とミリィは声をひそめて、すすり泣いた。「また一人！」

「たとえパンのためであっても、昨晚だったらあんたのお世話になるなんてとてもできなかった。しかし今日になって、過去の記憶が強く覚醒し、なぜか自分でも分からないのだが、それが生き生きと心に浮かんできたので、彼女が言ってくれる通り思いきってやって来たわけなんだ。それにあんたの広い心にすがり、そのことに感謝の意を述べ、そしてこうして今慈悲をかけてくれたように、あんたが死を迎える時には、私を思い出して情けをかけてもらえたらと思ったんでね。」

彼は戸口の方を向き、外に出ようとして一瞬立ち止まった。

「母親のためにも、息子があんたのお眼鏡に適ってくれるといいのだが。息子がそれにふさわしい者であって欲しいと思っている。私の生命がながらえることがなければ、そして私がわきまもなくあんたの援助をないがしろにしてしまわない限り、息子にもう会うこともないだろう。」

出て行く時に、彼は初めて目をあげてレドローを見た。相手の目にじっと視線を注いだまま

【一五三】

ドロローは、ぼんやりと手を差し出した。男も手を出して、レドローの手に触った——少し強く両手で——そして頭を下げると、ゆっくりと出て行った。

ミリィが静かに彼を門の所まで送ってから帰るまでのしばらくの間、化学者は椅子に身を沈めて両手で顔を覆った。夫と舅しゅうと(この二人はともにレドローのことを非常に気遣っていた)と一緒にもどってきて、彼の様子を見たミリィは、彼の邪魔をしないように、そして邪魔が入らないように気を配り、椅子の近くにひざまずいて、少年に何か暖かい衣類を掛けてやった。

「まさにそこのところなんです。いつもの私の言い草なんですよ、父さん！」と妻を賞めずにはおれない夫が大きな声で言った。「家内の胸には、はけ口を求めてやまない母性的な感情があるんです！」

「うん、うん」と老人が言った、「おまえの言う通りだ。倅のウィリアムの言うことに間違いはない！」

「ミリィ、すべてが天の思し召しなんだ、ぎっとね」とウィリアム氏は優しく言った、「私たちが子供がないことがね。でも愛し慈しむことのできる我が子を君が持っていてくれたらと願う時もあるんだよ。君があんなにも希望をかけていたのに、この世の空気を吸うこともなく死んだ私たちの子供——あの子が君をもの静かにしたんだね、ミリィ。」

「あの子のことを思い出すと、とっても嬉しいのよ、ウィリアム」と彼女は答えた。「毎日あの子のことを考えるの。」

「あまり考え過ぎるんじゃないかと心配していたよ。」

【一五四】

「心配するなんて言わないで。私にとってはあの子が慰めなの。とてもいろんな風に私に話しかけてくれるの。この世の空気を吸わなかったあの清らかな子は、私にとっては天使みたいなよ、ウィリアム。」

「君は、父さんにとっても、私にとっても天使だよ」とウィリアム氏は優しく言った。「そうだとおも。」

「私があの子にかけたあらゆる希望や、私の胸にけっして抱くことのなかったあの子の小さなにっこり笑う顔を幾度となく心に描いてきたことや、光を見ることのなかった可愛い目が私に向けられていると考えたと」とミリィは言った、「いっそう優しい気持ちになれるのよ。希望が挫かれたといっても何一つ損なわれることはないのですから。可愛い子

が優しい母の腕に抱かれているのを見ても、我が子もあんなに可愛くって、私の心を誇らしく幸せにしてくれたことだろうと思って、それだけ、その子を可愛く思ってしまうの。」

レドローは頭を上げて、彼女の方を見た。

「私の人生を通して」と彼女は続けた、「私にはあの子が何かを語りかけてくれているような気がするんです。打ち捨てられた可哀そうな子供がいると、あの子はまるで生きていくかのように、そして私にはあの子の声だと分かるのだけど、まるで声があって私に話しかけるようにその子に手を差し伸べてくれと訴えるのよ。子供が苦しんだり、みじめな思いをしているのを聞くと、恐らく、私の子もあんなことになっていたかも知れないと、そして神様の御慈悲であの子が召されたのだという風に思うの。ここにいらっしゃるお父さまのように、年を取って髪の毛が白くな

【一五五】

ったお姿の中にもあの子がいて、自分もまた年を取ってあなたや私がいなくなってもずっと生き続けて、やがては若い人たちの尊敬と愛情を必要としていたかも知れない、と言うの。」

彼女の声は前よりも一層穏やかになり、彼女は夫の腕を取ってそれに自分の頭をのせた。

「子供たちはとても私を好いてくれるので時々空想したくなるの——ばかな空想でしょうけどね、ウィリアム——子供たちは私には分からないやり方で天に召された私の子供や私に同情を寄せてくれて、なぜ子供たちの愛情が私にとって大切であるかを察してくれるような気がするのよ。あのことがあってから口数が少なくなったとしても、私はあの時よりも幾倍にも幸せに感じていたのよ、ウィリアム。幸せでないなんてちっともありませんことよ、——子供が生まれてほんの数日で天に召され、気落ちして悲しみに暮れ、少しは嘆き悲しんでも仕方ない時に、私が立派な生涯を送るならば、天国に行った時、私を『お母さん！』と呼んでくれる元気な子供に会えるという思いが心に浮かんだんですもの。」

レドローは、大きな泣き声をあげて、ひざまずいた。

「ああ、神様」と彼は言った、「汝は清らかな愛を私に教え、慈悲深くも私の記憶を甦らせて下さいました。十字架につけられたキリスト、そしてキリストの教えに身を捧げて死んでいったすべての善き人たちの記憶を。我が感謝の心を受け入れ給え。彼女に祝福を授け給え！」

それから彼はミリィを胸にひしと抱き締めた。ミリィは笑いながらも、これまでも増して喜びの涙にくれた。「御自分を取り戻されたのだわ！この方もまたほんとうに私を好いて下さる！あら、まあまあ、またお一人！」

【一五六】

その時、学生が、なかなか入ろうとしない美しい娘の手を引いて入って来た。学生に対するレドローの気持ちには大きな変化が起こっていて、彼は、己が人生の心とらぐ経験がこの学生と彼の選んだ娘とに優しく影を投げかけているのを見て、わびしい箱の中に長い間閉じ込められていた鳩が、安らぎと友を求めてこんもりとした木に飛んで行くように、学生の首に抱きついて、二人に我が子になってくれと頼むのであった。

そして、クリスマスは一年のどの時節よりも、私たち自身の経験に負けず劣らず私たちを取り巻く救済可能なあらゆる悲しみ、災い、苦しみの記憶が、すべての人のために活動すべき時節なので、レドローは手を子供に置いて、昔、幼子の上に手を置いて、厳かな予言者の知恵によって、自分から子供たちを引き離すものを厳しく戒めた神³¹に向かって無言で呼びかけ、この子供を守り、教え、回復させてやることを誓った。

それから、彼は右手を快活にフィリップの方に差し出して、今日、今は亡き十人委員会の人たちが食事を賄われていた時、晚餐用の大食堂として使われた部屋でクリスマスの晩餐会を開きたいと、そして、あなたの息子さんの話ではみんなで手をつなげばイギリス全体を輪に囲めるほどとても数の多いスウィッチャーの一族を、急な知らせではあるが、できるだけ多く呼び寄せて欲しいのだが、と言った。

その日のうちにそれが実行された。成人した者や子供やらで、実に沢山のスウィッチャーがいたのだが、概数でその数を言ったりしたら、疑い深い人たちにこの物語の真憑性^{しんびよう}を疑わせることになるかも知れない。だからその試みはやめることにする。しかし、幾十人もの多数のスウィッ

【一五七】

ジャーが集まっていた——そしてジョージのことで嬉しい知らせと希望とがみなを待っていた。ジョージを父親と弟とミリィとが再び訪れて、再び彼が穏やかに眠っているのを見届けてきたのだった。また晚餐の席に、テタビィ家の者も来ていて、その中には虹色の毛糸の襟巻き³²をつけてやってきた小さなアドルフアスもいて、ちょうどまく牛肉にありついていた。もちろんジョニィと赤ん坊とはそれに間に合わなかった。身体をひどく片方にかしげて、ジョニィはへとへとに疲れ、赤ん坊は二重歯が生えてくる状態と思われた。しかしこれはよくあることであり、驚くほどのことではなかった。

野犬ほどにも子供の習性を知らないで、他の子供たちが遊んでいるのにどのように話しかけてよいかも知らず、どのように遊んでよいか分からないで、ただ眺めているだけの素

³¹ 「マタイ伝」第十九章十三節 - 十四節。

³² 本文五六ページ参照。

姓も知れない子供を見るのは悲しいことであった。そこにいる一番小さな子供たちが、この子が他の子供と違うということを本能的に知って、おずおずと近づいて、一緒に楽しむように、優しい言葉をかけたり、体に触ったり、小さな物を与えてやるのを見るのは、違った意味で悲しいことであった。しかし子供はミリィから離れず、彼女を好きになり始めていた——さしずめ、彼女ならまた一人と言うところだ——そしてみんな心から彼女を愛していたので、子供がそうした様子を見せるのが嬉しかった。そして子供がミリィの椅子の後ろから彼らを覗いているのを見て、彼がそんな近くまで来てくれたことを喜んだ。

化学者も、彼のかたわらに腰を下ろしている学生も彼の未来の花嫁も、フィリップも、そしてそこにいる他の人たちもみなこの光景を見ていた。

【一五八】

その後、これまで書き留められた物語は、レドローの思いつきに過ぎないと言う人がいる。また、冬の日暮れ時に、暖炉の火の中に彼が読み取ったことではないかと言う人がいる。また幽霊は、彼自身の暗い思考の表われであり、ミリィは彼の高邁な英知の具現であると言ったりする人もいる。私は何も言わない。

——ただこれだけは言わせていただく。彼らの集まっていた古い大食堂は明りと言えは燃えさかる暖炉の火(早く食事をしたのだ)だけだったが、あの影法師が再びその隠れ場所から忍び出て、部屋の中を踊り回り、壁に異様な形や顔を映して子供たちに見せ、そこに存在する親しみのある事物を徐々に狂気じみた得体の知れないものに変えて行った。しかしその大食堂には、影が当たらず変わることはないものが一つだけあって、それにレドローや、ミリィとその夫、老人、学生とその未来の花嫁の目がしばしば向けられるのであった。暖炉の火によって一層いかめしさを増し、まるで生きた人間の顔のように、鏡板の張られた壁の暗がりから何かをじっと見つめている顎ひげを生やし襷襟をつけた肖像画の穏やかな顔が、彼らが見上げると、緑したたる柵の花飾りの下からじっと見下ろしていた。そしてまるで声に出して言われたように、その下にくっきりと文字が浮かんでいた、「主よ我が記憶を褪せしめ給うなかれ。」

【一五九】



【一六〇】

【一六一】

【解説】

ごくありふれた物事が、ある強い感情と結びついて、一生人を強迫することがある。チャールズ・ディケンズ(一八一二 - 一八七〇)は、公表されなかった自叙伝の中で、子供の時の辛い経験を次のように語っている。

私の行きつけのコーヒー店は・・・・・・、セント・マーティンズ・レインにあったが、それが教会の近くにあって、ドアの卵形のガラスのプレートに、通りに面してCOFFEE-ROOM と書かれていたことだけを私は覚えている。現在、まったく違うコー

ヒー店に入って、ガラスに同じ文字が書かれていて、内側から MOOR-EEFFOC と逆に読むと(当時、そのように読んでもの悲しい空想に耽ったものである)、ある衝激が私の血管を貫くのである。

ディケンズは十二歳になったばかりの時、家計の不如意からウォレン靴墨工場に働かされ、その十一日後には、みじめな労働に追い打ちをかけるように、父親が借金不払いでマーシャルシー負債者監獄に投獄されることになった。家族は父親と一緒に監獄で生活することになるが、チャールズは監獄が狭いこともあって一人下宿住まいをさせられて、そこから工場に通うことになる。いたいけな十二歳の少年が社会に一人放り出され、辛くみじめな労働に加え、誰からも構ってもらえない毎日の生活の中で、いかに寂しく孤独であったかは容易に想像できることである。この体験は、のちに彼が人気作家となり赫々たる成功を収めるようになっても、けっして忘れられるようなものではなく、「有名になり、人からもてはやされ、幸せになった現在でも、私はしばしば夢を見て愛しい妻や子供がいること、さらには自分が大人になっていることも忘

【一六二】

れて、あの子供の時の生活へとひとり寂しくさまよいまどって行くのだ」とディケンズは、同じ自叙伝の断片の中で述懐している。ディケンズはこの苦しい体験を誰にも話さず、妻子ですら、彼の死後 J・フォースターの伝記から初めて知ったほどであった。」

優しい両親に愛され、暖かい家庭の団欒だんらんの中で過ごすことが人生の表であるとすれば、少年がひとりコーヒー店に入って、「半パイントのコーヒーとバターつきパン」でお茶の時間を過ごす生活は、チャールズが目にした MOOR-EEFFOC という文字がそのまま表わすように人生の裏であり、そこに広がる人生の MOOR(荒野)の中で、幼い彼は、おそらく骨の髄まで寂寥感に浸されたことであろう。『愚かれた男』の主人公レドローが、陰気な建物のうら寂しい一室で、暖炉の火を眺めながら物思いに浸る姿は、究極の孤独の恐るべき具象であるが、その姿に鬼気せまるものが感じられるのは、ディケンズのこうした経験とあながち無関係ではあるまい。

ディケンズの生涯は、並の小説よりもはるかに生彩がある。彼は幼くして成功の夢に取り憑かれ、まず「六ヶ国語をマスターするに匹敵する」ほど困難な速記の技術を、「あれほどの速記者にはお目にかかったことがない」と同僚に言わしむるほど完璧にものにして、飛躍への足がかりをつくる。また、『デイヴィッド・コパフィールド』のドーラに対するデイヴィッドの振る舞い方からおおよそ察せられるように、恋の俘虜とりこになって、「愛の深みにまっさかさまに呑み込まれ」てしまう。さらに芝居では、台本から演出、宣伝を一手に引き受け、自らも配役となって各地を公演したりするほどの熱の入れようであったし、小説を書くかたわら雑誌や新聞の編集に心血を注ぎ、本業の小説では作中人物と一体にな

って苦しみ、泣き、笑い、最後には自分の作品の公開朗読で生命を擦り減らして不歸の客となってしまう。まさに彼の生涯は、「愚かれた男」の生涯であり、一時の休息も知らぬ全力投球の人生であった。

【一六三】

寂しい人生の裏側を垣間見たが故に、ディケンズの幸せへの志向には普通の物差しでははかれないほど激しいものがあった。彼の心に成功の種子がまかれたのは、子供の頃父親に連れられて散歩していた時に目にしたギャツ・ヒルの広大な屋敷に、一生懸命に働けばいつかは住めるようになると父親に言われた時であった。その種子は見事に成功の花を咲かせ、彼はついにその屋敷を手に入れるのである。俗に夢が現実になると言うが、彼の場合、強引に夢を現実にしたわけで、そこには才能とか努力以上に執念のようなものを感じられるのである。しかし、弛緩を知らない彼の人生にも時として暗い影が忍び寄り、不幸な過去が心の空隙から顔をのぞかせ、寒々とした風が吹きつけてきたことも事実である。澆刺と成功への階段を昇ってきた青春が過ぎ人生の重荷がどっと押し寄せてくる。仕事に行き詰まったり、次々と生まれてくる子供の養育の問題や、妻ケイトとの感情の齟齬といった現実のしがらみの中で、彼は不幸を身にしみて感じるがあった。『愚かれた男』が書かれた一八四八年には、ディケンズは一つの危機に差し掛かっていた。「私には力がない。私はとてもみじめだ。家庭の暖炉が厭わしい。放浪者になりたい」といった本音らしきことも漏らしている。姉のファニィが肺結核で死んだのはこの物語に着手する一ヵ月前の九月二日のことであった。三十六歳のディケンズが、この時、『リトル・ドリット』のアーサー・クレナムのように自己に失調を来していたことは当然考えられることである。

最初に引用した自叙伝の断片が書かれたのはこの時期であったが、現実の抑圧感は必然的に過去の不幸と連結し、マライア・ビードネルとの不幸な恋、最愛の義妹メアリ・ホガースの死、さらには幼年時代の屈辱へと不幸の思いは拡大していく。死んでしまったと思っていた過去が、再び亡霊となって彼につきまとい始める。この年の四月に完結した『ドンビー父子』で、彼は孤独の影に包まれた非情な父親ドンビーを創造して、苦悩の一端をのぞかせている。『ドンビー父子』はディケンズの小説の中で、明から暗への転換点とな

【一六四】

る作品と見なされているが、この作品に続く『愚かれた男』は、ディケンズの苦悩がさらに高まったことを示している。過去の不幸な亡霊を殺すには、すべてを心の闇から解き放つ他なかったであろう。その意味で、翌年の『デイヴィッド・コパフィールド』の誕生は必然であったとも言えるのである。

サマセット・モームは、『人間の絆』の「序」で、「当時もっとも人気のある劇作家と

してしっかりと地歩を確立するや、私は過去の数々の記憶に再び取り愚かれるようになった。それらは眠っていても、歩いていても、下稽古の時も、パーティの時も執拗によみがえってきて重荷となったので、私はその記憶から解放される唯一の方法に訴えること、つまりすべてを紙面に書くことに決めた。……その時、私は三十七歳であった」と述べている。作家としての気質は違うとは言え、二人の作家がほぼ同年齢の時期に、同じような心境にあったことは興味深いことである。ディケンズにしてもモームにしても、自叙伝を書いたからと言って過去の亡霊から解放されたかどうかは疑問である。ただ、それぞれの作品が一つのカタルシスの働きをして、二人の作家に新たな出発点を与えたことは確かであろう。

『デイヴィッド・コパフィールド』を控えた前年に、『愚かれた男』が書かれたことは注目に値する。自叙伝となる『デイヴィッド・コパフィールド』で白らの過去を清算する前に、ディケンズは『クリスマスの読み物』の中の自叙伝とも言える『愚かれた男』で、過去に苛まれる人間の姿を克明に描いている。「そのこけた頬、ぎらぎらと光る落ちくぼんだ目、……人間性という大海原が押し寄せ打ちのめす唯一の標的となってきたかのごとく、その白髪がもつれた海草のように顔に垂れ下がっている……」と紹介される主人公レドローはディケンズ自身の影であり、両親から幼くして見捨てられ、努力に努力を重ねて成功への階段を一つ一つ上がって、功成り名を遂げた途端、最愛の妹を失うレドローは、たしかに当時のディケンズの姿と重なってくるのである。

【一六五】

レドローは、過去に苛まれるが故に、記憶を永遠に喪失でき、現在のみ生きる事ができれば、人間はどんなに幸せになれるだろうと考える。彼は、過去が「悲しみ、災い、苦しみの連続に過ぎない」のではないかと考える。たしかに、多くの人間にとって過去は思い出したくないもので、面目のない過去をできれば葬りたいと願うものである。たとえば、『クリスマス・キャロル』で、スクルージの前に現われる過去のクリスマスの幽霊は、頭のとっぺんから放射する煌々たる光で、あますことなく過去を照らし出すのであるが、それを見たくないスクルージは、幽霊が腋の下にかかえている消灯蓋を帽子代わりにかぶせて、その力を失わせようとする。スクルージは幽霊によっていやおうなしに自分の過去を見せつけられるのであるが、レドローは亡霊との取り引きによって、自分の記憶を譲り渡す契約を交わす。念願かなって、彼は人の不幸を見ても何一つ心を動かされないようになる。しかし、「おまえに授けた贈り物を、おまえはどこに行こうとさらに人に授けることになる」という亡霊の予言が現実となって、彼が接する人間はすべて無情で恥知らずの人間に変わってしまう。愛が憎しみに、喜びが悲しみに、思いやりが利己主義に即座に変わっていく姿は、わずかではあれ人間性の名残をとどめるレドローの心を激しく掻き乱し、彼は自分の力が他に及ぶことを恐れて自室に引きこもり、絶望のあまり死ぬことを考

える。その時、管理人の妻のミリィが彼の部屋の扉を叩く。ミリィがかたくなに自室に閉じこもうとするレドローに必死に呼びかけるこの場面は、レドローの心の中に潜む善と悪との葛藤を具象化した、実に印象深い場面となっている。結局、彼はミリィの呼びかけによって死の世界から救い出され、「この物質界には、私自身が教えてきたように、余分なものは何一つないのだ。この驚くべき構造を支える一単位、もしくは一原子たりとも失われるならば、壮大な宇宙にも空隙が生じる。今になって分かる。人間の記憶の中にある善や悪、幸や不幸についても同じことが言えるのだ」という認識に達する。ミリィの言うように、「苦しみや悲しみがなければ、私たちを取り巻いている善きこと

【一六六】

の半分も分からない」のである。そして、忘れることではなく、「被った不幸とそれに対する許しとを一度に思い出すならば、それはとても幸いなこと」なのである。

強突張りのスクルージは、過去の記憶を呼び覚まされることによって、少しずつ人間性を回復していき、『炉辺のこおろぎ』のジョン・ピアリピングルは、過去を思い出すことによって妻に対する猜疑心から救われる。忘れようとする代わりに、人は「主よ我が記憶を褪せしめ給うなかれ」と祈らなければならないゆえんである。それがまたキリストの愛を記憶することでもあるのだ。『愚かれた男』における主張はそこにあり、その精神は、『クリスマスの読み物』全体を貫いて流れている。

ディケンズが死んだ時、一人の少年が、「ディケンズのおじさんは死んだの、そしてクリスマスのおじさんも死ぬの?」と言ったという話が伝えられているが、この話は、ディケンズとクリスマスとの深い結びつきを如実に物語ってくれる。ディケンズは、何らかの形でクリスマスにちなみのある作品を数多く残している。彼は、一八四三年のクリスマスに『クリスマス・キャロル』を発表して以来、『鐘の音』(一八四四)、『炉辺のこおろぎ』(一八四五)、『人生の戦い』(一八四六)、『愚かれた男』(一八四八)、と大作の合間に次々とクリスマスにちなんだ作品を発表し(これらは『クリスマスの読み物』に収められている)、その後も彼の死の三年前までクリスマス物の発表を続けて、今日、『クリスマス物語集』という形でまとめられている二十一篇の作品を残している。

「ディケンズのクリスマスほどディケンズ的なものはない」と、『クリスマスの読み物』の「序」で E・ファージャンが述べているが、ディケンズはこれらの作品の中で、彼特有のクリスマスを演出している。戸外の厳しい寒さ、幽霊、「じゅうじゅう音を立てて、中の詰め物がどつとでてくる鷺鳥」、さらに家庭の中心にあってあかあかと燃える暖炉・・・これらはすべてクリスマスという舞台に不可欠な要素である。そして

【一六七】

その舞台で主役を演じるのは、子供や老人、名もなく貧しい庶民、病いに苦しむ人たちである。現実が寂しく辛いものであるが故に、一年に一度のこの祝祭に人々の心は高揚し、現実の桎梏から解き放たれて人々は無何有の郷に生きるのである。

クリスマスはディケンズの心のふるさとであった。彼は、『骨董店』のネルや『デイヴィッド・コパフィールド』のアグネスなどに代表される天使のような女性たち、さらには、『オリヴァ・トウィスト』のブラウンロウ、『ドンビー父子』のカトル船長、『互いの友』のポフィンなどのような現実離れした底知れぬ善人を作品に登場させて、その感傷性がとやかく言われるのは確かである。そういった人物の評価はさておき、彼らはみなクリスマスの子なのであり、いつしか人間が住んでいたことのある、そして現実の中で見失ってしまった楽園の住人なのである。人間が現実の色に濃く染められて、その輝きを失っているとしても、楽園の美しさは変わることはないのだ。

ディケンズは平凡な日常生活の中に、そして平凡な人間の中に隠された美しい生の律動を聞き取ることのできた詩人であった。詩人であるが故に、彼は、無窮の夜空にきらめく星の中に、風の音に、夜のしじまの中に、歌声に、鐘の音に、さらにはこおろぎと鉄瓶とのかけ合いの中に厳かなるものの存在を感じ取ることができたのである。

* * * * *

本書は、Charles Dickens の *The Haunted Man* の初訳である。翻訳に当たっては、The New Oxford Illustrated Dickens 版を使用した。

【一六八】

おわりに、翻訳の機会を与えていただいた故田辺昌美先生ならびに峯子夫人、あぼろん社の伊藤武夫氏に心からの感謝を申し上げたい。

訳者

昭和五十七年三月一日

この電子テキストは、訳者の藤本隆康、篠田昭夫、志鷹道明各氏と、あぼろん社の許可を得て、名古屋大学国際言語文化研究科の松岡光治と先端文化論講座の山本圭が共同で作成したものである。最終更新日：平成 17 年 11 月 30 日

